
深き沈黙の娘

木綿

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深き沈黙の娘

【Nコード】

N8772S

【作者名】

木綿

【あらすじ】

コイントス。

遠野ふきは、生き別れの父を尋ねてシチリアへ渡った。だが自分が生まれたことさえ知らない父を前にすると、彼を苦しめた女の娘であるふきが名乗っても拒絶されるだけではないかという恐怖が先に立ち、ふきは沈黙したまま無為に年月を過ごす。

父の隣で笑う美しい妻と娘の存在。父への復讐心に燃え執拗に命を付け狙う女アビガとの戦い。心ときめかせた相手の冷たい態度。敵になり味方になりふきを翻弄する従兄弟。悪夢となって甦る葬り去

つたはずの忌まわしい過去。現実はいつだって残酷で、ふきは精神を磨り減らしていく。愛と憎しみが同じコインの裏表なら、自分が宙に放り投げたコインはどちらの目を出すのだろうか。

1・エンツォ・ナンニーニの憂鬱

「シニョール・ナンニーニ？」

エンツォ・ナンニーニは顔を上げた。リストランテのテラス席でのひとり優雅なランチタイムを邪魔された不快感を隠そうとしたが、とつさのことで完璧にはいかなかった。

目の前に立っていたのは若い男だった。ドルチェ&ガッバーナのシャツとパンツに身を包み、マルタ十字のシルバーネックレスを首から提げ、ブルガリの香水の匂いを纏っている。

エンツォが目を合わせると、男は笑って挨拶した。訛りのない完璧な標準イタリア語だった。エンツォはいっそう不快感を募らせた。シチリア訛りのかけらもない余所者。男の顔はどう見ても東洋系だった。

無視を決め込んでいると、男は笑顔を少し歪めてなおも言葉を紡いだ。

「甥の顔もお忘れか、ズイーオ・エンツォ？」

一瞬、呼吸も忘れた。

「なんてね。20年近く会ってないから当たり前か。俺はタクミ、貴方の兄口メオの息子です」

「……」

「日本語がお分かりにならないわけではないだろう。貴方に話があります」

「Non mi interessa. (興味はない)」

「そう言わずに。貴方の命に関わる話だ」

エンツォは店の者を呼ぶために手を挙げた。目の前の若者を追いつ出させるつもりだった。

「新しい腎臓は要らないのか？」

打ち鳴らそうとした指は途中で動きを止めた。もう一度東洋系の男を見上げる。男は満足げに笑った。

「とても蜂の巣にされた男とは思えない。一人で外食までこなすとはね。だけど無理はいけない、一番酷くぶち抜かれた腎臓は、もう両方ともものの役に立たないんだろう？ 人工透析が欠かせない体で、カポナータにピッツアにタリアテッレ、ドルチェはカンノーロ。死に急いでいるようなものだ」

「 黙れ」

やっぱり日本語喋れるんじゃないか、と笑う男が小憎たらしかった。

「その余命幾ばくもない命を救って差し上げよう。替えの腎臓を手配するよ」

「何を藪から棒に。信用できると思うか？」

「そんなことを言ってられる余裕があるのかい？ 嫁の姓まで名乗ってファミリアから逃げたくせに、日本も日本人も大嫌いなくせに、祖母さんに泣きつく程切羽詰ってるんじゃないのかい？ しかもスカロローネのコネでも適合者はまだ見つかっていないんだろう？」

スカロローネ！

タクミの言う祖母さんというのは、エンツォの母ナオコのことだ。半世紀近く前、黒尾直子は日本からわざわざイタリア半島の長靴に蹴られる三角形の島へ渡ってきて、マフィアと癒着した真つ黒な商売人ルツアスコ・スカロローネと親しくなり、子供を二人生んだ。下の子がエンツォである。

「スカロローネに泣きついた？ それは私への侮辱か」

エンツォはマフィアと癒着した実家の商売に嫌気がさして出奔した。まっとうな世界で職に就き、結婚し、家庭を設けた。今更、何があるうとルツアスコを頼る気などない。今この命が危ぶまれているのだってマフィアのいざこざに巻き込まれたせいなのに、たとえば死んでもこの期に及んで関わりたくはなかった。まして泣きつくなど、そこまでプライドを捨てられるものか。ただ母には知らせておくべきだと思っただけだ。

「さてね。ただ直子祖母さんが俺を呼んだのは確かだし、俺の渡航

費やら滞在費やらはスカローネとシニストラリの財布から出てる」

シニストラリ。シチリアに根を張るマフィア的一大ファミリーア。エンツォの実家スカローネの寄生先。

「成程、だから君が出張ってきたわけだ。かのアルエ・シニストラリの子」

エンツォの兄ロメオは、シニストラリの娘と結婚した。あからさますぎる政略結婚だった。案の定というべきか結婚生活は惨憺たるもので、ロメオは逃げるように日本に移住しアルエは精神を病んで一大スキャンダルを巻き起こして死んだ。それで出来た溝を埋めるのにルツアスコがどれだけ東奔西走したか、興味などなかったがエンツォの耳にも届いてきた。ビジネス上の取引こそ残ったものの、スカローネとシニストラリの間にはしこりが生まれた。

おそらく母が、死なせた嫁の実家を頼ったのだろう。シニストラリが臓器売買に手を染めているのは周知の事実だ。だがアルエの一件もありシニストラリに無償の善意は求めるべくもない。そこでアルエの血を引く、ロメオの息子を担ぎ出してきたというところか。

だが、タクミは首を横に振った。

「俺とシニストラリに血縁関係はないよ。俺の母親は日本人で、この体にシチリアの血は4分の1しか流れていない。スカローネもシニストラリも、黒尾の姓さえ名乗れない。俺は貴方やファニアと同じ愛人の子、だから今回のことはシニストラリなりの謝意だよ。貴方は彼らの抗争に巻き込まれただけだからね」

娘のことまで！

人のプライヴァシーにずかずかと踏み込んでくる男への怒りを、プライドだけでどうにか押さえ込む。マフィアの世界は本当に虫唾が走る。秘密など許されず、常に丸裸にされている気分だ。

「それなら君はスカローネにもシニストラリにも関わらず生きていけば良かっただろう。私に腎臓をくれるために、わざわざ首を突っ込んできたのか？ 善きサマリヤ人というわけだ」

「残念ながら、型が一致しなかったので俺の腎臓は差し上げられな

い。ドナーは別の人間だ。このドナーこそが善きサマリア人でね、相手がマフィオソだろうと何だろうと人助けになるなら腎臓のひとつくらい喜んで差し出すような奴だ。その善きサマリア人をマフィアの世界に関わらせたくないから、俺が窓口になっている」

タクミは懷から封筒を取り出し、テーブルの上に置いた。

「サマリア人からの手紙だ。顔も名前も知らない貴方のことをとても案じている。血液型やらHLA型やらの検査結果も同封してある。それとドナーは貴方の主治医のところへも検査に行かせた。そろそろ貴方にも連絡があるだろうね」

ウェイターがエスプレッソを運んできた。テーブルの前に立ったままのタクミを見て、席を用意しようかと訊ねてくる。

「No, grazie. Ora vado via.」（結構です、ありがとう。もう行くから）」

エンツォが何か言う前に、にこやかにタクミが断った。非の打ち所のない笑顔のまま、エンツォに向き直る。

「それじゃ俺はこれで失礼するよ。ズイーオ、余計なおせっかいかもしれないけどエスプレッソはやめたほうがいい。くれぐれもお大事に」

そのままタクミの姿はシチリアの陽光の中へ消えていく。後に残ったのは封筒とエスプレッソだけだった。

エンツォは熱い息を吐き、エスプレッソに砂糖をぶち込んでぐしゃぐしゃと力任せにかき混ぜた。

家に帰っても妻は挨拶ひとつせず、萎縮した様子でエンツォを窺い見るだけだった。溜め息を吐きたいのはこちらのほうだと思っただけ、何も言わずまっすぐ自室に向かった。

ジャケットを脱ぎ、タイを外し、一息ついたところで躊躇いながらも封筒を手取る。結局、自分も命は惜しかった。

封を切って手紙を取り出すと、石鹸のような清涼感とイチゴのよ

うな甘酸っぱい香りがほのかに立ち上った。

文章は、ところどころ不自然な感はあるが一応標準イタリア語で書かれていた。名はタクミに言われて明かせないと書いてあり、その非礼を詫びていた。ただ筆跡や文体から女性であろうことだけは察しがついた。あまり手紙を書くことに慣れていないようで、高い教育は受けていないのかもしれない。あるいはイタリア語が母語ではない可能性もある。

書き手の女はエンツォの腎不全が病によるものではないことは知っているようだった。流石にマフィアの銃撃戦に巻き込まれたことまでは知っている様子ではなく、何らかの事故に遭ったという程度の認識らしい。エンツォの身に降りかかった不幸に対して、真摯な気遣いの言葉が並んでいた。

自分が適合者であること、移植手術に喜んで協力する意思があることがはつきりと書かれており、最後はエンツォの快復を切に願う言葉で締めくくられていた。

手紙を持ってきたタクミの傍若無人な態度がなければ、涙が潤んだかもしれないというくらいの内容だった。少なくとも文面からは、混じり気なしの善意しか感じられない。

だが、シチリアの暗部を知らないではないエンツォは、尻尾を振って飛びつく気にはなれなかった。善きサマリア人などエンツォは知らない。臓器移植はドナー側にも相当の負担だ。それを全くの善意から引き受けるような人間がいるなどは、エンツォにはとうてい信じられなかった。

だが忌々しいことに、エンツォの体にはもうあまり時間が残されていないことも確かだった。週に数回の人工透析を受けてもなお、緩やかに悪化していく。

ベッドサイドの電話を見やると、エンツォ専用の番号にメッセージが残っていることを知らせるランプが光っていた。ナンニー二家では複数の番号を使っている。プライベートや仕事用などで使い分けるためだ。エンツォ専用の番号はナンバーロック付きで、妻や娘

といえども暗証番号は教えていない。

ナンバーを入力しロックを解除して、留守録のメッセージを再生した。主治医のマツツオラーリからだった。弾む声で、ドナーが見つかった、手術の日程を相談したいから折り返し連絡をくれ、と吹き込まれていた。秘書のクランキからも着信があった。連絡が取れませんがどちらにいらっしゃるんですか、移植手術の件でマツツオラーリ先生が連絡があるそうです、という内容のメッセージが残っていた。

タクミの、見下すような笑いが脳裏に浮かぶ。反吐が出そうだった。

それでもエンツォは、自分が受話器を取るしかないことも分かっていた。その前にどれだけ長く躊躇うか、早いか遅いかの違いしかない。

2・緒貝巧の暗躍

夜、パレルモの街の片隅にあるバーで、緒貝巧はワインを飲んでいた。

イタリアワインは好きだ。エトナ・ロッソをボトルで注文した。日本でも手に入るワインだが、シチリアまで来て他の産地のものを飲む気にもなれない。勿論現地だけあってご当地ワインの種類も豊富なのだが、種類が多いとはつまりピンキリということだ。

それに、活火山の名前は今晚会う相手に相応しい。さて、あの娘は今日は噴火するかしらないか。

などと思っているとバーのドアが開き、女が入ってきた。待ち人来たり。

「チャオ、タクミ」

「チャオ、アビガ」

「クレード・ケ・トゥ・スイア・コンテンツ」

不機嫌そうに紡がれた声に、巧は両手を挙げた。

「イタリア語はもう勘弁してくれ。日本語で話そう」

「あら、どうして？ 何の不自由もしないくせに」

「するさ。俺が勉強したのは標準イタリア語だよ。ここへ来てから朝から晩までシチリア訛りで、耳と口が疲れきってるんだ」

「喋れるくせに言われてもねえ」

女　アビガはプロセツコをグラスで注文した。泡が引くのを待たず、3分の1を流し込む。

「それで、進展は？」

「年内に手術だ」

アビガが一瞬動きを止めた。

「……もう連絡があったの？」

「即決だったね」

「意地汚いこと」

女は嗤った。良い笑顔だと巧は思った。

「それでもこれから検査の嵐で時間が掛かるさ。エンツォ・ナンニ
ーも命が掛かっているとすれば真剣にもなるだろう」

「それにしたって、たかだか2年でしよう。心臓と違って腎不全は
透析である程度しのげるし、10年以上適合者を待つのだってザラ
という状況で、降って沸いた幸運にまあ恥ずかしげもなく飛びつい
ちゃって。HLA型が完全一致したわけじゃないんだから、見送っ
て完璧な適合者を待ったほうが良いんじゃないの」

「エンツォはハーフだから、もともと適合の可能性が低いんだよ。
HLA型の分布は民族によって偏りがあるからね。これ以上待つて
も、より良いドナーの出現はないと踏んだんだろう。直子祖母さん
は致命的なところが不一致で、親父に至っては完全不一致だったし」

「普通兄弟って25%の確率で完全一致なのにねえ」

「それは同時に25%の確率で完全不一致ってことだよ。大体、そ
のパーセンテージは両親が同じだった場合だろう」

「つままない。もっともって透析で苦しんで欲しかったのに」

「なら止めさせるかい？」

「出来ないわよ。この件に関してはふきが頑として譲らない。どう
したって止められやしないわ」

「ふきちゃんがね」

遠野ふき。今回のドナーの名前だった。

21歳の日本人の女で、高校卒業後すぐにイタリアへ渡り、語学
学校に数ヶ月通った後、レストランのウェイトレスやジェラテリア
の売り子などの傍ら、日本人観光客や留学生を相手に通訳やツアー
ガイドで小金を稼ぐ、その日暮らしのアルバイトだった。

「名は体を表すってほんとね。信じらんない、生まれる前に既に捨
てられた身でさ。エンツォ・ナンニーはふきのことなんて知りも
しないのに」

「君はエンツォを憎んでいるからね」

「ええ、勿論」

初めて会った時から、アビガはエンツォへの復讐のためだけに生きていた。生まれた時から、と彼女は言う。

「アビガ。ふきちゃん。君も不思議だね。」

ふきちゃんは誰よりもエンツォを慕っていてシチリアまで渡ってきたのに、拒絶されたらどうしようと疑心暗鬼になって未だに名乗りを上げない。出さない手紙を書き綴るだけだ。

一方でアビガはエンツォへの憎しみに凝り固まっていて、彼をどう苦しめて殺すか、それだけしか考えてないように見える。全く別の方向を向いている。

それでもって、思考も行動も双方向へ筒抜けなのに、互いに互いをコントロール出来ていない」

アビガは肩を竦めた。お前は分からないで良い、とでも言いたげな表情だった。

巧は深追いせずに話題を少し戻すことにした。

「名は体を表すって？」

「知らないの？ ふきって漢字でどう書くか」

「落？」

テーブルを指でなぞると、アビガは首を横に振った。携帯を取り出し、プッシュする。『父嬉』と文字が出た。

「父の喜びの娘。ふきの母親もヘンな女よね、普通女の子の名前に

『父』なんて字使う？ そのせいなのかふきはやたらファザコン。

名乗り上げる勇氣もなくせに、臓器をほいっと差し出すんだから、救いようのないバカ」

「はは。それは君だろう、アビガ」

「どういう意味？」

「アビゲイル。ヘブライ語で、意味はやっぱり『父の喜び』 君がエンツォを憎んでいるだって？ とんでもない、君が望めば手術の中止は訳ないことなのに、ふきちゃんが、なんて持って回った言い方をして。エンツォに助かって欲しいのは誰よりも君のくせに」

「……」

突如顔に冷たい感触が広がった。しゅわしゅわとはじける泡が滴り落ちる。

「プロセツコ。良いね、美味しい」

「タクミ。二度と馬鹿を言わないで。アビガという名の意味は、エソツオ・ナンニー二への復讐。それ以外の何物でもないわ。」

「こうもすんなり移植手術が決まって私が嬉しいとも思ってるの？ ハラワタが煮えくり返るのをどうにか抑えてんのよ。」

「止めたいに決まってるじゃない。それでも、結局ふきが主で私は従よ。あっちが本気になれば、こっちは逆らえない」

「ドルチェ&ガッバーナのハンカチでスパークリングワインを拭う。ブランド物は洗濯機にかけられないから厄介だ。放り投げておけば手洗いしてくれる妻は日本に置いてきた。」

「まあでも、移植するならするで良いわ。トップが病んでるせいでナンニー二の事業もそろそろ危ないし」

「立て直して欲しいのかい？」

「勿論。今みたいにゆっくり衰退するなんて全然ドラマチックじゃないからね。ナンニー二の事業は栄華を極めたところで真っ逆さまに転落してもらわないと、ショックが足りないじゃない」

「えげつないね」

「お褒めの言葉をどうも」

「復讐しようと思ったら、相手を立てて得意の絶頂まで持っていって、それから叩き落さなきゃ意味がありません。」

「あれは誰の言葉だったか。アビガはその教えを忠実に実行しようというわけだ。」

面白い。

「巧は喉の奥で嗤う。嘲笑が口から零れ出す前に、エトナ・ロツソを流し込んで押し戻した。」

「ところで、どうすんのよ。こんな人目のあるところで会おうなんて。」

「私の復讐のためには、どんな些細なミスだって避けなきゃいけない」

いのよ。もし後々になつてあんたがしたことや、私とあんたの繋がりとかバレたら全部水の泡よ」

「おや。君はここに来ている。それはふきちゃんの意味だろう？どんなに消極的でも、知っていてあえて君の足を此処へ運ばせた運ばせるのを止められなかったのはふきちゃんだ。なら今更だろう」

「ふきだけが知っているのと、周りのどこから漏れる可能性があるのと同じや大違いよ。どうするのよ」

「心配要らないさ　おいで」

タクミはボールに会計を済ませると、アビガを伴って店を出た。何が心配要らないのよ、と文句を言うアビガに、口を閉じるように言う。此処から先は、迂闊に日本語で喋って注意を引くわけにいかない。

15分ほど歩いてボールから離れたところで、アビガを抱き寄せる。耳元に口を近づけ囁いた。人目には男女がいちゃついているようにしか見えないはずだ。

「家までは送らない。そのほうが良いだろう」

アビガは訝しげに、それでも頷く。巧は言葉が続けた。

「今夜のことは心配要らないよ、本当に。何なら明日の新聞を見れば良い。それじゃ、おやすみ」

頬にキスをして、巧はアビガから離れた。そのまま振り返らず自分のホテルに向かう。

アビガはヒールを履かない。背後から彼女の足音は聞こえなかった。

翌朝、巧はエスプレッソを飲みながら普段は読まないローカル新聞に目を通した。

昨夜とあるボールが放火されて全焼したらしい。そのボールの店主はマフィア反対運動に精力的で、ピッツォ、すなわちマフィアへ

のみかじめ料を頑なに拒み続けてきた。その事に対するマフィアの報復だろうと書かれていた。シニストリという名こそ書かれていなかったが、その地区がシニストリの縄張りであることは周知の事実だった。

巧の渡航費、滞在費、手数料その他は前払いで口座に振り込まれている。やりとりは全てシチリアに来る前にメールで済ませ、直接の接触は一切ない。ホテルだってシニストリと対抗する勢力の息のかかったところを選んだ。

たとえスカローネの直系でも、巧は非嫡出子だ。スカローネと、ましてシニストリとの繋がりなど、警察が辿れる筈はない。

そもそも、観光客にしか見えない日本人など、誰も疑いもしないだろう。

巧は無造作に新聞をラックに戻した。

心配ご無用、アビガ。

昨夜の全ては黒い灰の中だ。

3・遠野ふきの回想

その朝、遠野ふきは雨の中で目を覚ました。

疲れが取れない。3日前から楽しみにしていたオフの日なのに、昨日まで計画していた買い物も掃除もする気になれなかった。

朝食を作る気にもなれない。カップ入りのブラキヤミソールの上にシャツを羽織り、カプリパンツを履いて、化粧もしないで外に出る。数十歩歩いたところにボールがあつた。夜になれば酒を出すような洒落たところではなく、コーヒートパンくらいしか出してくれない。それでも近くて安いから文句は言えなかった。

ブリオツシュとカプチーノを注文し、頬張りながら新聞に目を通す。"fuoco" という文字が目飛び込んできた。「火」という意味だ。

ボヤでもあつたのかと思って記事を読んでもみると、どうやらマフイア絡みの放火事件らしい。ここから少し離れたエノテカ・ボールが焼き打ちされたらしい。

いっぺんに食欲がなくなつて、ブリオツシュを半分残してふきは席を立つた。休日の朝にボールで朝食を摂るときは、帰りに少し近所を散歩するのが習慣なのだが、今日はとてもそんな気になれなかった。雨も降っていることだし、まっすぐ家に帰る。

家に戻ると、ルームメイトのガイアはまだ起きていないようだった。ふきは自室に戻ってベッドに倒れ込む。

何とはなしに、サイドテーブルの一番下の引き出しを引いた。日記帳が数冊。そのどれもに、未投函の手紙が溢れんばかりに挟まっている。宛先は全て同じだ。もう2年半にもなる。何度も父親に連絡を取ろうと手紙を書いては、出せずに終わる。そのくせもう出さないと分かっている手紙でも捨てきれないのは、未練なのか何なのか。

記憶を手繰る。初めて書いた手紙はどんな内容だったっけか

黒尾燕三さま

はじめてお手紙します。突然で驚かせてしまったら本当にすみません。

私は遠野ふきといいます。先々月から、あなたの経営するリストランテ、Bella Crista で働かせてもらっています。お店で何度かお見かけしたことがあります。おわかりでしょうか？ 私はまだ新米の下っ端ですから、ご存じないかもしれません。でも、今のスタッフでアジア系は私だけです。リストランテにまた来てくださったらすぐにわかると思います。

でも、今回お手紙を書いているのは、お仕事の話ではありません。どうしてもおたずねしたいことがあるのですが、とてもプライベートなこと、まずそのことをおわびします。ろくに面識もない私が、いきなりプライバシーに踏み入るようなお手紙をさしあげて、本当に申しわけありません。

突然ですが、私はあなたの娘かもしれないのです。

本当に、本当に失礼な手紙かもしれませんが。それでもどうかお許してください。どうか不快にならないで、できれば最後まで読んでください。

遠野陽子を覚えてらっしゃいますか？ 私の母です。私の生年月日はXXXX5年2月16日です。私が生まれる前の年、XXXX4年の夏ごろまで、あなたと私の母は男女の関係にあったと聞いています。

もちろん、だからといって確証があるわけじゃありません。おふたりは結婚もしていなかったし、母は私が生まれてからも結婚してからも、恋愛関係ではかなり自由な人でした。なんにしても私の生まれる前のことなので、私にはよくわかりません。母があなたに妊

娠を告げたかどうか、私は知りません。

母は、私の父親はあなただと言っていました。私の顔は、イタリアの人にはアジア系にしか見えないみたいですが、日本では逆に混血児にしか見えなかったようで、いつもどこでも何かしら言われました。母の話では外国の血が入った人ときあつたのはあなただけしかいないそうです。つきあつた期間からいっても、たぶん私の父親はあなただろうと。

あなたとはケンカ別れで、連絡先も知らないと言は言っていました。

私は18歳です。日本ならともかく、ここイタリアではもう成人です。だから今さら何かしてもらおうとは思っていません。本当です。

ただ、私は自分が誰だか知りたいんです。自分が誰の血をひいているのか、それを知りたい。

身勝手ですね。あなたにはもう家族がいて、私にそれをひっかきまわす権利なんてないのに。

それでも、私は確かめたいんです。会っていただけないでしょうか。会って、お話しして、事実を明らかにするのに協力していただけないでしょうか。

もし私があなたの娘でも、だからといってあなたに迷惑をかけることはしません。ご家族に不愉快な思いをさせるようなら、あなたとのつながりは秘密にして一生誰にも言いません。

そして、もし事実無根の言いがかりだったら、本当に本当にごめんなさい。

ここまで読んでくださってありがとうございます。心から、連絡をお待ちしてます。

1月26日

遠野ふき

封筒にはイタリア語で宛て先と宛名も書いてある。住所は会社のものだが宛名は個人名で、S・P・M・（親展）と明記した。切手まで貼ってある。

それでも、出せなかった。拒絶されたらどうしようと、そんなことばかり怖がつて何も行動を起こせなかった。

手紙を挟んだまま、日記帳をめくる。毎日欠かさずとはいかないものの、平均して三日に一度は書いていた。ふきにとって日記は普段言えない愚痴を書きつけて不満やストレスを吐き出す場だから、読み返してあまり楽しいものではなく、普段は手に取ることもない。今日に限ってなぜ昔の日記帳を開く気になったのか自分でも分からなかった。

一昨年の1月末から2月初めまでの日記は、出せない手紙のことばかりだ。今日も出せなかった、明日こそ、というような文章が並んでいる。2月9日の日記になって、ようやく諦めたようなことが書いてあった。

l u n e d ? 9 f e b b r a i o

やっぱり、結局出せなかった。本当は私、出す気なんてないんだろ。だって怖い。この日記の中でさえ、あの人の本当の名前も書けない。

手紙を出すことは、しばらくあきらめよう。私には早すぎる。手紙を書くまでは勢いだったけど、出すのは……とてもじゃないけどそんな心の準備ができない。

それより……日記だけでも、お父さんって呼んでいいかな？
大丈夫だよ。誰にも見せるつもりないし、どうせ日本語で書くし。

あの人……お父さんだけは日本語わかるだろうけど、悲しいかな今は部屋の外にも持ち出さない日記を見られるような関係じゃない。

まずはそこから、始めよう。

s a b a t o 1 4 f e b b r a i o

自己嫌悪。何てことしちゃったんだろう。

お父さんにチョコを送りつけてしまった。B u o n S a n V
a l e n t i n o とだけ書いたカードを同封して。

差出人の名前も住所も書かなかった。なんて失礼なことしちゃったんだろう。

でも、名乗り上げる勇氣なんてなかった。親子かもしれないってことを言う必要はないけど、名前だけを書くのも怖かった。だって、「遠野ふき」がそれだけで拒絶されたら、きっと私は立ち直れない娘としてじゃなく、人間としてすら、いらないとか迷惑とか思われたらどうしよう？

でもそれなら、出さなきゃよかったのに。結局一番お父さんに迷惑なことしちゃったのかもしれない。

それに、出してから気づいたけど、バレンタインにチョコなんて日本人の発想だ。私だってばれたらどうしよう。どうしよう。どうしよう！

l u n e d ? 1 6 f e b b r a i o

19歳になった。ケーキ買って食べた。

ふきの手はページを繰るのをやめない。目は一昨年 of 3月を追う。

luned? 8 marzo

今日はイタリアでは女性の日。身近な女性にミモザの花をおくる日らしい。イタリアに来てはじめて知った。

誰も私にはくれなかったけど、ね。ミモザの黄色がやたら目についた以外は、ふつうに忙しいいつもどおりの日。今日も疲れた。

marted? 9 marzo

今日がお父さんの誕生日なんて知らなかった。

仕事先のリストランテにお父さんが来た。オーナーなんだから、来ること自体はめずらしくない。

ただふつうはランチにくるけど、今日はディナーだった。何より、貸切パーティーだった。

奥さんと娘さん、会社のえらい人たち、友達らしい人たち、大人数ですごくにぎわった。

ウエイトレスの仕事は忙しかった。同じタイミングで料理出さなきゃいけないし、苦手なスパークリングワインのサーブも逃げきれなかった。

私より3つか4つ年下らしい娘さん ファニア・ナンニーニさ

んは、「パパ！」って呼びかけてお父さんにキスしてた。何度も何度も。

私、仕事、ちゃんとできたのかな。

mercoled? 10 marzo

お父さんにバースデーカードを出した。

Tantissimi cari auguri di buon compleanno

お決まりの文句を書いただけ。また差出人の名前は書かなかった。出した後に自己嫌悪になるってわかってて、どうしてやるんだろう。

1日遅れの、無記名のカードなんて、いやがらせでしかないんじゃないかって出してからどんどん思えてきて、どつぽにはまってる。お父さん、いくつになっただろう。

今にして思えば、と21歳のふきは思う。

可愛らしい悩みでしかなかった。書いた当時はこの世が終わるかもしれないくらいの悲愴な気分だったが、それでもこの時が人生で一番穏やかで、幸せな時間だった。

誰もまだふきへの敵意を露わにしていなかったし、知りたくなかった事実もこの時はまだ知らなかった。

シチリアの太陽が苛烈さを増すにつれて、ふきを取り囲む現実もどんどん厳しくなっていた。

4・遠野ふきの追想

g l o v e d ? 2 2 a p r i l e

お父さんがまたベラ・クリスタに來た。奥様のクリスタベラさんと、娘さんのフアニアさん、それから秘書のレオ・克蘭キさん。今日はフアニアさんの誕生日だったらしい。ろうそく16本立てたケーキを運んで、4人だし16本なら分けるのにちょうどいいなという考えになるあたり私もウェイトレスの職業に染まってる。ツアーガイドや通訳だけじゃオフシーズンまで食べていけないから、副業のつもりで始めたウェイトレスなのに、すっかりこっちが本業みたくなってる。

……違うな。何で自分の日記で言いわけしてるんだろっ。

ほんととはテーブルに行くのもつらかった。だけど仕事だから、そんなことも言ってもらえない。一生懸命別のことを考えて、感情にふたをしてた。

ウェイトレスが副業とか。確かに私の就労ビザは観光会社の書類で下りたけど、ベラ・クリスタで働きはじめたのは理由なんて、お父さんの経営するレストランだから、それだけだ。ベラ・クリスタグループはバーとかジェラテリアとか菓子店とか幅広く経営してるのに、その中でレストランを選んだのは、お父さんがしょっちゅうここでランチするからだ。

まあもちろん、菓子店やバーよりはレストランのほうが外国人観光客が多くて、だから私を雇ってもらえたというのもあるんだろっけど。

……ああ、ひとつだけいいことはあった。私が経験を積んだおかげで、お父さんの注文を取りに行かせてもらえるようになったこと。これまでオーナーの接客なんて私みたいな下っ端には任せられなかったんだけど。

でもお父さんは事務的な話しかない。他の人とは多少世間話もするの。

ひょっとして、私のイタリア語まだまだなんだろうか。だから最低限しか会話しないよう、気をつかってくれてるのかも。

いや、でも、期待は禁物。私より他のスタッフのほうがつきあい長くて気心が知れてるってだけかもしれないし。

あれ、そういえば、お父さんはお母さんときあつたときは日本語しゃべってたんだよね。けっこう難しい漢字使って手紙とかも書いてたって言うし。……私、中国人だと思われてるのかな？

l u n e d ? 2 6 a p r i l e

お父さんがまたランチに来た。今日は秘書のクランキさんと一緒だった。

サーブは私がさせてもらえた。注文を取るのは支配人がやったけど、料理を運ぶのは任せてもらえた。

クランキさんは、近くで見ると意外に若かった。25にもなってるなそう。

会話の内容からも、秘書って言うより学生のインターンで仕事を教わってる、って感じだった。難しいビジネス用語はほとんどわからなかったけど。

でも、まあ、かっこいい人だった。スタイルいいし、顔もいいし、おしゃれだし。頭もよさそうだし。いいなあ。

嵐の前の静けさ、とは正にこの頃のことだった。

父との距離が近づいたようで嬉しかったし、ハンサムなレオ・クランキに淡い恋心を抱いて浮き立っていた。19歳にもなって、ま

るで中学生の恋愛のような他愛もないことが書き連ねられている。父のテーブルには積極的に自分が行き、支配人にまで頼み込んで出来るだけ関わらせてもらった等。レオとはやたら視線が合うような気がするだとか、父と一緒になくても単独でリストランテに来るようになったのを嬉しがっていたり等々。

けれども幸福なんて、次に深い不幸へ叩き落すために存在するものだ。

運命はターゲットを手中におさめると、奈落の底まで勢い良く投げ落とすためにまずは腕を高く振り上げる。幸運とは、落下の前のほんの束の間の時間に過ぎない。

それをちゃんと知っていた筈なのに、どうしてもこの時に限って勘違いしてしまったのだろう。

父に厭われていることを、レオ・克蘭キに疎まれていることを、どうしても気づかなかったのだろう。

早く気づけば、まだ修復のしようはあったかもしれないのに

domenica 13 giugno

バカだバカだ。私はバカだ。

何をカン違いして、ひとりで舞いあがって。

どうしよう。どうしたらいいんだろう。

克蘭キさんと会った。話があるって言われて、まさか生まれてはじめてのデートかと、浮かれてた私はどれだけバカなんだろう。克蘭キさんはまだ大学に籍はあるけど、ベラ・クリスタグラープの経営にもうかなり深く関わってる。仕事の話だった。こんなことを言われた。

「君の勤務態度についてだが、問題なくやっているとは思う。支配

人の評価でも、特にトラブルなく勤めていると聞いた。

だが 僕にはひとつ気になることがある。単刀直入に言おう、君はエンツォに個人的な感情を抱いているんじゃないか」

血の気が引くって、ああいうことだ。

仕事はちゃんとやってきたはずだった。お父さんの前でも、クランキさんの前でも、いろいろ内心で動揺することはあったけど、できるだけ表に出さないようにして、仕事はおろそかにしてないつもりだった。

だけど、クランキさんにはバレバレだったみたいだ。

「正直、この手のトラブルはよくあることなんだ。君が初めてではない。あけすけに言って、エンツォは見た目も良いし、ビジネスも成功していて、社会的地位もある。エンツォ目当てにベラ・クリスタに通い詰めたり、ウェイトレスのアルバイトに入って事あることにエンツォに話しかけようとする女性は後を絶たないんだ。

ストーカーになったり、奥さん クリスタベラに執拗な嫌がらせをした輩もいた。君はまだそこまでではないようだが、いつエスカレートするとも分からない」

「私 私、そんなことしません！」

「結構。だが、口では何とでも言える。

客やオーナーに接する際に相応しいものだとは思えない君の態度は、働き始めた当初から変わっていない。以前に比べて最近はかなり分かりやすいが、働き出してからエンツォに好意を抱いたわけではないだろう。初めから、エンツォ目当てでベラ・クリスタを選んだんだろう？」

それは事実だったから、何も言えなかった。

「正直、そんな浮ついた考えの従業員は必要ない」

「……クビ、ということですか？」

「解雇もやむなし、と僕は思っている」

「待ってください！ たしかに、オーナーがいらっしゃるから入店を決意したことは否定できません。だけど、私はこれまで何か具体

的に行動を起こしたわけじゃないし、仕事もちゃんとやってきたつもりです。それに、クビにされたら私は生活していけません。イタリアで外国人が職を見つけるのがどれだけ難しいか、ご存じでしょう？」

「確かに、君のサービスはちゃんとしたものだし、エンツォが来ても業務に支障をきたすほど我を忘れてはいないようだ。

そこで提案だ。君の仕事振りを評価して、解雇の提言はひとまず保留する。だが、もうリストランテでは働かないで欲しい。仕事が必要で辞められないなら、ベラ・クリスタグループのジェラテリアに移ってもらいたい。ちょうどこれから暑くなる、ジェラテリアには人手が必要だ。ジェラテリアに異動し、極力エンツォとの接触を持たず、出来る限り速やかにエンツォへの気持ちを忘れ去ること。それを誓ってくれるなら、この件に関しては不問にする」

生活費が必要ならアイスクリームスタンドの売り子でもして、二度とお父さんの前には顔を見せるな。そういうことなんだろう。

私はうなづくしかなかった。お父さんと離れたいわげがない。名乗れなくても、名乗れないからこそ、唯一の接点を失いたくなかった。

だけど実際問題、クビにされたらお父さんに会うどころか、食べるのにも困る。

「……私の態度は、そんなにひどいものでしたか？ あなたには見破られてしまったけど、できるだけ表に出さないようにしてきたつもりです。オーナーやご家族に迷惑をかけるつもりもありませんでした。それでも異動しなきゃならないんでしょうか。

リストランテの仕事は時間をかけてやっと覚えられたんです。メニューの種類とかワインの名前とか、いろいろ勉強したことをムダにしたくありません。これからオーナーの対応は他のスタッフに任せるようにして、私は他の仕事をやります。それでもだめですか？」

「駄目だ」

「どうしてですか」

「これについては、君だけの責任ではない。他言無用にしてくれ。エンツォはそもそも、日本人が嫌いなんだ」

「え？ ご自分のお母さまが日本人なのに？」

「流石に良く知っているな。調べたのか？ そういうストーリーのような真似も今後一切しないでくれ。言うまでもないが、エンツォの個人情報をお他人に話すのも絶対に駄目だ。」

エンツォは昔、日本で酷い人間関係のトラブルに巻き込まれたことがあるらしい。そのせいで日本人、特に若い女性が好きではないんだ。

勿論これはエンツォの個人的な事情に過ぎず、それは本人が一番良く理解している。だから彼は自分の好みを他人に押し付けたりはしないし、過去のトラブルと無関係な日本人に対しては感情を抑えて不当な差別などをしないように気を遣っている。君が日本人だと知っても彼が解雇しようとしなかったのも、サービスに文句を言わなかったのもその為だ。

だがベラ・クリスタはエンツォのリストランテだ。君が来るまでは、彼はあそこでのランチを心底楽しんでた。エンツォの仕事は常に忙しい。その中で、数少ないリラックスの時間だったんだ。

それを奪ったのはフキ、君だ。一介の従業員である君のことなどオーナーであるエンツォはどうとでも出来る筈なのに、自分の個人的な事情で君に不当な不利益を被らせるべきではないと、耐えているんだ。半年も遠慮を重ねさせておいて、まさかその気持ちを汲めないとは言わないだろう？」

もちろん、言えるはずがなかった。

お父さん

ずっと、迷惑だった？　ずっと、いやな思いさせてた？

どうしよう。どうしたらいいんだろう！

そのページには、やはり出さなかった手紙が挟まっている。
名乗るためのものではない。昂った精神状態のままに書き殴った
ような手紙は、内容にも筆跡にもその跡が如実に残っていた。

黒尾燕三さま

Sig. Enzo Nannini

はじめてお手紙します。突然の失礼、申しわけありません。

私は遠野ふきと申します。Ristorante Bella
Crista で働かせていただいている日本人です。

先日 Sig. Leo Cranchi からお聞きしました
が、今まで私の外見と生まれのせいでご迷惑をおかけしていたよう
で、本当に申しわけありません。これからそんなことはないように
気をつけます。

Sig. Cranchi はご親切にジエラテリア部門への異
動を提案してくださいました。心からありがたく思っています。

でも、私にはそんなご親切を受けとる資格はないかもしれせん。
あまり日本人がお好きではない理由もお聞きしました。昔の、日本
での人間関係のトラブルだとおっしゃってました。

あなたが日本にいたのは20年以上前のことで、しかも2、3年
もありませんでしたよね？

ご不快にしてみましたらすみません。もしかしてそれは、私の母
のせいですか？

母の名前は Yoko です。私は、遠野陽子の娘です。

我が親ながら、母はお世辞にも人格者ではありません。お恥ずか
しいことに、人様に迷惑をかけることはしょっちゅうでした。

日本にいらっしゃった頃、あなたと母はつきあいがあったと聞いて
います。もしかして、その時に母が何かとんでもない失礼をした

のではないのでしょうか。それで、日本人がお嫌いなんのでしょうか？もしそうなら、私は異動どころの話ではありません。ベラ・クリスタで働かせていただくなんて、とんでもないことでした。

どうおわびすればいいのでしょうか。何かつぐないができるなら、何でもします。どんなことでも言ってください。

もう私の顔も見たくないとおっしゃるなら、私はシチリアを離れます。二度と会いに来ません。

どうしたらいいんでしょう。

6月13日

遠野ふき

当人が今では全く使わない日本名で宛名を書いて、それではまずいかもしいれないと思いつて慌てて線を引き、後から修正液で消すつもりでその時はとりあえず下にイタリア名を書き直して逸る筆を進めた。

けれども書き終えてみると、投函どころか清書する気にすらならなかった。

自分がああ母の娘だとばれたら、本当に拒絶されてしまうかもしれない。ふきの母親は凄まじい人間だった。実の娘のふきですら、もう二度と顔も見たくないし、思い出すだけで鳥肌が立つ。母の夢を見て飛び起き、トイレに駆け込んで吐くのもしょっちゅうだった。父を日本人嫌いにした原因は十中八九ふきの母親だ。何ひとつ確証はないが、恐ろしくて確かめてみる気にもなれない。

自分の卑怯さに死にたいくらいの嫌悪を感じながら、それでもふきは何も言わず、仕事をジェラテリアに移した。それから今に至るまでのうのうとベラ・クリスタの、つまりは父からの給金で暮ら

している。

以来、天地がひっくり返ろうとも名乗る気は失せた。こんな卑しい人間を、誰が娘として愛してくれるというのか。母だって散々にふきを忌み嫌っていたのに。

名乗れるわけがなかった。

5・遠野ふきの追憶

事態は思わぬ方向へ向かう。悪い方であればあるほど、驚くばかりのスピードで進行する。

父に名乗れないとか、母の罪の責任だとか、そんなことを言っている余裕はすぐになくなった。それどころではなくなったのだ。

ふきがジェラテリアに移りアイスを売るようになってから1週間も経たないうちに、エンツォ・ナンニーニはマフィアの銃撃に遭い病院に担ぎ込まれた。

元々出す勇気が湧かなかった手紙は、完全にタイミングを失してしまった。何せ相手が意識不明の重体で、全くもってそんな場合はなかった。

s a b a t o 19 g i u g n o

お父さんが、銃で撃たれて、重体。

どうして？ どういうこと？ 何で、お父さんがこんな目に！

神様、もういいです。娘として認めてもらえなくても、嫌われても、何とも思われなくても、もういいです！

だからお願いします、お父さんを助けてください！ 助けてください！

d o m e n i c a 20 g i u g n o

お父さんはまだ意識不明。

病院に行ったけど、クランキさんに追いつ返されてしまった。関わ

るな！ って。

お父さん。お父さん。お父さん。

luned? 21 giugno

私は、心配もしちゃいけないのか！

病院でまたクランキさんに追い返されて、でも今日はどなり返した。仕事のことで脅しみたいなのとも言われたけど、そんなのもうこの期に及んではどうでもいい。

そばにいるのは家族の役目だと言われた。クリスタベラさんとフアニアさんの役目だって。

本当にお父さんを思うなら、私はしっかりアイスを売って、お父さんが復帰するまでの間少しでも商売を守れて言われた。

お父さんが命の危機なのに、私にはジェラートを売るしかできないなんて。

marted? 22 giugno

何をしてても、お父さんのことしか考えられない。

それでも笑顔を作ってジェラートを売って。気が狂いそう。

仕事の後で病院に行ったけど、やっぱりクランキさんに追い返された。今日は突き飛ばされて、こめかみを角にぶつけて血が少し出た。

mercoled? 23 giugno

私は、お父さんのために祈ることも許されないの？

gioved? 24 giugno

お父さんはまだ目を覚まさない。病院では追い返される。私にできるのはジェラートを売ることだけ。気が狂いそう。

せめて教会で祈る。昨日ナンニ二家が所属する教区の教会に行ったら、不謹慎な気持ちで入るなって言われた。ショックで倒れそうだった。

今日はちゃんと十字架を持って行って、確かに私は日本人だけど日本で洗礼を受けてます、アビゲイルっていう洗礼名もありますって説明して、何とか入れてもらった。ずつと祈った。

神様、あそこであれだけ願ったけど、もう一回この日記でもお願いします。

お父さんを助けてください。

venerd? 25 giugno

ジェラート 教会 お父さん

sabato 26 giugno

お父さんがあんなことになってるのに、どうして皆笑ってジェラートなんか買ってもらえるの？ もう1週間になるのに！
売るほうはもうギリギリ。

病院にも近よらせてもらえないし、教会がなければ死にそう。死んでもいい。だから神様、お父さんを助けてください。

domenica 27 giugno

お父さんがまだ目を覚まさないのに、どうして神父さんはあんな冷静にミサをあげられるの？

病院でつきつきりでいられるはずのクリスタベラさんとファニアさん。教会に来てる場合じゃないでしょ！ なら代わってよ、代わってよ……

ミサが終わったならみんなすぐさま出ていく。笑いながら。

どうして、笑えるの？

お父さんがあんなことになってるのに、どうして？

一日中祈ってた。ずっと教会で祈ってた。

lunedì 28 giugno

死にそう。

私が死んだら、お父さん助かるかな。

martedì 29 giugno

お父さんが目を覚ました。

よかった。よかった。本当によかった。

こんなにほっとしたこと、これまで生きててはじめて。

よかった。神様、ありがとうございます。ありがとうございます！

mercoledì 30 giugno

このところ朝は毎日バルへ行く。私は病室には入れてもらえないし、連絡ももらえないから、お父さんのことは新聞で読むしかない。

ここ数日は注文はずっとコーヒーだけで、しかもろくに口をつけなかったから、店に入ったとたんバリスタにはいやな顔をされた。

だけど今日は久しぶりにおながへってたから、ブリオッシュとカプチーノを注文して完食。

出るとき、ちゃんとぜんぶ飲んでいくならいつでも来てくれって言われた。うれしい。

神様、ありがとう。お父さんが目を覚ましてから、いいことばかり。ジェラートも今日はたくさん売れた。私があんまりうれしうだからって理由になってない理由でおかわりしてくれる人もいた。ちゃんと神様に感謝を伝えなきゃいけないと思って、まだ教会でのお祈りは続けてる。

お父さんを助けてって祈ってたときはただもう必死だったけど、今日、お父さんを助けてくれてありがとうございますって教会で祈ったら涙があふれてきた。

g i o v e d ? 1 l u g l i o

7月。なんか実感ない。というか、6月がもう現実感なさすぎてお父さんはまだ入院中。まだ寝たり起きたりっていう状況で、ベッドから離れられないらしい。でも意識があるときに話しかけると、話の内容はすごくしっかりしてるから、いずれ仕事にも復帰できるだろうって。

ジェラテリアの支配人のフランカから聞いた。クランキさんからメールがあつたらしい。

ほんとに、よかった。

v e n e r d ? 2 l u g l i o

あいかわらず、クランキさんは私を病室に入れてくれる気はないらしい。

つらいけど、でもお父さんの命が助かったんだから、たいしたことじゃない。

だけどやっぱりちょっとくやしいので、お花とカードを買って送るくらいはさせてもらうことにした。

小さなカードにイタリア語で典型的なお見舞い文書いて、花屋に頼んだ。名前は書かなかった。だって、私だと知ったらクランキさん絶対に捨てちゃうもん。

s a b a t o 3 l u g l i o

ジェラートがよく売れる。フランカが親切に仕事を教えてくれるから。そのことでお礼を言ったら、フキが笑顔で接客するからだよ、って言われた。フランカは名前通りフランクな人で、ファーストネームで呼ばせるのはまあシチリアなら一般的としても、あんまり厳しいことは言わないでほめて伸ばすタイプだ。だから調子に乗っちゃいけないんだけど、でもやっぱりうれしいものはうれしい。お父さんの会社に貢献できてる！　って気になれる。

お父さん、早くよくなってください。

d o m a n i c a 4 l u g l i o

つまみ出された。

克蘭キさんに。
教会を。

「ストーカー行為はするなと言ったはずだが？」って。
私は祈ってもいけないの？

反論も許されずに追い出された。

先週のミサにはいなかったけど、克蘭キさんもあそこの教区だったんだ。

ひどい。

ずるい。

克蘭キさんだって他人のくせに、なんで私を公共の場から追出すようなことができるの？

なんで私は教会からさえ追い出されて、

克蘭キさんは病室に入りびたれるの？

お父さん、無事ですか？ 体調はどうですか？

私はこんなことも、口に出して言えない。

エンツォ・ナンニーニの快復とともに、ふきの日常も戻ってきた。
父が生きているだけでいいと思っていたのに、見舞いに行けない
ことに次第に苛立ちが募る。

そしてまた、レオ・克蘭キもふきの行動に苛立ちを募らせていた
ようで、エンツォの容態が落ち着いてくるとやたらとふきに厳しく
なった。

ジェラテリア・ベラ・クリスタの従業員の指導に俄に口を挟むよ
うになったのだ。支配人のフランカ・モンターニヤも困惑していた
が、オーナーのエンツォがいまだ入院中で采配を揮えない以上誰か

が何とかするしかなく、フランカが代理でグループ全体の統括を行い、手薄になったジェラテリアを良い機会だから試しにレオにやらせてみたい、とエンツォ直々に言われては拒む術も無い。レオ・克蘭キはまだ23歳でいまだ学生の身ではあるが、エンツォが彼を高く買い、ゆくゆくは後継者にと考えているのは周知の事実だった。とはいえふきはレオがジェラテリアの支配人代理におさまって初めて知ったが。

お局様のいびりかと思われるような、重箱の隅をつつくかのような指導に、ただでさえまだ慣れない仕事であるというのにふきは根を上げそうになった。朝から晩までこき使われて、相手が相手だけに常に気を張らねばならず、一日の終わりには心身ともにくたくただった。それだけならともかく、レオは勤務時間外のふきの行動もしつこく訊いてきた。病院や教会、エンツォの家に立ち寄っていないかの確認は勿論のこと、ふきがクリスタベラやファニアと接触しないように細心の注意を払っていた。

自分はどんな危険人物だと思われるのか、まず傷つき、次に憤り、最後は呆れを通り越してどうでもよくなった。

そうやって心に蓋をして、自分を守っていたのだらうと思う。負荷が一定値を超えると、感情という感情をシャットダウンしてひたすら無感動になるのが、ふきの編み出した自己防衛策だった。

面白くないことにレオ・克蘭キはどんなに憎々しくても男前でふきの心に芽吹いたときめきは完全に枯れ果てるまでには中々至らなかった。もう関わらないようにしよう、距離を置こう、と思っても、ほんの時折ジェラートカップが詰められた段ボール箱を運ぶのを手伝ってもらったりすると、マイナスの感情が萎えそうになる。

誰かをずっと憎んで、赦しきれず忘れられないのは辛い。ふきは母と義父のことでそれを嫌と言っただけだ。疲れるのだ、生きる気力も失くすほど。

だが流されて好意を持ってしまえば、今度はふきのプライドが痛む。流石に踏みつけにされて喜ぶ趣味は……あつたとしても、限度

というものがある。ふきはもう一生分味わった。

だから全てを感じないようにした。マイナスもプラスも、感情なんて忘れ去ることだ。父や母に対してはもう遅すぎるけれども、レオ・クランキが相手ならまだ感情を葬り去るのは可能な筈。

可能な筈だったのだ。あの悪魔が過去を携えてやって来なければ。

ふきは日記帳を閉じた。此処から先は、書いた本人が言うのも何だが、それこそ被虐嗜好でもなければ到底読みたいものではなかった。

雨は止まない。常夏の島シチリアに降りつける水の音を、ふきはひどく無感動に聴いていた。

6・三桎霧依の傾聴

「Kyrie, you've got a postcard.
(キリエ、君に絵葉書)」

「From where? (どこから?)」

「Sicily. (シチリア)」

あまり心当たりはない。三桎霧依は首を傾げながら、恋人の手から絵葉書を受け取った。

落陽のパレルモの写真を引つ繰り返し、そこに懐かしい名前を見つけて思わず口元が上がる。

「From who? (誰から?)」

「Gaia. Do you remember I went to Naples for a vocal masterclass? She was there too. (ガイア。私が声楽のマスタークラスのためにナポリに行ったの覚えてる? そこで一緒だったの)」

去年の夏のことだ。マスタークラスの主催者が宿泊先も手配してくれていて、霧依と同室だったのがガイアだ。コンクールではなくマスタークラスだし、霧依がソプラノでガイアはメゾソプラノという声種の違いもあり、この世界ではありがちなピリピリした関係にはならず仲良く過ごせた。

ガイアはお喋りな女の子で、色々と話し掛けてきた。どちらかというと口数は少なく聞き役のほうが得意な霧依には有難い相手だった。

絵葉書には挨拶と簡単な近況の他に、一際大きく書かれていた一文があった。恋人がそれを音読する。

「"Lamia coinquilina ha finalmente lasciato quello figlio di puttana!"……?」

あたしのルームメイト、とうとうあのゲス野郎と別れたよ！
整った顔立ちを見事に歪めた恋人を見て、霧依は噴き出した。そういえば、ガイアとそんな話をした。

ガイアは、シチリアで日本人のルームメイトと暮らしていると言っていた。積極的に霧依に話しかけてきたのはそのせいもあるのだろう。

ルームメイトとは気も合うしトラブルもあまりなく、良い相手を見つけたと嬉しそうに言っていたのだが、ただひとつ、ルームメイトのボーイフレンドに関しては非常に心配していた。何でもそのボーイフレンドは札付きの不良らしく、悪い噂が絶えない。その日本人のルームメイトも言い寄られて最初は困惑しており、怖がる様子さえ見せていたらしいのだが、どうしてかある日いきなり彼と付き合いだした。やめたほうがいいと何回忠告しても聞かない。付き合いだしてから体のあちこちに痣を作るし金はせびられるし、絶対に口くさな男じゃないのに、いくら言っても無駄だった。でもよく見るとルームメイトのほうは彼に恋しているというよりは怯えているようで、ひよっとしたら何か弱みでも握られて脅されているんじゃないか？ だったら自分くらい言ってくればいいのに。というような愚痴に一晚中付き合わされた。それで話の流れで、何か進展したら教えてねと軽く言ったのだが、1年近く経ってガイアはそれを律儀に実行してくれたらしい。携帯の番号も交換したのに絵葉書というまたレトロな手法で。

「Christopher. Can I use computer this evening? (クリステール。今晚私がパソコン使っても良い?)」

「Sure. But why? (いいけど。何で?)」

「I want to talk with her on Skype. (スカイプでガイアと話したいの)」

クリステールは笑ってOKを出してくれた。

「チャオ、ガイア」

『Kyrie! Ciao!! Come stai? Cosa
canti questi giorni? Aspetta
mimmi indovina - -』

相変わらずのマシントークで、こちらは口を差し挟む隙もない。霧依はただ相槌を打ちながら聞いていた。シチリアは今朝から雨だったけどそっちはどうだった? などという質問も実は質問ではなく、あ、そういうえば天気予報では北のほうは降らないって言うてたつけ、ねえそれよりさ　というような流れで、二音節以上の単語が入り込むような余裕は逆立ちしたってなさそうだった。

絵葉書の礼を言つと、ガイアは囁み付くように一瞬でルームメイトの話題に移った。

そうそう、フキがね。あ、あたしのルームメイトの名前だけど、前言ったつけ?　ほんと、1年以上もイッポみたいなのバカと付き合うなんて信じらんない!　そー、そのバカ男イッポ・リト・克蘭キっていうんだけど、あたしなんかずっとイッポ(カバ)って呼んでる。だってカバで充分じゃん、あんなヤツ。なんかさー、3つ上の兄貴がやたら優秀でさ、それでグレちゃったのはわかんないでもないけど、でも他人を巻き込むってのよね。イッポにはレオっていう男前で頭も良くて大きな会社の社長に氣に入られて秘書やってる兄貴がいるんだけど、イッポのほうは昔から成績も悪かったし性格悪いから女の子にもモテなかったし、顔も身長もレオには一歩及ばなかったからいじけちゃったんだよね。で、絵に描いたような転落人生。未成年のうちから酒、タバコは当たり前だったし、クスリとかもやってたらしいよ。あたし親からあいつにだけは近づくなって言われたもん。

フキもはつきりイヤって言えばいいのに、大人しいから。キリエもあんましゃべんないよね、日本人ってみんなそうなの?　明らか

迷惑してんのに言い出せなくてずるずる流されちゃって。ジェラテリアの売り子なんてかつかつなのは何回もお金取られてたし、暴力振るわれても呼び出されたら断らないで行ってたし。それDVだよ、訴えてもいいんだよ、てか訴えるべき！　って何回も言ったのに、逆に誰にも言わないでってあたしが口止めされる感じでさ。おかしいよね。でもさ、イツポのこと好きなの？　って訊いたら全然、って言うんだよね。じゃー何で付き合ってたんの、早く別れなよ、って言っても何か泣きそうな顔で笑うだけでさ。ホント謎だった。

ひよっとしたら兄貴のレオのほうに問題があったのかもね。フキの働いてるジェラテリア経営してる会社に、レオも勤めてんの。つまりレオはフキの上司。クランキ家はさ、何ていうか、ダメな子ほど可愛い？　みたいな。ウチならイツポの十分の一でも悪さしたら即勘当だけどね、実際声楽勉強してオペラ歌手になるって言ったら縁切られたし。まあウチの話はともかく、イツポの両親も兄貴のレオも、結構イツポに甘いんだよねー。色々見て見ぬ振りしたり、警察に捕まりそうになったら庇ったり。バツカじゃないの、だからイツポがいつまでたっても悪さやめないんだよ、1回くらいブタ箱ぶち込めばいつぺんで目が覚めると思わない？　だからさつまり、レオの機嫌損ねたらフキはクビだし、それで何も言えなかったんじやないかな。だとすると、脅されてたかもってあたしの推理、当たらずとも遠からず？　俺の言うこと聞かないと兄貴にあることないこと吹き込んでお前クビにしてやるぞ、とか言われてたりして。うわ、ほんとゲス野郎！

でもね、そう！　ついに別れたんだよ！　メデタイ！

何かねー、フキほんとにホッとした顔してた！　もうホント良かったよ。心配かけてごめんね、とか言うし。水臭いんだよ！　結局あたしにほとんど何も相談してくれなかったし、ちよつとさみしいでもフキがあいつから解放されてよかった！

何で別れるることになったかっていうとね、先月からフキの従兄弟が日本から来てるんだよね。いや、最初従兄弟って知らなくて、

恋人だと思ってたの。あたし日本語わかんないし。何か突然訪ねてきてさ、フキすっごく驚いてた。まるで初対面みたいに。

格好良かったよー。あたしあんまアジア系の男ってかつこいいと思わないんだけど、彼はかつこよかった。名前なんていったっけな、タク……マ？　タク、ミ？　そんな感じ。顔立ちはそんな好みじゃなかったんだけど、センス良かった。しかもお金持ちっぽい！　ドルチェ・エ・ガッバーナの服にブルガリの香水だったよ。

何回かフラットに来て、日本語でフキと話してたんだけど、ある日フキの目盗んであたしに話しかけてきてさ。キリエと同じくらいイタリア語上手かったよ。フキがどうしても話してくれないんだけど、どう見ても殴られた痕がある。理由を知らないかって。

だーから話してやったの、 IPP のこと洗いざらい。

そしたらありがとうって言うて出かけて行ってさ。で、その日からいっつもかかってくる IPP からフキへの呼び出しがぴたと止んだの。で、数日してから街中で偶然 IPP を見かけたんだけどさ、すっごいの、笑っちゃう！　まるでミイラ！　包帯とガーゼと絆創膏の山盛り！　正直ザマーミロだよ、フキだっていっぱい傷ついてきたんだから。

もうさー、あたし感動しちゃってさ。フキに、いい彼氏じゃん大切にしなよ、って言ったの。そしたらフキ笑ってさ、彼氏じゃなくて従兄弟だって。それでフキとの関係初めて知って驚いたんだよね。だって普通親戚ならあたしたちのフラットに泊めればいいじゃん？　わざわざホテル取らせるなんて、従兄弟にしてはよそよそしい感じだから他人だと思ったんだよね。男の従兄弟泊めたってあたしなら別に気にしないのに。

で、しかも向こうは結婚してるよ、左手の薬指見なかった？　って言われちゃった。残念、フキの彼じゃないならあたしが狙いたかったのに。

まあでも、何にせよフキが IPP のカバ野郎と別れられてよかった。あ、でもさ、まだちょっと心配なことあるんだよね。この頃フ

キ、週に2回も3回も病院に通ってるんだ。どこかが悪いわけじゃなくてただ色々検査してるだけだって言うけど、そもそも検査が必要なのって普通病気の疑いあるからじゃない？ 心配！ だって、人間ドックだって2、3日もかからないよね？ 何の検査なんだろう、ひどい病気とかじゃないといいけど

その後もガイアの一方的な話は延々と続いた。

ネイティヴの早口で、しかもシチリア訛り。正直霧依は半分も理解できたかどうか怪しい。それでもこの情報量。

たつぷり4時間は話してやっとスカイプを切ったところ、クリステールが苦笑いとしか言えない表情を浮かべていた。

「Enough? (もういいのか?)」

「Almost too much. (お腹いっぱい!)」

ガイアと話すのは と言うより、ガイアの話聞くのは楽しい。ただ、1回の量があればなので、どうしても頻度は低くなるだけだ。霧依はパソコンをシャットダウンする。またしばらくたったら連絡しよう。懐かしいひと時だった。

7・緒貝巧の脅迫

「もしもし、ふきちゃん？ おはよう。今日また検査だから、忘れずにおいでよ。」

ちゃんと脱ぎやすい格好して来るんだよ。金属物は避けてな。ボタンのないシャツにカプリパンツくらいなら良いだろう。確かストライプのノースリーブ持ってたよね、あれが良いんじゃないかな。寒かったらパーカーでも羽織つといで。靴も尖ったヒールは駄目。脱ぎやすいペタンコ靴でおいで。

ああ、ちゃんと化粧しておいでよ？ 目立ちたくないんだろう。ファンデーション厚塗りしたりチーク濃くしたりする必要はないけど、目まわりと鼻筋だけはしっかり作って彫りは深めにな。

3時には検査終わるだろうけど、何せここはシチリアだし、今日は全休取ってね。病院の後、一緒に服買いに行こう。

半休しか取ってないなら朝のうちに店に連絡しておくこと、いいね？ 言っておくが、映像は俺の手元なんだからね。

なお、このメッセージは自動的に消滅する わけないから、消したいなら自分で消すんだね。言わなくてもアビガが消すか？

じゃあ後で」

それだけ吹き込むと、巧は携帯を切った。TVのリモコンを取って、抑えていた音量を再び上げる。

TVでは『スパイ大作戦』のリバイバル放送をやっていた。勿論イタリア語吹き替え版だ。ジム・フェルプスがイタリア語を喋っているのが中々面白い。ふきの留守電に残したメッセージは、もろにこれの影響だった。

タクミは着替えた。今日は楽しい日になりそうだった。

病院に着くと、ふきは顔色を変えた。

「巧さん、ナンニー二氏が来るなんて言わなかったじゃないですか！」

「言ってるないな。それが？」

「無理です。帰りましょう。検査は他の日だってできるでしょう？」

「駄・目」

「どうして……」

「見つからないように上手くやりなよ？」

ふきは泣きそうになりながら、エンツォ・ナンニー二の視界に入らないよう移動する。柱と観葉植物の陰に隠れて、何とかやり過ごそうとしている姿が滑稽だった。

「ほらほら、そんな挙動不審じゃかえって目立つよ？ リラックス、リラックス。」

それと、パーカーのジッパーは上げないほうが良い。折角中のストライプが可愛いんだから見せなよ、別に寒くないだろう」

「巧さん、そんな場合じゃ」

「例の映像、まだ俺のUSBの中に入ってるよ」

「……っ！」

ふきは唇を噛み締めて屈辱に身を震わせる。感情に任せるように一気にジッパーを引いた。

「それでいい。」

ドットーレ・マッツォラーリだって暇な身じゃないんだ。今日の検査は君からエンツォへの腎移植のためなんだから、エンツォだつてここに呼ばれて別に不思議なことじゃないだろう？ 心配しなくても同じ診察室で顔合わせることにはならないよ、ドナーとレシピエントのプライバシーは尊重される」

「……はなれてください」

「ン？」

「甥だつて名乗ったんでしょう？ なら、私と巧さんが一緒にいるところ見られたら、ばれるかもしれない。」

向こうはドナーが巧さんの知り合いだつて思ってるんでしょう。

ここは病院です。こんな場所で一緒にいるところを見られて、もしドナーかもしれないなんて思われたらどうするんですか。まして私の雇用契約書調べられて、遠野って姓がばれたら。移植手術と私の関係は、誰にも知られるわけにいかないんです。

私ひとりならまだ何とでも言いわけしますから、はなれてください」

巧は肩を竦めた。

「結構。でもね、気をつけなきゃいけないのはエンツォだけじゃないと思うよ？」

巧は入り口を指差す。入って来たのは、クランキ兄弟だった。

これ以上ないほど顔を蒼白にした従姉妹に巧の心は浮き立つ。こんなにワクワクするようなことはそうそうない。

「さあ、上手く立ち回ってみせるんだ。俺を楽しませてくれよ？」

巧は少し距離を取ってロビーのソファに座り、体を明後日の方向に向けてふきと無関係な風を装った。

元々予約の時間にはまだ早い。加えてロビーにエンツォの姿がまだあるということは、マツツォラーリ医師の手が空いてふきの検査が行われるのはしばらく先だ。わざわざ今受付に行つて、それこそふきの言うようにばれる危険を犯す必要はなかった。大病院のロビーなど広さもあれば人の姿も多いから周りが話している内容など聞こえないかと思いきや、これが結構良く通るのである。イタリア人は大概声が大きくお喋りだからして。

レオ・クランキは最初はふきに気づかず、受付で何やら話しているエンツォを見つけると真っ直ぐに向かつて行つた。そのまま何やら2人で雑談を始める。

イッポリート・クランキのほうはひとり入り口近くで取り残されたように突っ立っている。巧はごく自然にイッポリートから視線を外し、顔を隠した。薄汚れたギプス。鼻のガーゼ。解け掛けた包帯。俯くと忍び笑いが漏れた。

やがてエンツォが看護師に案内されて病院の奥へ消え、レオも受付から戻って来ようとした時、巧の背後からリノリウムの床にスニーカーが擦れる足音が近づいてきた。

「フキ！」

横目でふきの様子を窺うと、硬直したまま動かない。彼女に猛然と近寄ったイツポリートは、挨拶もなしにふきを怒鳴りつけた。

「Puttana！」

娼婦を意味する、女性へ言うてはいけない言葉ナンバーワンだ。ふきの顔色は今や蒼白どころか土気色で、腕を小刻みに震わせていた。

顔を向けずに目だけでそれを見てみると、異常を察したらしいレオが駆け寄ってきた。だが自分の弟が詰め寄っている相手がふきだと気づくと、途端に眉を顰めた。レオは取り敢えずイツポリートを宥め口を噤む様に言ってから、ふきに向き直る。

「Perch? sei qui? Che cosa stai facendo? (何故君がここにいる。何をしている?)」

「レオ……」

震える声に、おや、と思った。ふきはレオ・クランキを名前で呼ぶような間柄だったか?

だが一瞬の後に巧は思い直した。ここはイタリアの、しかもシチリアだ。かなりの年配に対しても名前で呼ぶほうが普通だった。

「Sei venuta a vedere Enzo? Tu ancora - - (エンツォに会いに来たのか? 君はまだ)」

「No! Enzo? Signor Nannini sta qua? Non lo sapavo. (違う! エンツォ? シニョール・ナンニーニがここにいるの? 知りませんでした)」

「Davvero? (本当に?)」

「Veramente! (誓って!)」

嘘をつけ、と巧は喉の奥で笑う。確かに来るまでは知らなかった

かもしれないが、つい先程エンツォがいると巧に詰め寄ったその舌の根も乾かぬうちに。

「Allora perch? sei qui? (ならなぜ君がここにいる?)」

ふきはつつかえながら、検査のためだと答えた。レオは信用していない様子で、何の検査かと訊ねる。ふきがしばらく黙った後、プライベートなことだと言うと、従業員の健康状態の把握は自分の役目だとレオは言い放ち、高圧的な態度で詰問した。

明らかにレオはふきがエンツォ目当てで病院に来たと思い込んでいた。雇用主の立場を振りかざし、プライバシーの盾を奪い取って、病院に来た理由をはつきり言わないならエンツォへのストーリー行為とみなすと、処分をチラつかせて脅しにかかっていた。

「E un'altra cosa. Cos'? successo tra Ippolito e te? Devi sapere perch? cos'ferito. (話はある。イッポリトと君の間に何があった? イッポリトがこんな怪我をした理由を、君は知っているはずだ)」

「L'ho lasciato. (別れました)」

「Cosa? (何だって?)」

「Non siamo pi? una coppia. Basta. (もうつきあってません。それだけです)」

「..... Non ci credo. (.....信じられない)」

「Perch'? Atte non piaceva mai la nostra relazione. Credo che tu sia contento. (どうして? 私たちの関係を快く思っていなかったのはあなたですよ。これで満足でしょう)」

レオは目を見開く。

おやおや。これはこれは。

ふきはレオに嫌われているとばかり思っているようだが、これは中々どうして。ひよっとするとひよっとするかもしれない。

だが、それはひとまず置いておこう。これ以上余計なことを知られて計画がおじゃんになるのは巧も望むところではない。

充分とは言えないが、そこそこはふきを虐めて楽しむことが出来た。そろそろ頃合だ。

巧は立ち上がり、三人へ向かって歩きながら声を発した。

「Perch? , hai domandato? Tuo fratello capisce meglio perch? .

(なぜかって? 君の弟のほうがそれはよく知ってるさ)」
視線が集中する。

IPPORIトは巧を見て明らかに怯えたように後ずさった。ふきは不安げに巧を見上げてくる。

「Chi sei? (誰だ?)」

「Sono cugino di Fuki . Leo Cranchi , ti conosco . (俺はふきの従兄弟だよ。レオ・克蘭キ、君のことも知ってる)」

「Lui! (こいつだ!)」

IPPORIトが叫ぶ。レオが訝しげに弟を振り返った。

「Ippolito? (IPPORIト?)」

「Leo , lui! Lui mi ha fatto . .

(兄貴、こいつだ! こいつが俺を)」

「Stai zitto . (黙れ)」

巧は IPPORIトを一睨みする。

小物だった。どれだけふきを脅かしても、巧には暇潰しの相手にもならない。

取り合わず、巧はレオに向き直った。

「Leo . Tu non sai niente . Non sa
a cosa tuo fratello ha fatto

a mia cugina. (レオ。君は何も知らない。君の弟が俺の従姉妹に何をしたか知りもしない)「

言うが早いか巧はふきのパーカーを剥ぎ取った。ふきが小さく悲鳴を上げる。

ふきの腕には、真新しい赤黒い痣がいくつも浮かび上がっていた。巧はふきの左腕を捻り上げ、手首の内側をレオに向ける。そこに残る傷痕は今も生々しい。

レオが絶句した。

「La colpa di tuo fratello. Perch? Fuki? venuta a quest'ospedale? Bisogna spiagare? (君の弟のせいだよ。ふきがどうしてこの病院に来たか、だって? 説明する必要があるのかい?)」

「Ippolito ha fatto violenza a Fuki?! (イッポリトがフキに暴力を振るっていたと!?)」

「Da morire. Mia cugina? abbastanza spaventata. (死ぬほどね。俺の従姉妹は本当に怖がつている)」

ふきはおろおろとレオ、イッポリト、巧の間で視線を彷徨わせる。その頭の中に今何があるのだろう。レオへの怯えか、イッポリトへの嫌悪か、巧が何を言い出すのかという不安か、あるいはそのどれもか。

巧は、イッポリトを蹴り上げた。

派手な音を立てて彼は病院の床に転がる。ふきが悲鳴を上げた。

「巧さん!」

「Cosa fai! (何をする!)」

痛みに涙を滲ませて巧を見上げるイッポリトと、弟に駆け寄り非難の声を上げるレオに、巧は冷笑をくれてやった。

「Chiamate la polizia? Ricorret

e alla giustizia? Fate come vi
pare. Ma quando tutto viene c
hiaro, ? Ippolito chi deve and
are in prigione. (警察を呼ぶかい? 訴える
かい? お好きにどうぞ。だが全てが明るみに出れば、牢屋に入る
のはイッポーリトのほうだよ)」

「No! (駄目!)」

叫んだのはイッポーリトでなくふきだった。

巧はしゃがみ込み、床に転がったイッポーリトの胸倉を掴み上げ
る。恐怖に満ちた瞳で見上げられ、たまらなく気分が高揚した。ふ
きを虐めるよりずっと楽しい。

「Nessun contatto. Non vedere p
i? mia cugina, neanche per sog
no. Quindi io non dico niente.
(関わるな。もう金輪際俺の従姉妹と会うな。そうしたら、俺は
何も言わない)」

ざわざわと、周りが騒がしくなってきた。巧は立ち上がり、ふき
の腰に手を回して踵を返す。

「巧さん……」

「そろそろエンツオが戻ってくる時間だよ」

それだけで、ふきの歩を進めさせるには充分だった。ふきはクラ
ンキ兄弟を気遣わしげに振り返ったが、結局何を言うでもなく巧に
従ってその場を離れる。

ロビーの総合受付を素通りして、巧はふきを伴い別の病棟へ向か
った。総合受付は案内カウンターだ。初めから病院のどこの誰に何
時に用があると決まっている人間は、直接目当ての病棟へ赴いてそ
こで受付と診察を済ませれば良い。

マツッオラーリ医師の豪快な笑顔を思い出しながら、巧はエレベ
ーターのボタンを押した。

8・遠野ふきの溜息

ふきの血液検査等は既に済んでいて、移植には問題ないとされている。

ただひとつ、ネックなのが健康状態だった。ドナーは心身ともに健康でなければならない。移植手術はドナー側にもかなりの負担なので、移植する臓器だけでなく他の部位も良好な状態を保っていないといけないのだ。

幸いふきは何の病気にもかかっていない。IPPリトの相手をさせられていた時はかなり乱暴な扱いをされていたが、幸運なことに性病にも罹患していなかった。ただふきの体重が、医師に「ゴースインを出させないでいた。日本人女性の感覚で見てもふきは太っているほうではないが、イタリアの、しかも医師の目で見ると明らかに痩せ過ぎであるらしい。」

パーカーを脱ぎ、痣や傷痕をいやでも晒しながら、ふきは検査室に入る。

そして、体に残る傷痕だ。表皮の外傷は臓器の機能とは関係ないが、精神的に問題ありと見なされたか精神神経科を受診させられ、カウンセリングや心理テストの嵐を受けた。

マツオラーリ医師は前回からふきの傷痕が増えていないことを確認して笑顔になっていた。IPPリトと別れてから新しい痣は作っていないし、リストカットの欲求もおさまった。

体重や血圧などをチェックしたマツオラーリ医師は笑顔で大きく頷いた。

「Bene! Oranenessun problema. (よし! これならもう問題なしだ)」

ふきはほっとして息を吐く。何とかの値がどうの、という話になったが医学的知識のないふきにはついていけない。医学部出身の巧は面白そうに聞いていて、たちまち当人であるはずのふきは置いて

けぼりを食らった。

2年も暮らしてシチリア訛りにはもう慣れたが、医学の専門用語などは勉強する機会もなかったからさっぱりである。巧に通訳してもらって何とか聞いていた。

「ドナーになることが決定したから、検査費用はほとんど全部レシピエントの保険で賄えるって。良かったね、3000ユーロ払わずに済んで」

それもほっとした。ドナーになれない場合、検査費用はこちら持ちになる。ドナー適性検査は保険の対象外だから、自腹で数十万円に相当する金を支払う羽目になるのだ。だが移植手術が決定すれば、ドナーの検査費用もレシピエントの治療費に勘定され、レシピエント側が保険で支払ってくれる。

「で、ふきちゃん、生理っていつ？」

「はい！？」

巧からの思わぬ質問にカツと頬が発熱した。分かっているやつているのだろうと思う。ルームメイトのガイアなどは巧のことを好青年だと思っているらしいが、巧の意地悪さをふきはここ数ヶ月で嫌というほど思い知った。

「手術日決めるからって。別に生理中でもいいけどさ、気分的にそうじゃない日のほうが良いだろう」

自分の顔が熟したトマトになっていることを自覚しながら、ふきは確実に周期から外れる期間を告げた。併せて、こちらの希望日を伝える。流石に2、3日は仕事を休むことになるだろうから、寒くなつてからのほうがいい。ジェラテリアなので、良く晴れた暑い日の日中などに抜けると同僚にえらく恨まれるのだ。流石にもう夏は終わりだが何せここは10月まで海水浴が可能な常夏の島シチリアである。とはいえ12月後半になると冬休みを利用した日本人観光客相手の仕事も舞い込んでくるので、出来るなら11月か12月の頭が良い。

そう伝えるとマツツオラーリ医師は大きな体を揺らして頷いた。

他に何か質問はあるかと聞かれたので、ふきは口を開いた。

「Rispetti la mia privacy. Non dicam niente di me al destinatario, per favore. Non c'è bisogno di farglielo sapere. Non voglio fargli sapere come mi chiamo, dove abito, da dove sono, quanti anni ho - - niente. E neanche io non mi interesso al destinatario. (私のプライバシーを尊重してください。レシピエントに私のことは何も言わないでください、お願いします。知らせる必要はありません。名前、住所、出身、年齢 何も知られたくありません。私もレシピエントに興味はありません)」

「D'accordo. (了解した)」

本来ならこちらから頼まなくてはいけないことだ、と言われた。

ドナーとレシピエントは、移植後に金銭トラブルが起るのを危惧して、互いに個人情報を知らせないのが原則なのだそうだ。

他に質問はないかと訊かれ、ないとふきが答えると、手術日は追って連絡することだった。

これ以上は痩せないように、出来ればもう2、3キロ太るように言われて、ふきと巧は診察室を後にした。

出口へ向かいながら、巧がくつくつと人の悪い笑みで話しかけてくる。

「嘔吐きだね。『レシピエントに興味はない』?」

「……」

「相手がエンツオだから一も二もなくOKしたんだろうに」

「……言わないでくださいよ?」

「さあ」

「巧さん！」

「冗談だよ。しばらくは言わないで置いてあげる。しばらくはね」
「……」

「心配しないでいい。物事にはタイミングがある。俺がこの事を他言するつもりでも、そのタイミングは遠そうだ。一生来ないかもしれないね」

出口近くで、また克蘭キ兄弟と鉢合わせた。

近寄らないように出来るだけ距離を取って自動ドアをくぐる。ちらりと視界の端に入ったイッポーリトの腕からギプスが取れていた。

もう？

そう思っ、巧がイッポーリトとやり合ったのはいつだったろうかと考え、既にひと月が経過していることに気づいた。

あの日。巧がフラットまで押しかけてふきの怪我の理由を訊いてきて、辟易してトイレに逃げたら出てきた時にはもういなかった。すぐにガイアがあらがいざらい喋ったと知った。

巧の凶暴すぎる説得のせいでイッポーリトに付き纏われることはなくなったが、イッポーリトはイッポーリトで巧にあらがいざらい話してしまつたらしく、問題の映像ファイルは巧の手に渡つてしまった。あれを隠したかったからどんなDVを受けても、金をせびられても、レオに憎まれても耐えてきたのに。エンツォに付き纏うのを止めたと思つたら弟にちよっかいを出し始めたと、レオは最初から2人の関係を快く思つていなかった。好き好んで付き合っているわけじゃないと言えたらどんなに楽だったか。言えないから、あんなにも苦しんだというのに。

ひと月。イッポーリトと一緒にいた時はあんなに時間が経つのが遅かったのに、殴られないというだけで時間の歩みが速まるものなのか。あるいは、エンツォの手術のことに集中し過ぎていたか。

だけど状況は好転したわけではない。巧は暴力こそ振るわないし、セックスの強要や金の要求もしないが、やっていることの本質はイ

ツポーリトと変わらなかった。映像ファイルでふきを脅し、自分の思い通りに操ろうとする。結局、ふきの弱みを握る人間が増えただけだった。イツポーリトには巧が強く口止めしたらしく、彼のあの怯えようからすると、そうそう口を滑らしたりはしないだろうが。彼らとすれ違う際、レオの怒りのこもった視線がこれでもかとき刺さった。

イツポーリトは自分に都合の悪いことは言うまい。が、巧に暴行を受けたことはレオに言うだろう。イツポーリトの怪我を見た時はふきも驚いた。巧がイツポーリトに具体的に何をして何を聞いたか、ふきはその場にいなかったから知らない。だが、もともとイツポーリトに良い感情などなかったふきが、いい気味だと思っよりやりすぎだと感じた。しかもその理由は自分なのである。

ただでさえイツポーリト寄りのレオが、何を吹き込まれてふきをどう思うか、想像するまでもなかった。ふきは溜め息を吐く。そもそもの最初からレオはふきを良く思っていない。エンツォの一件があつてから、何でもかんでもふきを疑って、それは色眼鏡というものではないかと思うくらい頑なにふきを信用しない。

イツポーリトと付き合っていた時は、外国人のアルバイト風情が弟を誑かしたと思われていたようで、実際そのようなことを何度か言われた。弟と違ってレオは育ちが良く汚い言葉を投げつけられたいはしなかったが、嫌味は山のように聞いたし職場での待遇も悪くなった。

今回もイツポーリトは自分の都合の良いように話を作り替えて話すのだらう。もともとふきに対するマイナスの評価は鵜呑みにするレオだ。今度は心変わりしたふきが従兄弟に頼んでイツポーリトを襲わせたとも思うだろうか。ふきは巧の前でイツポーリトのIの字さえ出さなかったというのに。

ふきは巧を見上げる。イツポーリトのDVから解放してくれたのはありがたいが、如何せんやり方が過激すぎるし、イツポーリトとそっくり同じ方法でふきを脅迫するし、加えてレオの恨みまで買っ

てしまうのでは感謝の念も薄れようというものだ。しかもおそらく、巧はわざとだ。レオのふきに対する嫌悪をさらに増長させて楽しんでいる。先程のロビーでの挑発　フォローを入れるどころか怪我人のIPPORIトをさらに蹴っ飛ばしたのがその最たる証拠だろう。しかも、一応はIPPORIトと別れさせてやったという恩を売りつけてふきが文句を言いにくい状況を作り、加えて駄目押しのように映像データで退路を塞ぐ。

数ヶ月前は存在すら知らなかった従兄弟の性格を、ふきは今嫌というほど思い知っていた。出来れば知りたくなかった。巧は、「人の不幸は蜜の味」を地で往く人間なのだ。勿論それは人間なら大なり小なり持っている感情だし、巧にも善意や憐れみの気持ちはある。だが、人はどれだけ大義名分があっても他者を傷つける時にいくらか良心の呵責を感じるものだと思ふが、巧にはそれが一切ない。思い切ったらとことん残酷になれるし、暴力や脅迫も厭わない。今は彼が味方なのだけが救いだ。味方というより、エンツォやレオよりはふきにやや傾いているという、それだけのことでしかない。それもふきへの好意からではなく、おそらくはアビガへの肩入れなのだろう。

アビガ。

エンツォを憎んでいる彼女。エンツォを殺そうとした彼女。

腎臓が適合して良かった。エンツォの腎臓を駄目にした、2年前の銃撃事件。あれはおそらくアビガの

「ふきちゃん、着いたよ」

はっとして、意識を戻す。いつの間にかアウトレットモールに連れてこられていた。

「巧さん……ここは？」

「服、買いに行こうって言っただろ？　ワードローブ全取っ替えするつもりでやるよ、資金援助するから。」

ふきちゃん、スカート穿いてるの見たことないよ。色の好みも地味だよね、紺とか茶とか灰色とか。

今日はボトムスはスカート限定。トップスも色は……んー、赤とか紫とかは似合わないだろうから……白！ 白と水色、あとパステル系でいこう。下着も上下セットのいくつか買っよ。上から下まで一ヶ月分買っまで帰さないから」

「ええええええええ」

巧が何を考えているのか、まったく分からない。けれども二言目には「USB」と脅されてはふきは従う他ない。

今日何度目かの溜め息を吐く。巧の考えは読めないけれど、憶測でもひとつだけ分かったことはある。

日本に残った奥さん、解放されてほっとしてるだろうな。

顔も名前も知らない女性は、年中、一生これに付き合わされるのだろう。

そんな筋合いはないし、そんな場合でもないのだが、ふきは心から見知らぬ巧の妻に同情した。

9・緒貝枝実の調査

束縛の激しい夫がイタリアへ旅立って早1ヶ月。
久々の自由を満喫していた緒貝枝実の精神的バカンスは、昨晚届いた一通のメールで終わりを告げた。

Subject: シチリアから愛する枝実へ
From: 巧

Ciao!

滞在が思ったより長引いて悪いね。元気にしてるか？
こちらの生活は思ったより楽しい。初めて会う従姉妹は中々面白い子で、毎日飽きない。

大学はどう？ 演劇サークルの次の公演の演目は決まった？
分かってるだろうけど、キスシーンとか演る時は必ず俺に一言言うように。

さて、悪いけどひとつ頼み事だ。

新聞記事を集めて欲しい。6年前に、W県で母親が娘に売春を強要したっていう事件があったろう？ その記事が欲しいんだ。
ネットに上がってる分のアーカイブはアドレス書いておくから、どの事件のことかそれで確認してくれ。

http://wshimpole.example.co.jp/news/20xx/11/post_407.html

ハードのデータが欲しいんだ。だから悪いけど図書館でも行って昔

の新聞漁って、コピー取ったのを家のスキャナーでスキャンしてメール添付して送ってくれ。

逮捕から裁判まで、経緯全部ね。

出来れば外国語版もあると嬉しい。英字新聞もチェックしてみてくれ。イタリア語版があればベスト。無いとは思っけどな。

それじゃよろしく。

T・V・T・B

巧

さよなら平穩。

T・V・T・B とは Ti vogliio tanto bene の頭文字で、大好きだとかすごく愛してるだとか確かそんな意味だ。げんなりした。

メールには写真が添付されていた。イタリアの街角を背景に、巧と女性のツーショット。

女性は枝実より2つか3つ年長に見えた。生粋の西洋人には見えないが、純日本人にも見えない。巧の従姉妹だというから混血なのだろう。

枝実が言つのも何だが、幸薄そうな顔の女だった。対して巧の顔は輝いている。

この人、巧に目をつけられたんだ。

日本から遠くシチリアまで行つたのに巧に出会ってしまった彼女の不幸に、枝実は心から同情した。しかも血が繋がっているとは、運命は時に酷い悪戯をするものだ。

巧と同一戸籍に入ってしまった自分のことは、敢えて考えないことにした。

そんなわけで、枝実は休日にも拘らず図書館で古新聞を捲ってはコピーを繰り返しているのであった。

20XX年11月14日

娘に売春強要、両親起訴 「体売ってでもパチンコ代稼げ」

中学生だった娘（15）に売春させ稼ぎを受け取っていたなどとして、W地検は14日までに、売春防止法違反と児童福祉法違反の罪で、和歌山市に住む実母（36）と義父（47）「いずれも覚せい剤取締法違反罪で起訴」を追起訴した。

起訴状などによると、実母と義父は一昨年1月ごろから、当時中学1年だった娘に対し「パチンコ代がない。体売ってでもつくってこい」などと売春を強要。今年2月23日深夜から24日未明にかけ、W市内のラブホテルで売春させ、相手の男から受け取った3万5000円を義父名義の銀行口座に入金させたとされる。

20XX年11月16日

中学生の娘に売春強要 母親と義父を起訴

中学生だった娘（15）に売春させ稼がせていたとして、W地検は14日までにW市内の母親（36）と義父（47）を児童福祉法違反と売春防止法違反の罪で起訴していたことがわかった。

起訴状などによると、母親と義父は共謀し、2月23日深夜か

ら翌日未明までの間に、市内のホテルで男と売春させ、受け取った現金3万5000円を義父の銀行口座に振り込ませたとされる。母親らは、去年3月ごろから「パチンコ代がない。金をなんとかしてこい」「（私は）昔、援助交際をしていた。おまえだって稼いで家に金を入れる」などと迫り、繰り返し少女に売春させていたという。母親と義父は、9月に覚せい剤取締法違反（使用）の罪でも起訴されている。

20XX年12月4日

裁判官、娘に売春の母親に激怒 母親は無言

中学生だった娘に売春を強要したとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われた山上陽子被告（36）の公判が4日、W家裁であり、町内鎮右裁判官が「娘にしたこと重さを考えなさい」と厳しい声で被告を叱りつける一幕があった。

被告人質問で弁護人から今後の生活を尋ねられた山上被告は「（共に逮捕された）夫と一から出直したい」と答えた。

この言葉に町内裁判官は「愛人をつくっていた夫に愛を感じるのか。どうやってやり直すのか」と詰問。被告が「感じません」と話すと「それで彼女（娘）が新しい一歩を踏み出せると思いますか」と強い口調で諭した。

さらに「彼女にできることがあるでしょう。あなたたちが遊びに行っている間、売春させられ、家事も一手に引き受けていた。彼女に言うことはないのですか。娘にしたこと重さを考えなさい」と叱りつけた。

山上被告はそれには答えず無言だった。

検察側は懲役7年を求刑、弁護側は執行猶予付きの判決を求め、結審した。

論告によると、山上被告は夫克彦被告（47）と共謀。2月23日未明、当時15歳の娘に、W市のホテルでわいせつな行為をさせ、3万5000円を受け取らせたとされる。

20XX年12月6日

「子ではなく収入源」娘に売春強要の実母初公判

実の母親が中学生だった娘に売春をさせ、その金をパチンコや生活費にあてていた。全国的にも波紋をよんだ少女売春事件。W市の母親（36）の初公判が4日、W家裁（町内鎮右裁判官）で開かれた。検察側の論告によると、XXXX年1月ごろからことし3月までの間に売春で200万円以上を稼がされていた少女は、「お母さんやお父さんのせいで私の体は汚れてしまった。今でも夢に見る」と話しているとし、少女に与えた影響の大きさを浮き彫りにした。

起訴状によると、母親は少女の義父と共謀し、「パチンコ代が払えない。私も昔援助交際をしていたからおまえだつて稼いで家に金を入れろ」と売春を強要。起訴事実に対し母親は「間違いありません」と事実を認めた。

検察側は、売春のため出会い系サイトに名前を出させ、段々と生活費もあてにするようになるなどの母親の行為に対し「少女が自分たちを恐れていることを利用し、子どもとしてではなく、収入源として見ていた」と主張。被告人質問で町内裁判官は「夫と一から出直したい」と答えた母親に対し、「少女（娘）にできることがあるだろう。その言葉を聞いて少女が出直せると思うか。娘にしたことの重さを考えなさい」と叱りつける場面も。母親は無言だった。

検察側は、「人道上許されず、卑劣で悪質な行為」として懲役7年、罰金15万円を求刑。弁護側は、「十分反省しており、償う機会を与えてほしい」と執行猶予付きの判決を求め結審した。判決は

25日。少女の売春を母親と共謀していた少女の義父（47）の初公判は18日に行われる。

20XX年12月19日

売春：「嫌がつていると思わず」 少女に強要の義父、起訴事実認める

当時中学生だったW市の少女（15）に売春させたとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われている義父（47）の初公判が18日、W家裁（町内鎮右裁判官）であった。義父は「間違ありません」と起訴事実を認めたうえで、「（少女が帰宅後に）笑っている時もあったので売春を嫌がつているとは思わなかった」などと話した。

起訴状によると、義父は少女の母親（36）＝両罪で公判中＝と「パチンコ代がない」などと言って、一昨年1月ごろから売春して金を稼ぐよう迫り、今年2月23日深夜から24日未明、少女にW市のラブホテルで男性を相手にわいせつな行為をさせた。受け取った3万5000円全額を、義父の預金口座にATM（現金自動受払機）から入金させるなどした。

20XX年12月25日

娘に売春強要、母実刑「人間性踏みにじる」

W市で当時中学生の娘に売春をさせていたとして児童福祉法違反罪などに問われた母親（37）の判決公判が25日、W家裁で開かれ、懲役5年6か月の実刑判決が言い渡された。

判決によると、母親は夫と共謀し、2年にわたって当時中学生の実の娘に無理やり売春をさせていた。母親は、娘が受け取った金を自分たちの口座に振り込ませ、パチンコなどの遊興費に充てていた。

20XX年12月26日

中学生娘に売春強要の母親に懲役5年6月

「許し難い犯行」と裁判官・W家裁

中学生だった娘に売春させたとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われたW市の母親（37）の判決公判が25日、W家裁で開かれた。町内鎮右裁判官は「あまりに卑劣で非人道的」として懲役5年6月、罰金15万円（求刑懲役7年、罰金15万円）を言い渡した。

判決理由で町内裁判官は「自分たちの遊興費のために娘の気持ち踏みにじった許し難い犯行」と指弾。そのうえで「彼女にとってあなたは世界でたった1人の母親だ。何ができるのかよく考えなさい」と説諭した。

判決によると、母親は夫（47）と共謀し、当時中学生の娘に「体売つても金をつくってこい」などと繰り返し売春を強要。W市のホテルで今年2月下旬、男性客相手にみだらな行為をさせ、現金3万5000円を受け取らせた。

20XY年2月5日

「体売つて金つくれ」…中学生娘に売春強要の義父に懲役8年

中学生だった娘に売春を強要し、娘にみだらな行為を繰り返した

として、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われたW市の義父（47）の判決公判が5日、W家裁で開かれた。町内鎮右裁判官は「卑劣で非人道的」として懲役8年、罰金15万円（求刑懲役10年、罰金15万円）を言い渡した。

判決などによると、義父は娘の母親である妻（37）と「同罪で懲役5年6月、罰金15万円の実刑判決確定」と共謀し、「体売つても金をつくってこい」などと娘に言つて、繰り返し売春を強要。XXXX年1月から20XX年3月ごろまで売春をさせた。またYYYY年10月から20XX年3月ごろの間、自宅でみだらな行為を繰り返した。

判決理由で、町内裁判官は「被害者が拒絶しているにもかかわらず、長期間にわたり深い影響を与えたことは人格を根本から破壊し、その精神的苦痛は筆舌に尽くしがたい」と指摘した。

20XY年2月6日

中学生の娘に売春強要などの父親に懲役8年

中学生だった娘に売春を強要したとして、児童福祉法違反と売春防止法違反の罪に問われた義理の父親に対し、W家庭裁判所はきのう（5日）、懲役8年の実刑判決を言い渡した。

この事件は、W市に住む47才の男が、中学生の義理の娘の母親と共謀し、去年2月にW市内のホテルで娘に売春させ、受け取らせた現金3万5000円を自分名義の口座に振り込ませたとされるもの。義理の父親は娘の母親と共に「パチンコ代がない。体売つても金をつくってこい」と繰り返し売春を強要したとされ、W家庭裁判所は懲役10年の求刑に対して懲役8年、罰金15万円の判決を言い渡した。町内鎮右裁判官は判決理由で、被告が娘に性的虐待を繰り返し替えてきたことに触れ、「被害者の人間性を完全に無視し、

金づるや性欲のはけ口として扱った」と指摘し、「犯行はまさに鬼畜の所業と言うほかなく言語道断」と厳しく非難した。そして「裁判の中で話がころころ変わり、反省の態度ではない。自分の都合ではなく、過去の自分と向き合い、それを変えるのが反省。刑務所で傷つけた娘に何が出来たのか考え直す機会にして欲しい」と、厳しい口調でさとした。

枝実 は溜め息を吐く。

こんな記事ばかり相手にしていたら気が滅入るというものだ。しかも、ひとつふたつ被告人の実名が出ている記事があったが良いのだろうか。確か性的虐待等に関しては、被害者のプライバシーのために容疑者や被告人の氏名は明らかにしないものではなかっただろうか。

そして思考は計算を始める。添付ファイルの写真に巧と一緒に写っていた女性は二十歳そこそこに見えた。そうすると6年前は中学を卒業したかしていないかという頃。

絶対に、名は聞くまい。

巧と深く関わってしまったというだけで、枝実の人生に厄介事はもう充分だった。君子危うきに近寄らず。何も知らなければ、余計な良心の呵責を感じることもない。

10・遠野ふきの旧友

シチリアの海も、流石にそろそろクラゲが出てきた。

ジェラテリア・ベラ・クリスタの客足も落ち着いてふきの多忙さは軽減され、ここ数日は業務が楽だった。

そんな折に、珍しく旅行会社のほうから仕事が入った。日本人旅行者のガイドだという。ふきはジェラテリアのほうのシフトを調整してもらい、都合をつけた。

名前だけ教わって、フェリーの船着場で待機することになった。

Sig・Tokushi Hinase と書いた画用紙を抱えて待つ。一応時間通りに行っただが、例の如くナポリからシチリアへの便は遅れていた。暇なので、画用紙の裏側に『ヒナセ トクシ様』と書いてみる。ガイドを頼むような客は通常イタリア語が来ない。それはまあいいでしょう。シチリア訛りはネイティブのイタリア人だって分かりにくい。ミラノやヴェネツィアの言葉と比べるともう異国語だ。だが、英語も出来ないケースが多い。英語を喋るイタリア人は少ないので話せたところであまり意味はないのだが、アルファベットすら読めないでシチリアに渡ってくる旅行者もいる。でかかとか名前を掲げていても気付かないで素通りされた経験は何回もある。

まあ、たとえどれだけ英語やイタリア語が流暢でも、やはり日本人相手だと日本語の文字のほうに注意を引きやすい。シーズン外とはいえ、ツアーの出迎えはふきだけではない。ずらっと並ぶアルファベットの中から自分の名前を探し当てるのと、異国の地で片仮名とはいえ日本語を見つけるのでは大分違う。

片仮名を掲げて待っていると、2時間遅れでフェリーが到着した。思ったより早かった。

アジア系の旅客が降りてくるたび「ヒナセ様ー」と声を張り上げる。それにしても、ヒナセトクシ。聞いたことがあるような気がする。

る。久しく日本に帰っていないけれど、そんな名前のタレントでもいたっけか。

やがて、バックパックを背負いキャリアケースを引き摺った若い男が姿を現した。ふきと同一年くらいだろうか。日に焼けた健康的な外見をしている。彼はきよきよとあたりを見廻してふきの手の画用紙に目を留め、笑顔になった。だが次の瞬間、視線を上に移動させて驚愕の表情を作る。

「山上!？」

「え？」

「山上、山上ふきだろ！ ほら俺、日生徳志！ 中学の時一緒だった。」

「あ！ 徳ちゃん？」

「スイ！ うわー久しぶり、元気？ 何してんのこんなところで」

日生徳志。中学校の頃の同級生だった。特に親しいわけではなかったが彼は気さくな性格で、クラス全員からあだ名で呼ばれていた。ムードメーカーで男女クラス学年部活を問わず友人が多く、顔も広かった。中学生の頃家庭の事情でいつも死にそうなほど暗い顔をしていたふきでも、彼は気味悪がることもなく話しかけてくれた。いた。

そうか、それで見覚えがある名前だと思ったんだ。

「私、ここで暮らしてるの。ガイドを勤めさせて頂きます、遠野ふきです。よろしく願います」

「タメ語でいいって、徳ちゃんって呼んで。 遠野？ そっぴや

旅行会社からの連絡でも、ガイドの名前山上じゃなかったけど」

「まあ、ちよつと家庭の事情でいろいろあつてね。数年前に苗字が変わりました」

山上というのは、母の結婚相手、ふきにとっては義父の姓だ。あの事件が発覚してから、ふきは義父の籍から抜いてもらい、母の旧姓に戻った。義父の姓にも嫌気がさしていたし、どこかの新聞社がボ力をやったせいで事件がふきの周りの人間にバレ、わずか数ヶ月で高校を転校する破目にまでなった。転校先で同じことにならない

よう、弁護士に相談して苗字を変えた。

だがそれは高校進学後のことで、中学卒業時に別れた徳志が何も知らないのは当然だった。

「お連れ様はいないの？　ひとり？」

「うん、ひとり」

「珍しいね、若い男の子の一人旅でガイド頼むなんて。あ、行こう。キャリア持つよ」

「いいっていいって」

「でも私ほとんど手ぶらだし、私の仕事だし」

「いやほんと、いいって。女の子に持たせられない」

「そう？　……じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとう」

「それにしても、ほんとイタリアって電車とかフェリーとか遅れるんだな。えらい時間食った」

「徳ちゃんはましなほうだよ。1、2時間の遅れで済むなんて、北ならともかく南イタリアじゃなかなかないよ。リアルに日数単位で遅れるから」

「うわー……」

素直に表情を歪めた徳志に、ふきは笑った。

「徳ちゃん、今大学生？」

「そ、4年生。今回は卒業旅行の下見。だからガイドよろしく、友達とどこ行ったらいいか相談させて」

「あ、なるほど。了解。……徳ちゃん、学校は？」

「単位は4年の前期までで充分足りてるし。あと卒論だけ」

「そっか」

「山上……あー、遠野？　呼びづらい、下の名前でもいい？　ふきは何してるの、留学中？」

いきなり呼び捨てにされたことに少し驚く。シチリアでは名前で呼ばれることが当然で苗字で呼ばれることなど滅多にないのに、やはり日本人に呼ばれるのは感覚が全然違う。

「ううん。私高校卒業してすぐこっちに来たの。こういう仕事して

働いてる」

「大学行ってないんだ？」

「うん」

そんな金はなかった。それに、母と義父が出所する前に、あの2人の手の届かない所へ逃げたかった。

イタリアの成人が18歳だったことも幸運だった。こちらに来れば保護者の許可がどうのとうるさく言われることはなかった。ちなみにアルコールは16歳からOKなので、ふきはイタリアに来てすぐワインデビューした。合法なんだからいいじゃない。

「さて、どうしようか。荷物邪魔だよね。どこかに置いてこれればいいんだけど、ホテルはチェックインの時間まだだね？」

「そうなんだよー。盲点だった。フィレンツェとかナポリとかも行ったけどさ、移動日が辛くて……」

「旅慣れない人はよくやるよね。移動はさ、午後とか夕方にして、移動日の午前中は駅に荷物預けて出発地の観光するほうがいいよ。大荷物持って日中に着いちやうと、ホテルの位置によっては駅に預けるのも不便だったりするし」

「ああ、春の卒旅の時はそうする」

「とりあえず今日はパレルモ・チェントラーレの手荷物預かりに預けようか」

「チェントラーレ？」

「あ、ごめん。中央駅」

「OK」

フェリーは遅れたとはいえ、夜行だったのでまだ午前中である。

中央駅で荷物を預けても昼というにはまだ早かった。

「で、今日どうする？」

「ごめん、その前にメシ……フェリー降りてから何も食べてないし、腹減った」

「わかったけど……んー、まだレストランテは開いてないなあ。切り売りのピッツアとか、バルでパニーノとコーヒーとかになっち

やうけど」

「何でもいい！　っていうかさ、春の時は素泊まりのユースになる可能性もあるんだ。だから外で朝飯食う方法教えて」

「じゃあ、バールだね」

駅近くの適当なバールに入って注文する。練習のためにも注文は自分でしたいと徳志が言うので、ふきは彼の分までは注文しなかった。

「コーヒーの種類が多すぎてわかんねえ……」

「なら朝はカプチーノかカフェラテにしとけば？」

「何で？」

「イタリア人は基本エスプレッソで、正午過ぎるとエスプレッソ以外を頼むと馬鹿にされるの」

「えー！　苦いの嫌いな女の子とかどうすんの？」

「マッキアートならOKだから、私はマッキアートにしてる」

「違いがわかんないんだけど」

「えーと、エスプレッソは専用のマシンで抽出した濃いコーヒー。イタリアの基本。砂糖入れて飲む。」

それにミルクを一滴たらしたのがマッキアート。やっぱり濃い。

カフェラテはカフェオレみたいなもので、半分くらい牛乳。入れる牛乳を泡立てたらカプチーノ」

「普通の濃くないコーヒーは？」

「アメリカノって言わないと出て来ないかな。エスプレッソのお湯割り」

「へえ。カフェラテとカプチーノは朝しか駄目なんだな？」

「カフェラテなら何とか午後でも許されるけど、カプチーノはきついね」

「じゃ、カプチーノ。あとこのパニーノ。何て言えばいい？」

「Uncappuccino e un panino」

「ウン・カップツチーノ・エ・ウン・パニーノ！」

「S？」

バリスタが答え、用意してくれる。値段をイタリア語で告げられたが徳志は分からないようで、紙に書いてもらっていた。

カプチーノとパニーノが乗ったトレイを持って、徳志がテーブルに戻ってくる。

「いやー、ナポリとかでも思ったけど、数字わかんねえときついな」
「そうだね。英語話せる人はバリスタとかやらないし。」

時間とお金とかで数字はけっこう使うから、挨拶より数字覚えてたほうが便利かも。挨拶なんて会う時も別れるときもチャオでいいんだから」

「勉強になります」

徳志はパニーノにかぶりつく。割合気に入ったようだった。

「ん、うまい。正直財布の事情でレストランばかり行くわけにもいかないしさ、だけど安い食うにしてもイタリア来てまでマクドナルドとか入るのもどうかと思って、安いメシでおかつイタリアっぽい探してたんだよ」

「ならバーはおすすめ。日本人のコンビニみたいな感じで、イタリア人にはすごく身近なものだし。」

あと、やっぱり切り売りのピッツアかな。スタンドで買って食べるの」

「でもあれ、名前書いてなかったりするじゃん。イタリア語でのピザの種類とかわかんなくてさ」

「指差して Questo! って言えばいいよ」

「え、何、メモる。『クエスト』?」

「そう」

その場で旅行に役立つフレーズをいくつか教え、カプチーノを飲み干したので席を立った。

チェックしたい観光名所を聞き出し、今日と明日のプランを立てる。明後日には徳志は別の場所へ移動してしまう。旅行者の移動はいつも忙しい。

その日は街の中心部に近い歴史的建造物などの観光名所をいくつかと、中心部のアウトレットモールを案内し、夕方駅で荷物を取ってホテルまで送り届けて別れた。

翌日は朝から少し遠出するような観光名所を巡り、色々と案内する。

「春休みの旅行なら海水浴は出来ないし、来年の復活祭は4月だから遅すぎるよねえ。いつそ2月くらいに来たほうが空いてていいかも。ゆっくり観光スポット巡ってみれば？」

「うん。まあシチリアだけ見るわけじゃないし、色々考えとくよ。それより、今日はレストランで食べたい。シチリアっぽい料理教えてよ。毎食とはいかないけど1回くらいはちゃんとしたモノ食わないと。最低英語メニューがあるところ、出来れば英語通じるスタッフがいるところ」

そう言われて、ふきは考え込む。エンツォは手術を控えて絶対安静、ふきよりずっと食生活に注意が必要なはずだ。ならばまさかりストランテに来たりはしないだろう。

「……いいよ。じゃ、私がバイトしてた所案内する。英語メニューも英語話せるスタッフもいるし、もし何だったら次来るとき言ってくれば、私が臨時で入らせてもらってサーブできるかも」

実際、日本人の団体客の予約が入ったときなどは、ふきがジェラテリアの業務を休んでレストランテに駆け出されたこともある。

徳志を連れて行って問題は無いだろう。

「レストランテ・ベラ・クリスタ？　どういう意味？」

「字面だけなら『麗しのクリスタ』って意味だけど、オーナーの奥さんがクリスタベラって名前で、それをもじってるんだと思う」

胸に刺すような痛みを覚えたのはもう昔のことだった。

入った途端しまったと思った。エンツォはいなかったがレオがいた。しかも他のスタッフの顔ぶれを見ると、今日のメンバーで英語が話せるのはレオだけだ。マンマ・ミーア。

「Buonasera・Good evening Mr・
ブオナセーラ。こんばんは）」

「あ、グッド・イブニング」

徳志がほっとした表情でレオに英語で挨拶する。

ふきは口早に、観光旅行の下見客だと告げた。レオはちらりとふきに冷たい視線を寄越したが、表面上はにこやかに上席へ案内してくれた。

「……ふき？ 顔色悪いけど大丈夫？ 疲れた？」

「ううん、何でもない。心配してくれてありがと、徳ちゃん」

「そうか？ ならいいけど……なあ、イタリア料理ってどう食べるんだ？」

「えーとね。フルコースなら、冷たい前菜、温かい前菜、ピッツア、パスタ、肉、魚、デザート、カフェ、リモンチェッロ。飲み物はワインかミネラルウォーター、シチリアならマンダリンジュースもおすすめ」

「ちょ、ちょっと待って、量多すぎねえ？」

「だから、多いと思ったら全部じゃなくてひとつふたつ外すの。前菜ひと皿とピッツアだけとか、女の子はよくやるね。団体で来るんなら、全部ひと皿ずつにして皆で一口ずつ分け合うとか。流石にドルチェとコーヒーは人数分いるけど、料理をシェアする分には何も問題ないよ」

「そっか、びっくりした。シチリアならではのおすすめ料理ってある？」

「前菜はカポナータだね。プリモは、うーん……ウニのパスタとかどう？ イタリアで唯一ウニ料理出すのがシチリアだよ。『ウニの美味さがわかるのは日本人とシチリア人だけ』とか言われるし。あとは折角海に囲まれてるんだから魚料理。デザートはカンノーロがシチリアの定番だよ。焼いたパスタ生地の中に、リコッタチーズとドライフルーツ詰めてるの」

「お、いいな。じゃそれで行こう。ピザはシチリアじゃなくてもイ

タリアならどこでも食えるし、今回はパス。注文は俺にさせてな」
「OK」

徳志が手を上げると、レオが近付いてきた。私がいるんだから英語話せないスタッフでもいいのに、とふきは思う。大体彼の仕事はもつとグループ全体の根幹に関わる経営・マネジメントといったことではなかったか。

英語のメニューを見ながら徳志が注文し、レオは慇懃にそれを承る。

食事は美味しかったが、レオの冷たい視線が背中に突き刺さるようで、ふきはとても寛いだ気分にはなれなかった。それでもムードメーカーの徳志の持ち前の明るさが場を盛り上げてくれて、テーブルでの会話はまあまあ楽しめた。

会計の際、徳志は奢ってくれようとしたが、ふきの飲食分は観光会社の経費で落ちるからと断った。ホテルまで送っていいこうかと言ったら断られた。もう暗い時間だし女の子を付き合わせられない、道は覚えたから大丈夫だと言われ、レストランで別れることになった。

最悪だ。

明日の移動に備えて早く帰るといふ徳志を見送ると、ふきはレオに呼び止められた。

まったく、最悪だ。

さて、ジェラテリアの仕事を休んでデートのようなことをしていたと非難されるか、それともイッポーリトのことか、一体何を言われるのだろう。

11・遠野ふきの錯乱

逃げ帰るわけにはいかなかった。

今日の食事代の領収書を貰わなければ、観光会社に経費として請求することが出来ない。50ユーロの食事代は、自腹を切るには痛すぎた。

レオに説明を求められ、リストランテの奥の休憩室に連れ込まれた。

「Chi?? (誰だ?)」

「Un vecchio amico, con cui ho frequentato la stessa scuola in Giappone. (旧友です。日本で学校が一緒だったんです)」

「Non sei venuta al lavoro per uscire con il tuo amico? (男友達とデートするために仕事を休んだのか?)」

「? il lavoro mio! L'ho fatto per il mio visto. Se voi potete darmi il visto, non dovvo farlo. (仕事です! ビザのためです。あなた方がビザをくれるなら、しなくていい仕事だったのに)」

イタリアの就労条件は厳しい。もともとイタリア人の失業率も高いため、外国人が就労ビザで正規に雇用されるのは極めて難しいのだ。雇用主が、どうしても従業員が外国人でなければならぬ理由を書面にして申請し、それが認可されなければビザは降りない。加えて税金もかかるため、大抵の雇用主は許可が下りるかどうかも分からない外国人労働者のために、書類を作成して国に問い合わせる手間をかけたがらない。比較的ビザが降りやすいのは観光業であり、ふきも一応観光会社と正規の契約を結んでいる。ベラ・クリスタで

の扱いはアルバイトだった。

「OK, capisco. Ma un'altra cosa da chiederti. Che cos'è successo a Ippolito? (OK、分かった。だがもうひとつ質問がある。イッポリトに何があつた?)」

兄弟思いで結構なことだ。自分にも愛情溢れる兄がいてくれれば、人生は少しは違っていただろうか。巧の顔を思い出して少し憂鬱になりながらも、ふきは慎重に言葉を選んだ。

「Non hai sentito niente da tuo fratello? (弟さんから何も聞いてないんですか?)」
「Ha detto che tuo cugino gli ha fatto la violenza. (君の従兄弟に暴力を振るわれたと言っていた)」

「Non ha detto perch'è? (理由は言ってますでしたか?)」

「Senza ragione ha detto. (理由もなく、と言っていた)」

センツァ・ラジョーネ。理由もなく。あるいは分別なく。イッポリトのほうがよっぽどセンツァ・ラジョーネだ。

だが、どうしよう。巧が勝手にやったことだと言って、レオが信じるだろうか。

それは疑問でも不安でもなく、単なる反語だった。レオがどう考えるかなど、ふきは充分に分かつていた。今のようにふきから話を聞こうとするだけで、レオにしてみたら有り得ないほどに譲歩しているのだろうか。

しかしながら、上手い言い訳も思いつかなかった。

「Non lo so. Non c'erol? Non ho mai parlato niente di Ippolito a Tak... a mio cugino. Però... io non l'ama vo, e la ami

a coinquilina lo sapeva molto bene. Lei mi voleva lasciare Ippolito e un mese fa ha detto qualcosa di lui a mio cugino, e lui? uscito. Dopo ho niente contatti con Ippolito. Nessun dating, nessun telefono, o ne nessun email. La nostra relazione? finita. (知りません。私はその場にいませんでしたから。イッポリトのことをタク……従兄弟に言ったこともありません。けど……私は彼を愛していなかったし、ルームメイトはそのことをよく知っていました。私とイッポリトを別れさせたがつていて、ひと月前彼について何か私の従兄弟に言ったみたいで、従兄弟は出かけて行きました。それからイッポリトから何の連絡もありません。デートも電話もメールもなしです。私たちの関係は終わりました)「

「Non sapevi niente?! (何も知らなかったと!?)」

「Non lo sapevo... al primo. (知りませんでした……はじめは)」

「Quando e che cosa hai saputo? (いつ、何を知った?)」

「Quella notte, quando mio cugino? tornato al nostro appartamento, mi ha detto di non preoccuparmi più. In quel momento non lo capivo. Ma qualche giorno dopo ho visto Ippolito tutto fasciato. Non mi ha notato. Poi ho pensato se... mio cugi

no (あの夜、従兄弟が私たちのアパートに帰ってきて、もう何も心配すると言ったんです。その時は何のことだか分かりませんでした。でも数日たって、全身に包帯を巻いたIPPORITOを見かけて。向こうは私に気づきませんでしたけど。それでもしかしたら……従兄弟が……)「

「Perch? non mi hai detto a quel momento! (なぜその時僕に言わなかった!)」

「Non volevo pensarci! (考えたくなかったんです!)」

レオは憎々しげな視線をふきに向ける。

けれど、ふきは真実IPPORITOに関わりたくなかった。巧がやったのならやりすぎだとは思ったが、だからといって1年以上DVを繰り返された相手を心配できるほどの優しさは持ち合わせていなかった。

だがそんなふきの事情など知ったことではないレオは、吐き捨てるように言う。

「Che fredde. (冷たい女だな)」

もうそれでいい。今更レオにどう思われようと構わない。

「Se non l'amavi, perché stavi con Ippolito? (IPPORITOを愛していないのなら、どうして付き合ったんだ)」

「Chiedi Ippolito. Lo voglio sapere anche io. Mi intimida va.」

(IPPORITOにきいてください。私だって知りたい。私は脅迫されていたんです)」

「Come ti intimida va? (どんな脅迫だ?)」

それを言えたらそもそも脅されていたりしない。IPPORITOはどうやってか、ふきが最も知られたくない秘密を握っていた。そのせいで、彼の言いなりになるしかなかった。

ふきがIPPORITOとのことで一番恐れているのは、彼が自棄に

なつて秘密をばらしたりしないかということだった。証拠は巧が奪つたらしい。オンラインに上がっていたものはふきが消したし、巧はUSBを奪った上パソコンのローカルディスクに残っているデータも本体ごと壊したと言っていた。けれども、イッポリトが秘密を知っていることには変わりない。ばらせばイッポリトは脅迫罪に問われるが、それも厭わずふきを破滅させようとすれば彼には出来るのである。

「Senon dici niente non posso crederti. (何も言わないのなら信用できるはずがないだろう)」

「Allora non devi credermi. Dammi la ricevuta e vado via. (だったら信用してくれなくていいです。領収書をください、帰ります)」
「..... Letue confusioni (.....

君の痣)」

「Che? (え?)」

「Ha fatto davvero Ippolito? (本当に、イッポリトがやったのか?)」

「Cicredi? (信じてくれるんですか?)」
そんなことはないだろう。レオがただ弟に甘くてふきには厳しいか、そんなことはとうの昔に思い知った。

「Non mi pare che ci creda. Ami tuo fratello tanto tanto pi? dime. Ma non mi riguarda. Dammi la ricevuta. (まさかですよ。あなたは弟さんのほうがずっとずっとお大事ですもん。でも私にはどうでもいいです。領収書をください)」

瞬間、顎を掴まれ、何をも思つた時には唇が塞がれていた。口の中にレオの舌が侵入して、ふきはたちまちパニックを起こす。

「んっ!」

声を上げようとしても合わせられた唇のせいで悲鳴はくぐもり、
暴れようともレオに押さえ込まれてびくともしない。

いや！ 誰か、誰か助けて！

脳裏に忌まわしい記憶がフラッシュバックする。義父。 IPP
リト。そして金を置いて通り過ぎていった数多の

ふきは相手の舌を思い切り噛んだ。力が緩んだ隙に突き飛ばす。
そのまま一目散に逃げ出した。

「フキ！」

後ろで我に返ったらしいレオが叫ぶが構ってられない。リスト
ランテをそのまま飛び出した。

「Aspetta! Scusa, Fuki! (待ってくれ！

悪かった、フキ！)」

道路に出ても彼は追いかけてきた。

「いや！ 来ないで！」

リストランテ・ベラ・クリスタからふきのアパートまでは歩いて
30分以上かかるが、ふきは全力疾走で駆け抜けた。普段運動もし
ていないのによくまあこれほど走れる、と思うような余裕もあら
ばこそ。

走っても走ってもレオは追いかけてきて、ふきは気が狂いそうだ
った。アパートに着くと震える手で何度も失敗しながら鍵を開け、
部屋に飛び込む。

「ガイア！ ガイア！」

半狂乱になつてルームメイトの名前を呼ぶ。奥の部屋から訝しげ
な様子のルームメイトが姿を現した。

「Fuki? Che cosa?? (フキ？ 何、どうしたの
?)」

「ガイア！」

ふきは年下のルームメイトに抱きついた。

「フキ！」

「Gaia... aiutami... aiutami...」

「…! (ガイア……助けて……助けて………!)」

「Fuki, calmati. Cos'è successo? (フキ、落ち着いて。何があったの?)」

ふきの答えは言葉にならず、ただガイアに抱きつく。ガイアは背中に手を回し、なだめるように抱き締め返してくれた。

ノックの音が響く。それと同時に、男のものらしい荒い息遣いが後ろから聞こえて、ふきは身を竦ませた。このフラットのドアは、飛び込んでそのまま、開けっ放しだった。

「レオ・クランキ?」

戸惑うようなガイアの声が耳元で上がる。

「Sei... (君は……)」

「Sono Gaia, la coinquilina di Fuki. Cosa le hai fatto? (あたしはガイア、フキのルームメイト。この子に何したの?)」

「Non venire! (来ないで!)」

ふきはガイアに抱きついたまま叫んだ。ガイアは訳が分からない様子で、それでもふきの背を優しく撫でながら、レオに向かって陰のある声を出す。

「Leo, non ti abbiamo invitato. Non so ch'è successo tra Fuki e te, ma chiaramente la stai spaventando. Vai via, non ti vuole stare qua. (レオ、招待した覚えはないんだけど。フキと何があったか知らないけど、明らかに怖がらせてる。出てって、フキはあんたにここにいてほしくないみたいだから)」

「Aspetta, fammi spiegare... (待ってくれ、説明させてくれ)」

「No! (いや!)」

「...Cos'è dice. Almeno ora no. Vattene,? la nostra camera...」

って言ってる。少なくとも今はダメ。出てけ、ここあたしたちの部屋だよ」

「Ma - - （しかし）」

「Vattene! （出てけ!）」

ガイアが何やら振りかぶるモーションが、ふきにも伝わった。どうやらテーブルの上のトマトを投げつけたらしい。当たってぐしゃりと潰れる音がした。

躊躇いがちな足音が数歩遠ざかると、ガイアは片腕でふきを抱き締めたまま半ば引き摺るようにドアまで移動し、勢いよく閉めて鍵を下ろした。

ドアの前の足音が階段を降りていくと、ふきは全身から力が抜けてその場にへたりこんだ。

「Stai bene? （大丈夫?）」

柔らかく微笑みかけてくれるガイアに、涙がぼろぼろと零れ落ちた。

11・遠野ふきの錯乱（後書き）

や、やっと恋愛要素……

ハーレクイン風味の傲慢だけだったこいいヒーローが書きたいのに、
気づけば単に嫌な奴（汗）。

12・遠野ふきの戦慄

その夜は、体内の水分を全て絞り出すように泣いて泣いて泣いた。ガイアはバスタブに湯を張り、ホットミルクを作ってくれ、中々泣き止まないふきに嫌な顔ひとつせずにつき合ってくれた。結局ふきは泣き疲れてガイアに抱きついたまま彼女のベッドで眠ってしまった。

翌朝、まどろみの中で何となく意識が浮上し、ぼうつとした頭で時計を見やって悲鳴を上げた。9時30分。ジェラテリア・ベラ・クリスタのオープンは午前10時。完璧に遅刻だった。

朝食も化粧もすつ飛ばして、心配するガイアをよそに家を飛び出す。走りながら電話して平謝りし、遅れそうだと伝えた。そのついでに徳志からメールが入っているのに気づいた。昨日、一昨日の案内の礼と、今朝早くパレルモを発ったことが書かれてあり、ふきは見送れなかったことを心底心苦しく思った。

開店ぎりぎりに店に飛び込むと、同僚が皆ぎよつとした顔でふきを見た。ふきは口早に謝ってすぐ制服に着替えようとしたが、アシスタント・マネージャーのマリーナ・ヴィニャレッリに呼び止められる。まだ30代半ばのマリーナは普段から笑顔を絶やさない優しい物腰の女性だったが、今日ばかりは顔を顰めてふきを奥の事務室に呼んだ。

「Marina, scusami. (マリーナ、ごめんなさい)」

「Fuki, oggi non devi lavorare come conista. (フキ、今日は接客しなくていいわ)」

「... Cosa vuol dire? (.....どういう意味

ですか？」

「Guardati nello specchio. Hai una brutta faccia. (鏡を見なさい。酷い顔よ)」

マリーナがトイレを指差すので、ふきはトイレの鏡で自分の顔を見た。

あらら……。

確かに酷い顔だった。すっぴんの上に泣き腫らした顔で、人生最悪に不細工だった。

特に目まわりが酷い。ふきは元々隈が出易いほうでファンデーションが欠かせないのだが、今日はそんな時間もなかったし、あまり眠れてもいないので見事に真っ黒である。加えて大泣きしたおかげで目蓋は腫れぼったいし目は充血している。ついでに朝何も食べていないこともあってか顔色も悪い。

トイレから戻ると、今日は客の前に出すわけにいかないと言われた。事務室やトイレの掃除と電話番、それでも暇ならマリーナの仕事である帳簿の整理を手伝えということだった。

2日も休んだ上に肉体労働から解放されるのは同僚に対して申し訳なかったが、かといって化粧道具は家に置いてきたし今更どうも出来ない。ふきは敏感肌で、普通の化粧品だと酷い肌荒れを起こすのでマリーナか誰かの化粧品を借りるわけにもいかなかった。

というわけで、ふきは俄かに大掃除する羽目になった。開店前にある程度の掃除は済ませてあるので、仕事をしようと思えば普段手をつけないところまでやるしかなかったのだ。トイレは便器は勿論洗面台から床から棚から換気扇まで全て磨いてピカピカにして、事務所も散らかったものを片付けた後幕で丁寧に掃き濡れ雑巾で拭き窓を磨き、エアコンのフィルターを掃除し、ついでにテーブルや花瓶も水拭きした。

それが一段落すると、手を入念に洗ってからエスプレッソを入れた。スタッフの誰かが休憩する時間だった。

はじめに休憩に入ったのはふきよりひとつ上の大学生アルバイト、ベルナルディーノ・ラディカーティだった。

「Bernardino, scusa. (ベルナルディーノ、ごめん)」

「Non preoccuparti. Ma che hai? (気にすんなって。でもどうしたんだ?)」

エスプレッソを差し出しながら、ふきは曖昧に微笑んだ。

「Il sorriso arcadico? Come al solito. (アルカイク・スマイル? いつもそうだな)」

確かにふきが何かを話したくない時や言葉が分からない時、曖昧に笑って誤魔化すのはしゅっちゅうだった。それに慣れているベルナルディーノは特段気を悪くした様子もなく、事務室を見渡す。

「Hai pulito tutto? vero che

i giapponesi sono il pi? puliti in nel mondo. Grazie. (全部完つ壁に掃除したな。日本人が世界で一番綺麗好きなのは本当なんだ。ありがとう)」

「Prego. (どういたしまして)」

ベルナルディーノが飲み終わったエスプレッソのカップをふきに差し出し、ふきは笑ってそれを受け取るうとした。

ガシャン!

だがソーサーの下でふたりの指先が触れ合った瞬間、ふきはカップを取り落とした。

「Oh! Scusa, scusami! (ああ! ごめん、ごめんなさい!)」

慌てて割れたカップの破片を拾おうとする。だが同じように破片に手を伸ばしたベルナルディーノの腕にふきの手が当たり、ふきは小さく悲鳴を上げて飛びのいた。身体が小刻みに震える。

「フキ?」

「Scusa mi. Io... (ごめんなさ

い。私……」

自分で自分の反応が分からなかった。ベルナルディーノに触れると、無意識に体のほうが拒絶してしまう。こんなことは今までになかった。ベルナルディーノは好青年でずっとふきに良くしてくれたし、ふきは彼に悪感情を持ったことはない。それでも、体は怯えるのをやめない。

気まずい沈黙が流れる。何を言っているかわからず数秒間固まっていると、ノックの音が響いた。救われた気分で「Avanti. (どうぞ)」と言う。だが次の瞬間、気分は地獄に突き落とされた。

ドアを開けてそこに立っていたのは、眉間に皺を寄せたレオ・克蘭キだった。

世界が色を失くす。濁る視界の中で床がぐつとせり上がり、ふきは肩をしたたか打ちつけた。

耳元で潮騒の音がする。他の音はかき消されて何も聞こえない。聞こえない

無音の砂嵐。

目の前は白黒で何も見えない。耳が機能をほとんど失ったかのようになんか静かだった。頭が痛い。腕を掴まれ揺えられる感覚が酷く遠かった。

遠くから潮騒の音が聞こえる。その更に遠くで、誰かが何か叫んでいる。

「、」

ぴしゃりと、頬を軽く張られる感触があった。だがその感覚が遠い。自分の皮膚が脳から10メートルくらい離れているような気分だった。

「きちちゃん、ふきちちゃん」

名前を呼ばれているのだと思うが、誰の声か分からない。答えようにも舌が鉛のように重くて動かせない。ただ聴覚だけは、ゆるゆ

ると戻ってきた。

「とつとと気分を立て直せ。あまり情けないことやってると君を見限るよ」

耳元でドスの利いた低い声が響き、瞬間、五官が一瞬で機能を回復する。目の前に、巧の顔があった。

「巧……さん……？」

頭痛と吐き気が酷い。目の奥がずきずきと痛んで眩暈がした。

「立てるかい？」

差し出された手に掴まろうと自分の手を重ねた瞬間、体中に戦慄が走り一瞬にして手を引いた。まるで静電気にもあったかのような。体がかくかくと震え出す。

「ん？ ああ 成程。もしかしてそういう事？ なら……スクーザ、マリーナ？」

巧がイタリア語でマリーナに何か話し掛け、マリーナは訝しげにふきの傍にやってきた。ふきの手を掴んで引く。マリーナ相手だと震えはおさまり、ふきはスムーズに立ち上がった。

「やっぱりか」

「巧さん……あの、どうしてここに？」

「どうしても何も。ランチに誘おうと思って来たら、奥で倒れてるって言うし。びっくりしたよ、大丈夫？」

そう言って巧はふきの腕に触れる。再び体が震え出した。巧はふきの耳元に口を近づけ、またもや低い声で凄むように囁いた。

「死に物狂いでその震えを止める。でないと本当に殺す」

ふきが一瞬呼吸すら止めると、巧はふきの背に腕を回してぼんぼんと軽く叩く。労わるような響きの声で、優しく語りかけた。

「Non preoccuparti. Va bene, va tutto bene. Nessun problema, Sono qui. (怖がらないで。大丈夫、もう大丈夫。何も心配要らない、俺はここにいるよ)」

猫なで声に全身がぞわつと総毛だった。だが、何とか取り繕わな

いと後で巧に何をされるか。震える体を意志の力で無理やり押さえつける。全身が強張った。

「朝ごはん食べた？」

巧の意図も分からないまま、ふきは首を横に振る。

「Marina, vorrei pranzare con
la cugina, posso? Pare che lei
abbia un'anemia. Non ha mangi-
ato niente questa mattina, for-
se? la carezza di ferro. Pen-
so che debba mangiare qualcosa.

(マリーナ、従姉妹と一緒に昼を食いたいんだけど、構わないかな? 彼女、貧血みたいだ。今朝何も食べてないそうだから、多分鉄分が足りない。何か食べないと駄目だ)」

「OK. Va, Fuki. (いいわ。行きなさい、フキ)」

「Per? Marina. . . (でも、マリーナ)」

「Non puoi lavorare in quell'ic-
ondizionali. (その体調じゃ働けないでしょ)」

「. . . Grazie. Scusate tutti. (」

∴ ありがとう。みんな、ごめんなさい)」

巧に半ば担がれるようにして連れ出される。店を出る直前、複雑な表情のベルナルディーノとすれ違う一瞬、「Scusa. (ごめん)」と詫びの言葉が口について出た。口を引き結んで沈痛な面持ちのレオとは、目を合わせられなかった。

13・遠野ふきの窮地

「で、何食べる？」

シチリアの太陽が眩しい。頭がくらくらした。

「あんまり、食欲が……」

「何言ってる。手術に向けて体調整えろって言われたんだろう？」

エンツォが死んでも良いってわけじゃないだろ」

「……じゃ、ピッツァ」

「OK。そのピッツェリアに入ろう」

切り売りのピッツァがガラスカウンターの所に所狭しと並べられている。チーズの匂いが鼻をくすぐると、現金なもので一気に体が空腹を訴えた。

「俺はサラミ。ふきちゃんは？」

「ヴェジタリアーナ」

「野菜？ 何、ダイエット？ 体重増やさないといけないんじゃないのか」

「かと言って、脂肪でぶくぶくになるわけにも……ピッツァは小麦粉で炭水化物は十分ですし、タンパク質はチーズでたっぷりだし、栄養バランス考えないと」

「ま、いいけど。飲み物は？」

「オレレンジジュースで」

「了解」

イタリアでは、少し歩けば広場に突き当たる。広場のベンチにふたりで腰掛け、ピッツァを頬張った。

「で、昨日何があった？」

「……知ってたから、今日店に来たんじゃないんですか？」

「君は俺を何だと思ってるんだろうね。俺がいなかった場所でのことを、何で俺が何もかも把握してるわけがあるんだ。しかも昨晚だよ、情報を集めるには時間がなさ過ぎる。せいぜい昨夜君が、レオ

とふたりで休憩室に入ったと思ったら血相変えて飛び出してきて、ボロアパートまでレオと盛大なうふふあはは待てよ！チエイスを繰り広げ、レオはガイアちゃんにやれストーカーだのキモいウザい死ねだの言われて追っ払われて、その後君はガイアちゃんとそこはかとなく百合な雰囲気になり、今朝はいかにも泣き腫らしましたって顔で出勤して、何故か男に触られたら拒絶反応を出してるくらいしか知らないよ」

「全部知ってるじゃないですか……ていうか、何ですかその形容」
うふふあははって。百合って何だろう。

ガイアが喋ったのだろうか。でもリストランテでのことは彼女は知らないはずだ。巧はどうやって……いや、話術に長けた彼のことだ、聞き出すのは多分それほど難しくない。

「休憩室で何があったかまでは知らないよ？ 何があった、もしかしてレオに襲われたとか？」

「襲われたって……まさか、そんな」

「えー。未遂でもなく？ 胸触られたり服破られたりとかは？」

「ないです！」

「何だ、つまらん」

面白がられてたまるか、とふきは思う。そんな洒落にならないことが起こったら笑い事ではない。

「じゃ、何されたんだ。何もされてないにしちゃ今日の反応、異常過ぎない？」

「わかりません。キスされただけです」

「それだけ？」

「それだけです」

今思い起こせば何だかんだで領収書を踏み倒された気もする。だがそれは別問題で今は関係ないだろう。改めて取りに行く気にもなれなかったし、もういい、泣き寝入りしよう。

「キス程度でうるたえるほど初心でもないだろうに。何なんだい」

「自分でも、わかんないんですよ……」

レオはともかく、ベルナルディーノその他の同僚に対して失礼な態度を取りたいわけではない。なのに相手の気分を害するようなことばかり繰り返して、ひたすらに自己嫌悪である。

「……アビガか」

「はい？」

「いや、何でもない。それよりふきちゃん」

「はい」

「俺、アビガと会うよ。また」

「！ な、んで……」

「話したいことがあるんだ。明日の夜9時、俺のホテルで。邪魔はしないだろ？ USBも俺のところにあるし。それに」

巧は懷から新聞記事のコピーを差し出した。

「こ、れ……！ 何で！」

「個人がインターネットというメディアを手にしてから、何も秘密になんて出来なくなっただよ。たとえイタリアまで逃げてもね。」

山上陽子被告の刑は懲役5年6ヶ月。もう出所したんじゃないかい？ お母さんに連絡は取ったの？」

「関係ありません！」

「無いことはないだろう。ふきちゃんの母親なら、俺にとっては叔母って言うてもいいくらいだし」

「なんで……どうして……」

「アビガと会うよ。邪魔しなければしばらくは口外しない。ま、この記事持つて行ったところで読めるのはエンツォくらいのもものだろうけど」

それが一番困る。巧は分かって言っているのだろう。

「残念ながらね、ふきちゃん。エンツォが日本にいた頃、一番親しくしていたのは俺の親父だ。兄弟だしね。」

親父は君の事なんて知らないけど、遠野陽子の事は良く覚えていた。エンツォ関連でシチリアに呼び出されて、俺が何も下調べしてこなかったと思うかい？ エンツォが日本にいた時の交友関係を調

べて、そいつらが今どこで何をしているのかもちゃんと調査してから来たんだよ。でなきゃ何で先々月、俺が君のフラットのドアを叩けたと思うんだい。『こんばんは、俺は緒貝巧。遠野ふきちゃん、君の従兄弟です』」

「……………」

「君とエンツォの関係は誰にも言っていない。親父にも、遠野陽子 山上陽子がエンツォと別れてからどうしたかなんて一言も言っていない。だからふきちゃん、俺の言うことは聞いておくんだ。」

いいね？ 明日の晩、アビガに会う。邪魔はするな。協力しろ」
ふきは押し黙り、頷くしかなかった。血の流れる音が聞こえない。巧は晴天の下で晴れやかに笑った。

「ほらほら、そんな顔で仕事するつもり？ ただでさえ今日は酷い顔なのに、仏頂面したら見るに耐えないじゃないか。」

笑ってしつかり働いておいで。エンツォの手術まで、君も波風立てたくないだろう」

カッターナイフが無性に恋しい。

店に戻ると、ベルナルディーノは制服から私服に着替えていた。彼はもうあがりだ。

同じアルバイト仲間とはいえ彼は学生の小遣い稼ぎ程度なので、週に何回か授業のない時間帯に働くだけだ。今日も多分本が詰まっている重そうなバッグをぶら下げているから、これから大学へ行くのだろう。

「Ciao, Fuki. Ci possiamo baciarci? (じゃあな、フキ。バーチできる?)」

おどけた口調を装っていたが、戸惑いや不安感が透けて見えた。バーチとはイタリア式の挨拶で、出会い頭や別れる際に軽く頬と頬を触れ合わせる。何も恋人同士に限らず、家族、友人、初対面の相手とも珍しくない。ふきもガイアやベルナルディーノと挨拶する

際はたいていバーチをしていた。

「Certo. (もちろん)」

軽く頬が触れ合う際に、いつものようにリップ音を立てる。ベルナルディーノは笑顔になって手を振り、自転車で駆けていった。

事務室に戻ると、マリーナがいた。

「Ora stai bene? (もう大丈夫?)」

「S? Scusa. (はい。ごめんなさい)」

大丈夫。

巧相手には(脅されてとはいえ)震えは止まったし、ベルナルディーノとも少し体は強張ったけれどもバーチ出来た。もう、何とかやれるだろう。自分は意外にタフだと思う。でなければ、15年もあんな毒親に付き合っただけで狂わずにいられた筈がない。

だが、レオが話があるそうだからとマリーナが出て行き、レオが入ってくると、たちまちにふきは硬直した。

やっぱりタフだったのはなし。タフじゃなくていい。なくていいから誰かこの人何とかして!

というか、レオは今までどこにいたのだろう。店頭にいたようにも見えなかったのだが。

かたかたと、体が震え出す。カチカチという音が近くで響いて、何の音だろうと疑問に思う。ふいに自分の歯が打ち合わさる音だと気づいて気が遠くなった。

「Hai dimenticato questo. (忘れ物だ)」

そう言っレオがテーブルの上に置いたのは、昨夜の領収書だった。

「... Grazie. (...ありがとうございます)」

手に取ろうとしたが、指先が震えて上手く掴めない。ふきは舌打ちしたい気分で領収書に手を叩きつけ、そのまま引ったくった。バン! と大きな音がした。掌が痛い。

「... Come maleducata. (無作法だな)」

「Scusami. (失礼しました)」

わざとではない、念のため。レオを不愉快にしようと思ったわけでもない。

だが、それを言っても詮無いことだと思われた。そもそもふきの行動がレオを愉快にしたためしがないのだ。

領収書を折りたたんでポケットに入れる。震える手で折った領収書はぐしゃぐしゃになった。

「... Hai freddo? (……寒いのか?)」

がくがくと震えるふきの腕に、レオの両腕が伸びる。

「いやっ!」

ふきは思わず振り払おうとした。ぱしん、と思ったより大きな音が出た。

レオは一瞬呆けたような顔をして、きつく口を引き結び、眉根を寄せた。

ぐい、と両手で両二の腕を掴まれ、押さえ込まれる。

「Lasciami! (放して!)」

「Comportati bene. Non si agisce così? (con il tuo superiore. (

行儀良くしろ。上司の前で取る態度じゃない)」

「Non toccarmi! Non toccarmi, preferire! (さわらないで! さわらないで、お願い!)」

「Che fai? Non credo che c'abbia l'androfobia. (どうしたんだ? まさか男性恐怖症つてわけじゃないだろう)」

「Pu? darsi! Non voglio nessun uomo toccarmi! (かもしれません! 男の人にさわられたくないんです!)」

レオの瞳の中にカツと何かが燃え上がった、ように見えた。次の瞬間、ふきは彼の腕の中にいた。身動きが取れないよう抱きすくめ

られ、耳元で低い声が響く。

「L'androfobia? Tu, che facevi lo stalking ad Enzo, (男性恐怖症? エンツォをストーキングしていた君が)」

「!」
耳朶を軽く舐められ、甘噛みされる。シチリアではこれは決闘の合図だったか?

「Che era la ragazza d'Ippolito, (イツポーリトの恋人だった君が)」
「ひっ」

前を留めていなかった上着を下ろされ、首筋を吸われる。痛みと、気持ち悪さが同時に襲ってきた。

「E che hai fatto questo con me ieri, hai l'androfobia?! (僕と昨日こんな事をした君が、男性恐怖症だって!?)」

唇に噛み付くようにキスされた。

い、やだ……いやだいやだ!

恐怖しか感じなかった。どうして。何で。なぜ、私が

そのまま、ふつりと意識は途切れた。

14・遠野ふきの沈鬱

目を開けると、見覚えのない天井が目飛び込んできた。

シンプルなデザインとはいえシャンデリアがぶら下がっている時点で別のお宅だ。

ただど何だかデジャ・ヴがあつた。見たことはないが、このシャンデリアや染みひとつない天井が醸し出す雰囲気、何か覚えがある。

はて、と首を捻りながら起き上がると、そこは見慣れないベッドだった。二人くらい寝れそうな。

シルクか何かの上質なシーツに手を突いてあたりを見回すと、あまり見たくないものが目に飛び込んできた。

「……夢か、寝なおそう」

「Purtroppo non capisco giapponese.（残念ながら日本語は分からない）」

仏頂面のレオが一人掛けのソファに座ってこちらを見ていた。やっぱり現実逃避は無理か。

「Dove sono?（ここ、どこですか?）」

「La camera mia.（僕の部屋だ）」

ということは、イッポリトの家。

イタリアでは成人しても実家に残るケースが珍しくない。その理由として一に就職難で一人暮らしする程稼げる若者は稀だということ、二にそもそも空いている部屋がないことだ。イタリアの都市の大部分は今より人口が少なかった中世に造られたもので、景観を維持するために家屋を取り壊したり新しく建てたりは法律でかなり厳しく制限されている。ふきがルームメイトを探さなくてはならなかった理由もそれで、一人暮らし用の部屋は数も少なければ空きもないため、ファミリータイプをシェアするしかない。

閑話休題。

クランキ家なら、道理で既視感があると思った。親のいないときに何度連れ込まれたことか。

「Vado via. (帰ります)」

「Aspetta. Stai bene? (待て。大丈夫なのか?)」

「Anche se non stia bene, andrei via. (大丈夫じゃなくても帰ります)」

「No. (駄目だ)」

ふきは溜息を吐く。感情が振り切れて麻痺したように、ほとんど何も感じない。レオが相手だというのに、妙に冷静な気分だった。

「Perch? mi hai portata qua? (どうしてここに連れてきたんですか)」

「Hai perso i sensi. Ti ricordi? (君は気絶した。覚えているか?)」

「S?. E perch? non mi hai portato a casa mia, non hai chiamato un'ambulanza, mi hai portato qua? (はい。で、どうして家に連れて帰ってくれませんでした、救急車も呼ばないで、ここに連れてきたんですか?)」

普通は目の前で人が倒れたら救急車を呼ぶものだと思う。まあ、今回に限っては呼んでくれなくて助かったが。気絶した原因は分かっているし、手術が延期になるのも避けたい。

「Devoto tornare. (帰らなきゃ)」

ベッドから降りる。腕を掴まれ そうになって、半ば無意識に身を擦つてすり抜けた。靴はベッド脇に揃えて置いてあった。

「Come? Non c'è pinessuno. (どうやって? もう電車はない)」

そんなに遅くまで寝ていたか。だが、ヨーロッパの街の中心部は小さい。電車が動かなくても帰れないことはない。

「A piedi. (歩きます)」

「? periccoloso. (危険だ)」

「Cio? Non voglio stare qua. (それで? 私はここにいたくないんです)」

伸ばされた手を振り払った。感情は麻痺したように遠いが、レオに触れられそうになると脊髄反射のように体が引つ込む。

壁にかかっていた自分のジャケットを羽織った。ポケットの財布などはそのままだ。良かった。

レオが大きく息を吐いた。

「Va be. Ti porto con la mia macchina. (分かった。車で送っていく)」

「No, non c'è un bisogno. (いえ、必要ありません)」

「Altrimenti non ti lascio uscire. (でなければ出て行かせない)」

「... Ti prego di guidare. (……運転してください)」

帰りたい。帰ってベッドでぐっすり眠りたかった。疲れることがあり過ぎた、主にレオのせいで。巧も大分引つ掻き回してくれたが、車の助手席に乗り込み、夜のパレルモの街を走った。石畳の上を車で走るのは、日本では中々ない経験だ。

レオは無言だった。言葉を重視するイタリア男にしてはらしくない。ちらりと横顔を窺ってみたが、走り慣れているであろう道なのに顔つきは険しかった。

何度目か分からない溜め息を吐く。

ふきは恋愛感情には鈍いほうかもしれない。だが劣情には人一倍敏感だった。場数だけは踏まされてきた。だからレオにされた程度のこと、騒ぎ立てるほどではないのだ。なのに。

イッポーリトと別れて数ヶ月も経っていない現状では、せつかく忘れていたのに、などという理屈も立てられない。

レオ。

ほとんど初めて、心ときめかせた男性だった。2年以上前に淡い憧れは打ち砕かれたと思っていたのだが、それでも自分はこの男に何か期待するところがあつたらしい。最初から信頼していなければ、拒絶反応を起こすほどのショックなど感じる必要はなかったのに。相変わらず彼は無言だった。唇をきゅつと引き結んで、何を考えているやらないやら。

レオはふきに欲望を感じているのだろう。

あんなことをするからには。何がいいのだろうと思うが、 IPP リトもふきに興味を持ったし、似たもの兄弟なのだろう。ふきは首から下はそこそこの形らしく、下半身でお近づきになりたがる人間は結構いた。たくさん相手もさせられた。だから欲望を見抜くのはふきには容易い。

そして、少なくともふきが実際に知る限りにおいて、欲望は決して敬意には繋がらない。世の普通のカップル、いわゆる『恋人』という関係は、相手を欲望の対象にしながら同時に敬意を抱くものらしいが、ふきにはそれが良く分らない。劣情とは蔑視だ。ふきは異性にときめきを覚えはしても、その相手と寝たいとは露ほども思わない。レオにだって、かっこいいな、と女子高生のように浮き立っていた時も、ベッドを共にしたいとは思わなかった。 IPP トとも、蔑んでいたからこそ寝られた。

レオもそうだろう。憶測でしかないが、彼はふきに欲望を抱き、蔑んでいる。どちらが先かは鶏と卵だが、蔑んでいるのに欲望があるから距離を置けないで必要以上につつかかる、欲望があるからなおのこと相手をいやらしいと蔑む。この堂々巡りは、ふきはいやと言うほど経験してきた。勝手にやってくれればいいものを、そのジレンマの輪の中にふきを巻き込むのだからいい迷惑だ。

それでも、レオを憎みきれないのは、こちらにまだ恋情があるから。ではないと信じたい。単に彼のお育ちがよろしくて、ほかの男達と違って無体なことはいないというだけだろう。行動が概ね常識の範囲内に留まるようなのは、ふきが相手をしてきた男の中には

いなかった。

再び、ふきはレオを見やる。彼の口は何かもの言いたげだ。

「Non c'è bisogno di scuse.」 (謝罪はいりません)「

どうせ、謝ろうと思ってプライドが邪魔をしているとか、そんなところだろう。だからちよつとした意趣返しに、先手を打ってやった。これで見当違いだったらお笑い種だが。

レオがふきを見る。

「Ci scordiamo. Non voglio pensarci.」 (忘れましょう。考えたくありません)「

「...Se vuoi.」 (.....君が望むなら)「

「Lo voglio.」 (望みます)「

もう、厄介事はうんざりだった。

アパートの下で、車が止まる。ふきはドアを開けて降り立ち、ひどく無感動に礼を言った。

「Grazie mille.」 (どうもありがとうございます)「

我ながら、これほど感謝の念のこもっていない感謝の言葉も珍しかった。ふきはそのまま踵を返す。

「Ciao, buona notte.」 (じゃあ、おやすみなさい)「

「.....ブオナ・ノッテ」

背後でレオがどんな表情をしていたか、ふきは知らない。

ふきが階段を上つても、しばらくエンジンのかかる音は聞こえなかった。

15・アビガイッレ・スカローネの姦計

ムシャクシャする。

といつても、自分が上機嫌であつたことは殆ど無い。アビガは苛々する内心をそのまま手に移し、ドアを強めにノックした。

「やあ、アビガ」

ドアの向こうから姿を現したのは巧だつた。彼とふき以外にアビガの知己はいない。

セミダブルベッドのすぐ脇の、小さなサイドテーブルに向かい合つて座らされる。ミニバーから巧はスプライトの缶を取り出し、アビガの前に置いた。

「どうぞ」

「どうも」

巧はダイエツトコーラを飲んでいた。そういうことを気にするタイプにも見えないけど、と訝しむアビガの視線に気付くと、巧は笑つて、「うちの奥さん、ダイエツトコーラのほうが好きなんだよ。

それでいつもこれだから、何か慣れちゃつて」と言つた。その笑顔にぞわつと全身が総毛だつた。巧は肩を竦める。

「OK、本題に入ろう」

「待つて。盗聴器とかは？」

「あつても心配要らないさ。シチリアマフィアの誰が日本語を理解すると思ふんだい？」

「エンツォのママ」

「俺の祖母さんはマフィアのごたごたに関わらせてもらえるほど大物じゃないさ。それに派閥が違う、ここはスカローネやシニストラリが迂闊に手出し出来ない。マフィア内部のグループ間の紳士協定とやらで、スカローネもシニストラリもこの部屋には手出し無用だ」

信用出来る相手ではなかったが、かといって実のところアビガに選択肢など無いのだつた。

「……で？ 用件は？」

「ああ、そうそう。2年前のエンツォへの銃撃事件、あれは君の差し金だね？」

良い天気だね、とても言うような口調でさらりと告げられた言葉に、アビガはスプライトを一口飲み下してから微笑んだ。

「何のこと？」

「説明が要る？ ならお望み通りに。」

エンツォが生家であるスカローネを、ましてそのバックにいるマフィアのシニストラー一族を毛嫌いしていることは周知の事実だ。だから彼はわざわざ妻の姓を名乗り、かなり事業が成功しているのにみかじめ料を払っていない。シニストラーとしては本来無視できない事態だが、シニストラーとの関係を悪くしたくないエンツォの父親、ルツアスコ・スカローネはエンツォに代わって息子の分まで金を支払っている。だからお目溢しを頂いてるってわけだ。

ところが2年前、ある噂が立った。エンツォ・ナンニーニがみかじめ料を納めた。シニストラーではなく、ナポリのカモツラに――

カモツラはナポリのマフィア組織だ。シチリア・マフィアと交流が無いではないが基本的に別の組織で、建前上お互いに干渉が原則ではある。

「カモツラからすれば美味しい話だが、シチリア・マフィアにしてみれば面目丸つぶれだ。特にシニストラーは面子を潰されるわけのシチリア・マフィアからは避難ごうごうだね、たまったものじゃなかっただろうね。」

勿論エンツォはそんなことはしていないし、シニストラーだって情報の真贋を確認しなかったわけじゃない。ただエンツォは大学はナポリ東洋大学に通っていたし、そのとき親交のあった人間の中には今やカモツラの幹部である者もいる。カモツラには確かにベラ・クリスタを名乗る団体から金が届いた。折からベラ・クリスタにシニストラーのボス、カポ・オッターヴィオ・シニストラーの一家が食事の予約を入れようとしてエンツォが言下に断ったりしたことも

あつて、状況証拠だけは揃ってしまつた。

そんなこんなでひと月経つて、カモツラから翌月分のみかじめ料の催促があり、当然何も知らないエンツォはそれを突っぱねる。これでカモツラが乗り込んでくると、シチリア・マフィアとしては迎え撃たないわけにはいかない。事実確認も不十分なまま手の早い連中がエンツォにバン！」

アビガは笑顔を崩さない。崩せない。上げた口角はそのまま固まつた。

「エンツォがカモツラにみかじめ料を支払つたなんてデマを流したのは君だろう？」

「何の証拠があつて？」

「辿るのは難しかったよ。何せ2年前だ、俺がシチリアに来てもう数ヶ月は経つのに、一昨日になつてやつと分かつたんだからね。君は大したものだよ。」

まず、シニストラリのほうから行こうか。俺は君よりずっとシニストラリに近い。多少の仕事もしたから、話を聞く分にはさして苦勞しなかつた。その噂は、誰から聞いたのか？ 骨が折れる作業だつたけど風潰しに訊いて回つた。噂をどうやって知つたかなんて、誰もまともに覚えちゃいなかったね。だけど、誰もが知っていた。

実際は匿名のタレコミ電話があつたそうだ、それもオッターヴィオ・シニストラリのごく近い側近の携帯電話に。それだけで、カポ・オッターヴィオもその側近も特に言いふらしたわけじゃない。当然だ、事実ならとんだ恥さらしだからね。だが、情報はあつさり漏れた。下っ端の構成員どころか、一般人までその噂を知っていた。何故、そこまで広く知れ渡つたのか？ そうしたい人間がいたんだ。作為が無ければ有り得ないスピードで話が広がつた。

デマはね、アビガ。そこまで広範に行き渡るものじゃない。どれほどスキャンダラスでも、真実だつてすぐ立ち消えるのが噂というものだ。それが、事実無根にも拘らず、しかもおおよそ有り得そうに無い話だつたのに、瞬く間に広まつた。誰かが意図的に広めたので

なくては出来ない芸当だ。

例えば、チェーンメールのように回ってきたという話も聞いた。そのチェーンメールを辿っていくと、大体大元が数人に絞り込めた。IPを調べてみると、どれもこれも公共のインターネット・ポイント。

ところが、イタリアって本当いい加減だね、Webメールのアカウントのログアウトもしない、履歴も消さないで次の利用者にPCを替わる人間が山のように居るんだから。今回の犯人は、そのイタリア的いい加減さを利用したらしい。

チェーンメールの大元の数人は、そんなメールを出した覚えは無いと言うし、受け取った側も何だか文章がおかしいと感じていた。いつもの、彼らの知る友人の書き方ではない。それどころか、イタリア語の単語や文法が誤用だらけだった。まるで外国人が書いたかのように。少なくともシチリア人の筆ではなかった、とさ。

誰かが勝手に彼らのアカウントを使ってメール送信したんだ。防犯カメラの映像を残しているインターネットポイントは少なかったけど、ゼロじゃなかった。映ってたよ、帽子を被ってサングラスを掛けた二十歳くらいの女。残念ながら画質も悪いし誰だか分かるもんじゃなかった。ああ、編集して君に見せることは簡単だったけどね。当然だろう、君なんだから」

巧はそこまで喋って、ダイエツトコーラを口に含んだ。炭酸で喉が潤うとも思わないが、まあ彼の自由だ。それにアビガはそれどころではなかった。

「カモツラのほうには、エンツォの大学時代の級友だった幹部に電話があり、その幹部の会社に現金書留とワインが何本か贈られてきた。そのワインは全てベラ・クリスタで取り扱っているものだったし、一部にはリストランテ・ベラ・クリスタのラベルが貼ってあった。

その幹部は電話の数週間前にベラ・クリスタを訪れていたらしいね。エンツォは旧友をもてなしたが、話の流れで彼がカモツラの幹

部になったと知ると早々に追い出したとか。だがその後電話があった。ワインの銘柄も自分が好きなものばかりだったし、いい気になって受け入れたらしいよ。で、その電話を掛けたのは誰だったか？ シチリア訛りの若い男の声だったそうだ。当時の従業員をざっと洗ってみて、やっと分かった。ダミアノ・ダレッツシオ」

「誰のこと？ そんな男に覚えは無いわ」

「とばけるならそれでもいいさ。君が否定しようと肯定しようと、最終的にはエンツォが信じるかどうかだ」

アビガは内心舌打ちしたい気分だった。この男ならたとえでっち上げでも、自分の話を人に信じさせることくらい難しくないのだろう。十分な証拠は無いとはいえ、全くの作り事ではないとなれば、エンツォを丸め込んでしまう可能性は十分に有り得る。

アビガは溜息を吐く。この男がシニストラリに通じていたのは誤算だった。巧はただの平和ボケした日本人の若い男ではない。汚れ仕事を引き受けて何とも思わないくらいには、この男もアウトローだ。何よりその性根が想定外だった。

「良いわ。貴方が、私を脅迫する十分な材料を持っていると仮定しましょう。それで、何がお望み？」

「君の復讐に、俺も一枚噛ませて欲しい」

「……何で」

「他人が苦しむのを見るのは快感だよ、そうじゃないかい？」

「断ると言ったら？」

「『他人』が君になるだけさ」

「……成程」

納得した。分かりたくもないが分かってしまった。この男は誰でも良いのだ。きっとこの男は、ただ楽しみのためだけに世界中の人間を苦しめて回るのだろう。その順番が後でも先でも大した違いは無い。

ふき。レオ。イッポリト。エンツォ。アビガ。

攻撃する相手は誰でも良いのだ。誰が一番楽しませてくれるか、

それしか考えていない。イツポーリトに対しては数時間殴る蹴るの暴行を加えただけで飽きたらしい。以前本人がそう言っていた。頭が空っぽの手合いは暴力でし支配出来ず、知的好奇心が満足しないと。彼の言うところの反吐が出そうな知的好奇心の対象が、今はエンツォなのだろう。それがアビガでも、巧には問題ない。こちらには大有りだが。

「具体的に、私にどうして欲しいわけ？」

「俺は君を手助けするつもりなんだよ、アビガ。誰かの協力があったほうが事がスムーズにいくと思った時に頼ってくればそれで良い。」

エンツォの手術に関しては傍観を決め込むようだけど、その後のプランは既に考えてあるんだろう？ どうやって彼を追いつめるか。俺は金ならある、そして金があれば大抵の不可能は可能になる。

君の力になるよ、アビガ」

「協力の申し入れなら、もう少し友好的にして欲しかったわね」

アビガは席を立つ。スプライトも飲み干したし、これ以上巧の話聞くのも耐えられなかった。

「3日に1回。アビガイツレ・スカローネ、エンツォに関して君からの連絡が欲しい。心配しなくてもメッセージは受け取ったらすぐに削除する。俺を味方につけるか敵に回すかの決断の期限は、まず今この瞬間から72時間後だ。連絡待つてるよ」

視界の端で巧がひらひらと手を振っている。憤懣やるかたない気分アビガはホテルを後にした。

何て男！

腹が立つ。腹が立つ。腹が立つ。

エンツォ・スカローネへの復讐を諦めるわけにはいかない。そのためにアビガは生まれ、そのためにだけに生きてきたのだから。

あんな男に邪魔されるわけにはいかない。

見失うな。エンツォ・ナンニーニ。あの男を破滅させるために何が一番の方法か。

巧はアビガよりずっと悪知恵が働く。味方につければより効果的な復讐が叶うかもしれない。

けれど、忌々しいことに、アビガの手に負える相手ではない。御せない。味方につけるにしろ敵に回すにしろ、これは大きな賭けだった。

巧は何を考えている？　それが全く読めなくて、苛々する。

冷静になれない。どこかでガス抜きが必要だ。アビガは裏路地に入り、周りに人がいないのを確認すると街灯の足を思い切り蹴った。

レオ・克蘭キ。

ふと思い出した。エンツォ・スカローネのお気に入りの秘書。エンツォは彼を後継者として育てるつもりなのだろう。

エンツォのお気に入り、有望な若者。ベラ・クリスタの経営にも深い所まで関わっている。

アビガの口の端が上がった。

エンツォへの復讐は、自分の一生を賭けた壮大なプランだ。それを損なうような大掛かりな事は出来ない。けれども、気晴らし程度のほんのちよつとしたことなら。

レオ・克蘭キ。若く優秀で、傲慢なほど自信に溢れ、だがそれに相応しい実力はきちんと持ち合わせている。ターゲットには最適だ。

憂さ晴らしに付き合ってもらうわ、ハンサムさん。

アビガはもう一度笑って踵を返し、大通りに足を向けた。

16・遠野ふきの対峙

アビガと巧は、どうするつもりなのだろう。

巧がアビガに会つと宣言してから2日。ふきは気が気でなかった。ジェラテリアの業務も手に付かない程で、マリーナから小言を食らった。

ベルナルディーノや他の同僚と、ハグもバーチも出来るようになったものの、相手が男性で不意打ちだとやはり体が強張る。ここ数日何故か頻繁にジェラテリアのほうに顔を出すようになったレオに對しては、未だに体が言う事を聞かなかった。近寄られるだけで硬直し、僅かでも触れられれば撥ねるように跳び退る。

何故か知らないがエンツォの娘、ファニア・ナンニーニもジェラテリアに顔を出すようになった。以前のふきならファニアを見る度に複雑な思いに囚われたものだが、ここ数日はそれどころではなかった。ファニアよりアビガと巧のほうが余程脅威だ。

結局叱り飛ばされながら殆ど上の空で業務を終え、何かもの言いたげな様子のレオをスルーしてさっさと帰路につき、家に帰るとガイアとお喋りもそこそこに自室に引込んだ。

しばらく逡巡して、ノートパソコンでスカイプを立ち上げる。画面に真つ黒のウィンドウと、その左下にふきの顔が映った小さなウィンドウが現れた。

ふきがマウスとキーボードを少し操作すると、真つ黒だったウィンドウは入れ替わり、殆ど画面一杯に見知った顔が現れた。

「……アビガ」

「チャオ、ふき。面と向かって話すのは久しぶりね？」

液晶の向こうで魔女が笑った。

「……何をするつもりなの？」

「なあにが？」

「巧さんと。何の用だったの、あの人」

『エンツォ・ナンニーニへの復讐に一枚噛ませろ。何を考えてるかなんて知らないわ』

「あの人と組むの？」

『あんただって分かっているくせに。あいつに逆らえると思う？』

ふきは溜め息をつく。巧は人を利用することに慣れている。数ヶ月の付き合いではないが、それは良く分かった。そして巧は恐ろしく頭が良い。ふきやアビガなどよりずっと。イッポリートを病院送りにしたあの腕前から、腕っ節もそこそこ。金もあれば度胸もある。マフィアのコネもある。真っ向から対立して勝てる相手ではなかった。

「弱みを握られたのなら、もう終わりにしよう。お父さんをどれだけ憎んでいても、復讐は2年前の銃撃戦でもう十分でしょう。お父さんは重傷を負って、今でも身体の機能に障害がある」

『その障害も、あんたが取り除いてやるんでしょう。それじゃ復讐の意味がないわ。マッチポンプじゃないの』

「……アビガ」

『それにね。私の行動は結局、あんたが望んだことなのよ』

「……」

『移植手術に私が手出し出来ないように、あんたが本気で阻止しようとすれば私は何も出来ない。私の行動は、すべてあんたが許したからよ。2年前の銃撃戦だって』

「違う！ 私はお父さんを傷つけたかったわけじゃない！」

『そうでしょうとも。私だって、まさかエンツォ・ナンニーニ本人が狙われるなんて思ってもみなかったわ。ただちよつと奴の商売が打撃を受ければいいと思っただけだもの。でもね、それを止めきれなかったのはあんたよ、ふき』

「……」

その通りだ。アビガが何か良からぬことを企んでいると知って、止められなかったのはふきだ。だから、今回の移植手術を了承した。

善意などではない。愛情を期待してのことでもない。罪滅ぼしだ。感謝される謂れは何もない。だから、名前は絶対に明かさない。

『止められるものなら止めてみなさい。あんたが本気になれば、私は動けない。だって、私はあんたのせいで生まれたんだから。ねえ、オカアサン？』

「……やめて」

『そうね。気色悪かったわ。実際はあんた、出産経験もないし。

でもね、あんたが望んだから、私は生まれた。阻止することも出来たのに、あんたは私が生を享けることを選んだ。

気に入らないなら、殺してみなさい。あんたが望んで私を生まれさせたように、今度は望んで消せばいい』

「……………」

ぶつりと、液晶がブラックアウトした。

溜め息を数えたら何度目だろう。確かに、アビガの命が芽生えた時、それに気づいた周りは皆中絶を勧めた。ふきだけがノーと言った。まだ幼い心から出た意思は、善悪にも損得にも囚われておらず、ただ純粹にそう欲したからだった。

望まれないで生まれた彼女は、あらゆる意味で公的な存在ではなかった。戸籍もない。友人もない。ただ他人の目から隠されて、いるのかいないのか分からないような状況で生きてきた。

育てたのはふきだった。ぎりぎりでも栄養を与え続け、彼女を成長させた。積極的に守ろうとしたわけではない。アビガの扶養義務はふきにはない。何度も見捨てようとして、土壇場でそれが出来ず、結局いつも最後の一線を越える前に引き返して彼女の命を繋いだ。自分の洗礼名をもじって名前を与えたのは、彼女が生まれてから大分経ってからの事だ。

アビガ。

たった三音節の名前をつけてから、彼女は一人歩きし始めた。最初から、彼女の興味はイタリアにあった。

生まれながらにして表の世界に出る事が叶わない闇っ子。ふきよ

りもずっと早くイタリアに渡った彼女は、シチリアの暗黒街とは相性が良かったのかもしれない。その彼女がどうしてスカローネを名乗るようになったのかは覚えていない。だがアビガは、彼女の人格が完成された時から、エンツォ・ナンニーニへの憎悪で凝り固まっていた。

理由は訊いても要領を得ない。酷く個人的な事で、しかもそんなことでと首を傾げざるを得ないほど些細なことだ。少なくとも命を狙うまでのことではない、とふきは思う。けれどもアビガは、生まれも育ちも所属も何もかもが不安定だったからか、エンツォへの憎しみをアイデンティティの中に取り込んでしまい、それに強くしがみついた。今更それは変えられない。あとはもう、坂道を転がるように加速していく。

手術まではエンツォに手を出さない。アビガはそう言った。結局のところ、力関係ではまだぎりぎりふきのほうが上であるらしい。

けれども、彼女は何か企んでいる。銃撃戦のような大々的なことではなく、ほんのちょっとした余興のようなものではあるのだろう。だが、それでもエンツォへの悪意であれば、ふきはもう見過ごすわけにはいかなかった。どんな些細なことであっても。

「レオに、何をするつもりなの？ アビガ……」

呟きは窓ガラスを通り抜けてパレルモの夜に消えた。

ふきがエンツォ・ナンニーニから呼び出しを受けたのは、それから1週間後のことだった。

17・エンツォ・ナンニーニの仲裁

手術まで10日を切ったある日、ベラ・クリスタ社内にちよつとしたトラブルが持ち上がり、無視出来ないレベルまで広がった。

エンツォは今静養中の身だし、通常であれば代理人に任せるのだが、渦中にいるのがエンツォの秘蔵っ子の秘書とあれば話は別だ。入院は1日2日で終わるようなものではないだろうから、手術の前にカタを付けておきたかった。

事務所に呼び出しをかけた相手は、2人ともエンツォが来る前にドアの前で待つていた。レオのほうは良く知っているが、もう1人のほうはちゃんと正面から向き合うのは初めてだ。日本人の、若い女。湧き上がる嫌悪感を理性でどうにか押さえ込む。四半世紀近く前の、東の島国で起こったことは彼女には関係ない。たとえ顔立ちや背格好や年齢がああの際のときでもなく最悪な女と似通っている、あんな女と一緒にして良い筈が無い。デートの度に一銭も出さず、礼のひとつも無く、距離を置こうとしたら切れ、暴言を吐き、暴力を振るい、逆恨みのあげくストーキング行為に及び、果てはエンツォの兄にまで多大なる迷惑をかけてくれた女と、目の前の女性は違う。

感情に理性の蓋をする。2人を部屋に通し、椅子を勧め、自分もデスクに腰掛けた。

「Signorina Fuki Tonno? (トオノ・フキさん?)」

「S?・ (はい)」

トラブルの渦中にいる女性だった。書類を読んだが、3年前からベラ・クリスタで働いているらしい。何度か見たことはあるし、日本人のスタッフがいるということくらい知っていたが、フルネームまで知ったのは今回の騒ぎがあつてからだ。通常アルバイトスタッフは入れ替わりが激しいのであまり顔も名前も覚ええない。現場

の細かい人事はエンツォの手を離れている。

緊張しているような彼女をリラックスさせるための他愛無い話題を振る。はにかむような笑顔が出るのを待って、エンツォは本題に入った。

「Conosci che sul conto di Leo
e te corrono dicerie un po' sc
andaloso? (レオと君に関して、少々スキャンダラスな
噂が流れているのは知っているだろうか?)」

レオは眉間に皺を寄せて頷いたが、フキは頭の周りに疑問符を飛ばした。台風の目というが、ご当人ほど知らないというのは現実にもあることらしい。

「Dicerie? (噂?)」

「S? (そうだ)」

「Quale? (どんな?)」

言い難い内容なのだが、仕方ない。エンツォはひとつ深呼吸してから、感情を乗せずごく簡潔に言った。

「Si dice che Leo ha abusato di
te. (レオが君に乱暴したと)」

「……アブザート?」

どうやらイタリア語の単語が分からなかったらしい。エンツォは溜め息を喉の奥で押し殺して、日本語に切り替えた。

「つまり、だ。レオが君をレイプしたという噂がベラ・クリスタ内で流れているんだ」

「レレレレ……!」

歌っているのではない、と思う。レレレレというよりはソラシラというような音階だった。

「念の為に君にも確認するが、そんな事実は」

「ありません! あるわけないです! とんでもないです!」

内心でほっとする。エンツォは勿論レオを信頼しているが、ビジネスの世界でトラブルがあると人情だけでは太刀打ち出来ない。

「そうか、良かった。しかし完全なるデマとはいえ、かなり広まっています、このままでは業務に支障をきたしかねない。君も何か気づかなかったか？」

「えーと……」

そういえば皆の態度が何かおかしかったようなそうでもないような、と噂の当事者は何とも頼りない返答だった。

「噂を一刻も早く解消して業務に差し障りが無いようにしたいのだが、ここまで広まったのには何か原因があるのではないかと思っ
てね。君からも話を聞きたくて、今日ここに来てもらった。何か心当たりはあるだろうか？」

フキがちらりと不安げにレオを見る。

「レオからも一応の話は聞いている。だが、一方だけの話を鵜呑みにするわけにもいかないだろう。レオに聞かれたくないなら、このまま日本語で話せばいい」

「……はい」

フキはもう一度窺うようにレオを見て、それからとつとつと語り始めた。

「あの……そもそも私、イタリアの人がやるようなスキンシップが苦手……というか、慣れてなくて、いきなりだとどうしていいかわからなくなるんです。ハグとかバーチとか、今はだいぶん慣れましたけど、それでも自分から積極的にやるのは何か抵抗があつて」

成程、と思う。日本人の母を持ち、日本で暮らしていたこともあるエンツォには、納得は出来なくても理解は出来た。肌を触れ合わせる事が滅多に無い日本の文化で育った身としては気恥ずかしいのだろう。イタリア人の理解を得るのは難しい感覚だ。

「あの、慣れてきたって言っても、やっぱり個人差があつて。大丈夫な人と、そうでない人と。レ……克蘭キさんはもちろんいい人なんですけど、なんていうかその、目の前にすると緊張しちゃって……それで、その、克蘭キさんに対しては特に、スキンシップす

るのが苦手で。なので挨拶してくださってもとつさに、つ、突き飛ばしてしまったりとか、過剰な反応をしてしまうことが多かったんじゃないかと……思い、ます。今まではクランキさんと接する機会もあんまりなかったんですけど、ここ何週間かは毎日のように顔を合わせてます。それで、クランキさんが挨拶してくださったときに、ええと……スマートな対応、が出来なくて、ひよっとしたらその態度が……みんなの誤解を招いてしまったかと……」

「そうか」

「す、すみません！」

フキは恐縮したように縮こまった。それを横目で見ながら、エンツオは考える。

要はカルチャー・ショックだ。多少オーバーな反応をしてしまった彼女の様子を見て、他の従業員達が早合点したと、そういうところだろう。

彼女の話が真実であれば、だが。

？を言っている、という感じではない。だが、真実をそのまま話しているのではなく、考えながら喋っているように聞こえた。都合の悪いところは伏せ、言ってもいい内容だけを選び、さらに当たり障りの無い表現を選んで言葉にする。まるでレオを庇っているかのようだった。

だが、たとえこちらにとって都合が悪い内容でも、虚言よりは真実のほうが良い。欺瞞は潤滑油にはならない。むしろ歯車をひとつふたつと錆びさせていくだけだ。

レオを信じたい。何といっても可愛い愛弟子だ。有能な後継者候補を失いたくはない。だからこそ、聞きたいことだけを信じるのではなく、真実をはっきりさせておく必要がある。

「本当に？」

「え？」

「私の前だからと言葉を選ばなくても良い。レオは何か君に失礼をしなかったか？」

「い、いえ。そんなまさか。失礼したのは私のほうで」

「レオは君にキスをしたと言っていたが」
完熟トマト。

日本語では瞬間湯沸かし器とか言ったか？ 少し違うような気がするが、まあそれは脇に置いておく。大した事ではない。

フキは見事に真っ赤になった。日本語が分からないレオは訝しげに彼女を見遣る。

「あ、あの、ああああああの」

「事実か？」

「あの、その、……、……はい」

「それが君にはショックだった？」

「……驚きました」

今でさえこの様子なら、実際事が起こった時の反応たるや、どんなものだったか。誤解を招いてもおかしくはなさそうだった。しかし、多少腑に落ちない点もある。

「しかし、君は男性との付き合いがこれまで無かったわけではないのだろう？ 失礼ながら、多少の話は聞かせてもらった。そうすると、レオに対する反応はあまりに……何と言うか……初心過ぎると思うのだが。不躰な言い方になって申し訳ない」

「いえ。……その……申し訳ないのですが、私は、克蘭キさんが苦手なんです」

「差し支えなければ、理由を聞いても？」

「基本的には性格的なことで……ただ、しいて挙げるなら、克蘭キさんのご家族と少しトラブルがありました」

「家族？」

「弟さんです。それで、正直申し上げるとあまり……関わりたくなくて」

「ああ、成程。彼か」

レオの弟、イッポリートは、前々から克蘭キ家の悩みの種だった。エンツォもレオが弟のことで頭を悩ませているのを見たことが

あり、何度か相談にも乗った。

レオには気の毒だが、イッポリトは碌な人間ではない。縁を切るなりしたほうが良いと思うのだが、流石に他人の家族事情に首を突っ込むほどエンツォは遠慮知らずでは無かった。

イッポリトとフキは同年代。何かしら関わりがあつて、それでフキは彼を嫌がるようになったのだらう。納得するのは容易だった。けれど、私情を仕事に持ち込む気はなかったんです。まさかトラブルを起こしてしまうなんて、本当に申しわけありません」

「いや 君に落ち度は無い、気にしないでくれ」
さて、どうするか。事情は分かったが問題は何ひとつ解決されていない。

「しかし、噂をそのままにもしておけない。人の噂も七十五日と言うが、正直そんな悠長に構えていられる余裕は無いんだ。とりわけ今月は私が私用で抜けて采配を揮えない。君も再来週は休暇を取っているようだが」

「はい」

「それまでに問題を解決しておかないと、どんな混乱を招くか分からない。

そこでだ。明日からしばらく、レオと意図的に仲良くしてもらえないだろうか」

「え……？」

「にこやかに挨拶したり、業務を離れた会話をしたり、スキンシップをしたり。友人としての範囲内で構わない。だが、レオが君に犯罪まがいのことをして、君はレオを拒絶し怯えているというイメージを払拭する程度には親しい振りをして欲しい」

「……！」

「無理だろうか？」

「無理っていうか……あの、ただでさえ私、クランキさんへの接し方がわからないんです。共通の話題もないし、何話していいかさっぱりで……あたりさわりのない態度が精一杯で、親しく、なんてど

うやったらいいのか……」

「勿論、性格的に合う合わないもあるだろうから、無理強いは出来ない。だが、君の協力が得られれば事はスムーズに運ぶ。どうだろう、私情を仕事に持ち込む気はないと言ってくれたその気持ちに甘えさせてくれないだろうか。無論レオのほうからも歩み寄らせるし、君を不快にさせるような言動は慎ませる。」

お願い出来ないだろうか？ いや、これは業務命令ではないし、無理にとは言わないが」

「……」

フキが黙り込んで考えている間に、同じ内容をレオにイタリア語で話す。レオは目を剥き、「エンツォ！」と叫んだ。だがそれに続けて何かを言う前に、フキが口を開いた。

「……わかりました。努力はしてみます」

エンツォは笑った。

「ありがとう」

立ち上がり、フキを抱き締める。彼女は一瞬身を強張らせたが、すぐに控えめなハグを返してきた。

フキの焦げ茶の瞳が潤んでいたのは、窓から射し込むパレルモの陽光の悪戯だったのか、それとも

18・遠野ふきの不意

用事があるからとエンツォ・ナンニーニのオフィスをレオと仲良く追い出され、ふきが色々と混乱していると、レオから茶、ならぬコーヒーに誘われた。余談ではあるがカフェの国イタリアでは日本語で「お茶する」というようなところを「コーヒーする」のような言い回しをする。

「Ma devo tornare al mio lavoro .
(でも、業務に戻らなくちゃ)」

「Lo conto per un lavoro . Voglio parlare con te . (仕事のうちに入れる。君と話がしたい)」

仕事だと言われると下つ端のふきは断れない。割と大きなバールに入って、テラス席の一番端つこに陣取る。他に客も余りいなかったし、車通りの激しい大通りに面した場所だったので、確かに聞き耳を立てられる心配はなさそうだった。

レオはエスプレッソ、ふきはマッキアート注文する。レオは眉間に皺を寄せたまま、何やら言おうとしては口を閉じるのを何度か繰り返した。どうでもいいが、美形というのは仏頂面でも格好良い。羨ましい。ふきも若い娘であるから化粧して笑顔のひとつも作れば自己評価でもそこそ可愛いが、スッピンでむすつとしているとはつきりブスである。何もせずに険しい表情でも美しいというのは、相当地がよろしいということだ。実に羨ましい。これだから憎みきれないんだよなあ、内面だってまともな部類だし。

「Mi pare che a te non piacquano . (君は僕が好きではないだろう)」

「ゲホッ、ゴホッ！」

砂糖をたっぷり入れたマッキアートに口をつけた瞬間に言われてふきはむせた。喉に砂糖の粒々が引つかかる。レオはウェ이터に

水を持って来させてくれた。

「何ですか、いきなり」

「？」

「あ」

いけないいけない。エンツォと話した影響か、日本語モードに戻ってしまった。頭を切り替える。水を一口飲み、レオに礼を言うから、居住まいを正す。

「A m e n o n s e i m o l t o s i m p a t i c o ,
m a n o n t i o d i o . (あまり感じはよくありませんよ)」

そう言えばレオは軽く目を見張る。実際ふきはレオを毛嫌いはしていない。レオを憎悪するようだったら、ふきには憎まなければならぬ人間が多すぎる。そんな疲れるような真似はとうの昔に諦めた。母や義父に比べればイッポリトのことだってどうでもいい。

レオはスーツのポケットから携帯を取り出し、ふきに差し出した。見ていいらしいので、SMSをいくつか読む。

酷かった。

まあ誹謗中傷の嵐である。どうやら徳志と一緒にリストランテ・ベラ・クリスタで食事した夜、レオがふきに乱暴したことになる。いるようで、店で何をやっているんだとか何だとか。しかもその翌日ジェラテリアで倒れたふきをレオが連れ去ってまたもや無体なことをしたことになっており、ジェラテリアのメンバーからのバッシングが酷かった。

「あー……あら」

ふきの泣き腫らした顔とレオに対しての異様な怯えようを目にした人間からは、そう取られかねない状況であったことを今更理解した。それが前夜の追いかけてこの目撃証言とも合わされば尚更。

こう言うては何だが、支配人レベルならともかく、ふきも含めて従業員はそこまで教養高い人間は多くない。ましてイタリアの国民性なのか自分の感情に正直な人間が多い。根拠もない噂を頭から信

じ込んでしまうようなタイプが、やや多い職場ではあった。

しかしそれにしても内容が酷い。SMSを読む限り、ふきのほうが名誉毀損で訴えてもいいようなことになっているのだが。あんなことやらそんなことやらエロいを通り越してグロいようなことやら、実際にしていたら一も二もなく警察に駆け込んでいるようなショッキングでスキャンダラスな内容。しかも上手く事実と組み合わせられているので信憑性があるのがまた手の込んでいる。

誰かが作り込んだ嘘だ。ただの伝言ゲームでこれほどの悪意ある内容にはならないだろうし、なったとしてもここまで信憑性が保たれているわけがない。しかし誰がこんな噂を作って流した？ 実際何が起ったかよく知っている人間でなくては出来ない。その時点で大分容疑者は絞られるし、それに加えて動機のある人間は

アビガ。これかー……

ふきはテーブルに突っ伏した。何というレベルの低い嫌がらせを。エンツォに手は出せないと言っていたが、成程レオにトラブルを引き起こせば多少はエンツォを煩わせることが出来る。憂さ晴らしとか言っていたのはこれのことか。

巧さんの影響受けてない？ アビガ、何かどんどん陰険になつてるような気が……。

「Veramente mi sento depresso .

(実のところ、参っている)」

「Mi dispiace . . . (お気の毒です……)」

というか、アビガが原因なら他人事ではない。ふきは一気に申し訳ない気分になった。

「フキ」

「はい？」

「Potresti diventare la mia ragazza? (僕と付き合ってくれないか)」

「……………はあああああ!？」

周りの視線が集中することも構わずふきは大声を上げた。

今、何が、どうやって、どうなって、こうなった？

「Precisamente, ti voglio fingere
red esserella mia fidanzata.

(正確には、僕の恋人の振りをしてもらいたいんだ)」

つまり、レオの言い分をまとめるところだった。エンツォの言う
とおり店で友人のように振る舞うにしても、噂が立った後だけにセ
クシャルな関係を想像されてしまうのは避けられない。何もなかっ
たと表面上は取り繕えても、心から納得させるのは難しいだろう。
実際、何もなかったわけでもない。噂のような過激なことはなかっ
たが。もやもやを抱えさせたままにしておく、やはり業務に支障
が出るし、レオのイメージも回復できない。

なかったことを証明するのは難しい。であれば、いつそ平和裏に
あったことにしたほうがいい。なので、まあ少しばかりスキンシッ
プが激しいカップルのちよつとした行き違いということにして取り
繕ったほうがいいだろう、ということだった。

まじですか？

筋書きはこうだ。レオとふきは騒ぎの前から付き合っていた。お
互い愛情も激しいので、業務に支障をきたさないように仕事場には
持ち込まないようにしていた。ところがちよつとした喧嘩があつて
冷戦状態になり、仕事以外では顔も合わせなくなり、痺れを切らし
たレオがそれまでの不文律を破って仕事場で話し合いをしようとし
た(そこ以外では捕まえられなかったので、場所を選んでいる余裕
はなかった)。が、交渉は決裂して翌日まで持ち越され、次の晩に
やっと仲直りがかなって元通り仕事では関係ない風を装おうとした
が、ふきは加減が分からず拒絶するような態度になってしまった、
と。

私、そんな直情的な人間に見えるんだろうか。

本題から微妙にずれたところが気になった。キャラ的にその設定
はどうなの。というか、ジェラテリア・ベラ・クリスタにはふきが

イッポーリトと付き合っていたことを知らない人間がいなくてもないのに、その話は。兄弟そろって、これでは本当に何兄弟

下世話な方向に行ってしまった思考を、ふきはぱたぱたと頭を振って追い出す。

「Ma Leo, non hai la ragazza?」

でもレオ、恋人はいないんですか?」

「Nessun problema. Tu?」 (問題ない。君は?)

冗談じゃない。男はもうこりごりだ、一生いらない。

思考がそのまま顔に出ていたらしく、レオはふきが何も言わないうちから分かったと言った。

「Prendi una settimana di vacanza.」 (君は1週間休暇を取るだろう)」

確かに再来週、手術のために仕事を休む。勿論理由は会社には言っていないかったが、休暇申請は早めに出しておいた。それまでに出るだけベタベタして、噂を打ち消したいとのことだった。筋書きを触れ回る必要はないし、聞かれたら匂わす程度でいい。ほとぼりが冷めたら別れたことにすればいい。

気が進まない。そもそもレオのことが苦手なのは変わらないのだけれど、アビガのやったことならふきが他人事だと切り捨てるわけにもいかない。

「OK……」

不承不承、ふきは頷いた。

ただし、そちらもちゃんとそれらしく振る舞えと、レオに釘をさすことは忘れなかった。

今日の分は出勤扱いにしておくからとレオに言われ、アパートメントに帰ったふきは、そのまま自室のベッドに倒れ込んだ。

厄介なことになったものだ。どうして承知してしまったのだろう。ここ数日のレオの態度を考えても、ふきが協力してやる筋合いはなかった。事実無根の噂を流されたことには同情するが、その火消しまでふきが引き受けてやる義理はないはずだった。むしろ、ザマ―ミロ少しはいわれもなく非難される身になってみやがれ、くらいのことは言ってもいいはずなのだが

溜め息を吐かない日がないような気がする。それもこれも全部レオと巧とアビガと母と義父と世界と自分のせいだ　と考えて顔を枕に沈める。結局、逃げ場はどこにもない。

レオを憎みきれないのも、アビガを止めきれないのも、すべてふきの弱さだ。引き受けると決めてしまったことは仕方がない。

レオはずるい。恵まれすぎている。見た目もよく、稼ぎもよく、人望もある。邪険にしていたふきのような相手からさえ、いざとなれば協力を得られる。ふきは、どれほど尽くしても尽くしても、信頼のひとつも得ることが出来なかったのに。

身を切られるほど苦しくて、けれどもその切っ先をレオのほうに向けることが出来ないのもふきだった。結局いつも、自分が傷つくほうばかりを選んでいる気がする。気がつけば選択肢はそれ以外になくなっていて、泣きたくなる。

お父さん。

それでも、今回のことはエンツォのためだ。誠心誠意頭を下げてまで頼まれて、引き受ければ笑顔で抱きしめてくれたりして、それでふきがどうやって断れる？

レオに対する感情など、好悪まとめて封じ込めてしまえばいい。真っ白に塗りつぶして、その上に偽りを描くのだ。難しいことでは

ない。

お父さん、やるから。私、ちゃんとやりますから。

エンツォのためだ。そうでなくてどうして出来るものか。

ふきは起き上がり、サイドテーブルから日記帳を取り出した。気持ち落ち着けるために今日の出来事を書くつもりだったが、手に取ったのは去年の日記帳だった。戻そうとしてふと気まぐれに思い留まり、ぱらぱらとめくり出す。

去年の初めといえば、エンツォがリハビリを経て仕事に復帰したものの、腎損傷を負ったために透析が必要であるということを、スタッフに広く通知された時だった。それまでは一般の従業員はエンツォの容態について詳しくは知らされていなかったが、復帰したのに勤務時間は短くいつまでも病院に通っていることを不思議に思う声が強くなったため、ミーティングで伝えられたのだった。

クリスマス休暇明けの1月のことだった。

v e n e r d ? 7 g e n n a i o

やっと通常運転。私の負担も減った。さすがカトリックの国イタリア、クリスマスシーズンには誰も働かないこと働かないこと。おかげでほとんど私ひとりで店を回していたときもあつて大変！

でも、一番長く休暇を取っていた人ももう仕事に出てきて、今日はすごく楽だった。ふつう冬のジェラテリアなんてヒマなもんよね。それで、お父さんのことについて発表があつた。めでたく回復したけど、内臓がひどく痛めつけられて、週に何回か病院通いをしてなきゃいけないらしい。それでも歩き回れるほどになったのを喜ぶべきなんだろうけど、つらい。

そんな調子で以前みたいにフルタイムでは働けないことが確定したから、人事を改めて組みなおすって。少し混乱があるかもしれないけど、って話だった。でもまあ、私みたいな下っ端は関係ないよね。

どうかお父さんが無理しないで、元気ですごせますように。

l u n e d ? 1 0 g e n n a i o

たしかに少し上があわただしい。

ジェラテリア・ベラ・クリスタの総支配人だったフランカは、結局経営のほうをやることになったらしくて、ジェラテリアにはもうあんまり顔を出せないだろうってことだった。

代理で切り盛りしてたレオ（名前で呼べっていわれた）も、いつまでもジェラテリアばかりやるわけにいかないからって新しい店長に引継ぎしてた。

スタッフもけっこう変わったし、仕事を教える側になっちゃって私もいろいろ大変。

l u n e d ? 1 7 g e n n a i o

久しぶりにレオを見かけた。ジェラテリアの業務をやめてからあんまり見かけなかったけど。

街中で、ファニアさん お父さんの娘さんと腕組んで歩いてた。ファニアさんは確か16歳、高校生。レオは今23歳。
いいのかな……？

m a r t e d ? 1 f e b b r a i o

2月。ファニアさんが友達連れてジェラテリアに来た。寒いのにみんなグランデサイズを頼んで、女子高生って元気。

なんだけとお支払いでもめっちゃって。オーナーの娘なんだから払わなくていいでしょって言われて、どうしていいかわかんなかった。お父さんの家の教育方針なんて知らないし。個人的には、はじめとしてお金払ったほうがいいと思うけど。家で多めにお小遣い渡しとくなり何なりしといてさ。

店長に應對代わってもらったけど、どうしたらいいんだろう。

l u n e d ? 1 4 f e b b r a i o

バレンタイン。

去年から何つつつつも進歩してない……

チョコとバラの花1本と無記名のカード送りつけたのは私です。かえすがえすも迷惑なこととしてごめんなさい、お父さん。

これだからレオにストーカーなんて呼ばれるんだろうなあ……

今日は早上がりだったんで夕方街をぶらついてたら、バールでレオとファニアさんが一緒にカフェ飲んでるのを見かけた。

今日は特別にハートのラテアートをやるとか何とか外の看板に書いてあって、ずいぶん繁盛してた。

ちょうど花売りの子が居合わせて、レオがバラの花買ってファニアさんにプレゼントするところに通りかかってしまった。イタリア男ってやっぱりロマンチック。しかも様になる。通りかかった花売り呼び止めて買ってそのままプレゼントとか。しかもキザったらしくないのは何でだろう。ばっちり決まってた。ファニアさんも目をハートにしてたような。

あの2人、つきあってるのかな？ ファニアさんはけっこうレオ

のことが好きみたいだけど、年上のかっこいい男性にあこがれてるだけのようないきもするし。レオにいたっては気持ちがあるのかお父さんの娘だからなのか、いまいち不明。日本的な感覚では手を出したら犯罪だし。

ま、他人の詮索してもいいことないからやめよ。さすがにバレンティンくらいは私も恋バナしてみたくなるのかな？ ガイアは付き合ってる相手とデートらしいし、今夜は寂しい。

mercoled? 16 febbraio

二十歳！ ハ・タ・チ！
自由！

これでやっと、日本でも成人。ほっとした。もう保護者なんていない。

お母さんが出所するまであと半年もない。だけど、もう関係ないんだ。もう、本当に、解放されたんだ。

お母さんが必要とする歳じゃなくなった。正式に。
それが何よりうれしい。ケーキもプレゼントもないけど、今夜は祝う！

gioved? 17 febbraio

今日オフでよかった。

二日酔いで何もできなかった……

あー、気持ち悪い……

domenica 27 febbraio

夕方、街でファニアさんとレオを見かけた。

道端でファニアさんがわんわん泣いてて、レオがそれを慰めてただけ。ずいぶん人目を引いてたなあ。

何があっただら？ あのと2人の間に何かあったとかじゃなく、ファニアさんに何か落ち込むことがあってレオに泣きついたって感じだったけど。

mercoled? 9 marzo

お父さんの誕生日。やっぱり事件の後遺症のせいかな、今年はパーティーもやらないらしい。去年はベラ・クリスタ貸しきって盛大にお祝いしてたのに。

いちおう、またカードだけは送った。名前は書けなかったけど……

venerd? 18 marzo

こここのところ、よくレオとファニアさんのコンビを見かける。街でもお店でも。

お店にレオをたずねてくることが増えた。別にもうレオはジェラテリアにいつでもいるってわけじゃなくて、というかあんまり顔を出さないんだけど。でもレストランや菓子店のほうにも行ってるらしいし、しらみつぶしにいそうな所回ってるみたい。

彼女、このごろ表情が暗い。ほんと、何があっただら。レオは彼女の相談に乗ってあげてるみたいだった。

ふきはそこから先のページを読み飛ばす。

去年の初夏にはイッポリトがふきの人生に登場して、どこからか手に入れた映像をネタにふきに関係を強要した。その時の絶望が鬱々と書き込まれていて、とても読み返したいものではなかった。高校生の頃におさまったはずのリストカットへの欲求が再発したのもこの頃のこと、日記帳にはところどころ黒い染みが残っている。すっぱりとカッターで左手首を切ってから、叫ぶに叫べない悲鳴を日記に書き殴る日々が続いていた。感覚のすべてを麻痺させ、諦めとともに平静を取り戻したのは秋になってからだった。

l u n e d ? 3 o t t o b r e

終わりが見えない。

毎週、イッポリトの気まぐれで呼び出されて、相手をさせられて、レオには冷たい目で見られる。私が弟をたぶらかしたとも思っているみたい。

レオのかん違いにはもう慣れたけど、今日は別の人の誤解を招いたみたいだ。

ファニアさん。

半年前に比べるとだいぶ落ち着きを取り戻したみたいだけど、あいかわらずレオにつきまとってるといふか、彼のまわりによく出没する。

レオに呼び出されて、イッポリトとのことで話をしていたというより一方的に文句を言われてたら、ファニアさんが現れてレ

オに抱きついて、一瞬こっちをすごい形相でにらんだ。そのまま強引にレオを引きずっていつてくれた。

助かった。ありがとうファニアさん。

merc oled? 5 o t t o b r e

ファニアさんが夕方ジェラテリアに来て、私に話があるって。おとといレオと何を話してたのかと聞かれた。イッポーリトのこただよ。

私とイッポーリトが彼氏彼女（本当は違う、ぜったいちがう）だと知ったらほっとしたみたいだった。

わざわざ何でそんなこと聞きに來たんだろう。

あれ？ これもしかして、まずいんじゃない？

鈍感なことに、今日記を読み返してみるまで気づかなかった。というか、去年は自分のことで手一杯で他人の色恋沙汰までとても気にしていられなかった。

しかし今思えば、明らかに、ファニアはレオに好意を持っている。レオもファニアには常に優しく接していた。振り返ってみれば思い当たる節はいくつもあるし、男女の関係にあるとしても全く驚かない。

うわーうわー。どうすんの、恋人役とか引き受けちゃって。

これ、またトラブルになるんじゃない？

嫌な予感がする。そして、ふきの嫌な予感というのは大概外れる、予想よりさらに悪い方向へ。

どうしよう。

あまり考えたくなかった。それでなくても今日は色々と感情的に振り回される日だった。

ファニアのことはとりあえず棚上げして、今日の日記をついたらシャワーを浴びて寝る。そう決心するとふきは去年の日記帳をサイドテーブルに突っ込み、今年の日記帳を引っ張り出してペンを走らせた。

l u n e d ? 1 4 o t t o b r e

まったく知らなかったけど、レオと私のことであらぬ噂が立つてたらしく、お父さんに呼ばれた。

はじめて、お父さんに名前呼んでもらえた。はじめて。

お父さんは私なんかよりずっとずっとレオのこのほうが可愛いはずなのに、あくまで公平でいようとしてくれて、すばらしい人なんだなって今さら思った。

私相手に頼みごとするのに頭下げてくれて。

ハグまでしてくれて。生まれて初めて、抱きしめてもらえた。

いろいろあったけど、たぶん今日が人生で一番いい日なんだろう。神様、お父さん、ありがとう。

20・遠野ふきの恋敵

予感的中。

というか、ダーツの的を用意していたのに、大砲を持ってこれられて丸ごと打ち抜かれた気分である。

まず翌朝、フラットの前にレオのアルファ・ロメオが停まっているのを見て胃が痛くなった。ジェラテリア・ベラ・クリスタまで送ってもらい、肩を抱かれて店に入った。強張る身体に無理矢理理性で命令し、引き攣る顔をぴしゃぴしゃ叩いてやっと笑顔を作る。

スタッフの驚きようは凄かった。例によって「付き合ってたの！？」のような質問攻めに遭い、黙っててごめん、ちょっとケンカしてたんだけど皆に心配させたみたいでごめんなさい、と微笑みながら（実際は苦笑い）言い訳する。何だよ大騒ぎしちゃったじゃんよーと背中をバシバシやられたり、仕事場に私情を持ち込むなと苦言を呈されたり、ストレスが溜まることこの上なかった。

昼休みにもレオは来てランチに連れ出され、リストランテ・ベラ・クリスタで食事した。こちらのスタッフの誤解も解いておかなければならないのだった。レオの役者振りには頭が下がる。終始にこやかに笑み、穏やかな声音で（いつも冷たい声しか聞いてこなかったふきは、こんな声してたんだと驚いたくらいである）、料理は取り分けてくれるし食べる速さも合わせてくれるし、非常に紳士的だった。眩暈がして、鳥肌が立った。

並んで歩くときは腰に手を回される。車道側は歩かせてもらえない。支払いも全部持つてもらえる。ついでにレオは見た目もファッションセンスもいい。何やら羨望の眼差しを向けられて、ふきは胃が痛かった。そこを歩いているお姉さん、替わるものなら喜んで替わります、だからそんな形相で私を見ないで。

午後の業務も視線がちくちくを通り越してぶすぶすと突き刺さり、休憩時間の度に根掘り葉掘り訊かれ、やっと1日の業務が終了した

と思つたらレオが店の前で待ち構えているという寸法。そのまま夕方
の街を軽くデートして、フラットまで送られる。今日は頬とはい
え何度キスされたことやら。バーチではなく、頬に唇をつけるキス
である。心臓が持たない、色々な意味で。

そんな事を続けていたら3日と経たずに乗り込んできた。ファニ
ア・ナンニーニ、確か18歳、ふきより3つ年下の、エンツォ・ナ
ンニーニの娘。赤茶けた金髪の美少女で、化粧もきっちりしている
が、その表情が明らかに厄介事を運んできているようで、ふきはげ
んなりした。

丁度早上がりの日で、逃げられそうもない。ふきは仕事が終わる
まで待つてもらい、2人で近くのマクドナルドに入った。何となく
ファーストフードの気分だった。

「Da quando state insieme? (いつか
ら付き合つてるの?)」

「Non mi ricordo precisamente .
. qualche mese f? . (正確には覚えてないけ
ど……何ヶ月か前)」

レオとの打ち合わせで決めたことだった。何となく、気づけば付
き合っていたということにしよう。大体ふきがイッポーリトと別
れたあたりを想定していた。

「Lo ami? (彼を愛してるの?)」

ファニアはハシバミ色の瞳を潤ませていた。ふきは内心で慌てる。
父の大事な娘だ、泣かせたいわけではない。

「……」

「Io lo amo! (彼が好きなの!)」

突然、ファニアは叫んで泣き出した。店の視線が嫌でも集まる。
どうしよう、これ。

ファニアはしゃくり上げながら、切々と訴えた。

好きな、レオが好きな、ずっとずっと好きだったの。誰にも
渡したくないの、どうしてあなたなの、どうして私じゃないの、私

のほうが絶対、絶対あの人のことを真剣に好きなのに。あなた、イツポーリトとも、その友達とも関係があつたっていうじゃない、なのにレオにまで近づくなんて。私、真剣なの、あなたみたいに遊びでとつかえひつかえる男のひとりなんかじゃないの！遊びなら他をあたつてよ、レオに手を出さないで！私はレオを愛してるの！それを涙ながらに訴える相手は、私じゃなくてご本人のほうがいいと思うんだけどなあ。

可愛い女子高生が切々と愛を告白している様は、同性のふきでも中々ぐつとくるものがあつた。ご当人にやればあつさり落ちてくれるのではなからうか。加えてファニアはレオが尊敬するオーナーの娘であることだし。

しかし、嫌なことを思い出させられた。ふきがイツポーリトの不健全なお遊びに付き合わされたことを、ファニアまでが知っている人の口に戸は立てられない。

「Era il tuo ragazzo? (あなたの彼氏だったの?)」

レオめ。彼女はいないのかと訊いた時、問題ないと言ったくせにいや、確かにいるともいないとも言つてはいなかったが。

「? il mio ragazzo! Sono la sua ragazza! (今だつて彼氏よ！私は彼の恋人!)」

何が問題ないだ、嘘つき。若い女の子を　　よりよつてファニアを　泣かせるとは。

ふきはポテトをつまみ、ファンタを一口飲む。イタリアではファンタはほぼ必ずオレンジ味である。グレープが恋しい。

ファニアのように一生懸命な恋をした経験は、ふきにはない。高校時代の同級生で眩しいくらいに青春していたクラスメート達もいたが、ふきがその輪の中に入ることはなかった。ただ一種の憧れと羨望を持って、彼らを見ていただけだ。恋など知らないで少女時代を終えてしまったふきには、ファニアのような女の子はとても輝いて見える。本当に、羨ましい。

恋人なんだから、キスだってしたんだから、なのに酷い、どうしてあなたなの　と感情のままに動けるような素直さは、ふきが失くしてしまったものだ。それを惜しむのは、ふきとしては自然な感情だった。

「Non piangere, non? come pensi.
i. (泣かないで、あなたが考えているようなことじゃないの)」
ふきは、これはお芝居だと説明した。レオに不名誉な噂が立ち、それを解消するための期間限定の仮初のお付き合いだと。だから人がいるところではそのように見せかけているだけで、実際男女の関係は何もない。

誤解させてごめんなさい、とふきはファニアにハンカチを差し出す。思いつきり涙を拭かれたのは、まあ気にしないことにしよう。どうせ1枚1ユーロの安物だ。

ぐずぐずとまだ泣いていたファニアは、ふきの話をにわかには信じられないようで、「Veramente? (本当に?)」と疑わしげだった。ふきは微笑を作って頷く。レオに確認してもいいよ、と。

「Scusa, non sapvo che sei la
sua fidanzata. Non voglio rend
erti triste. (ごめんなさい、あなたがレオの恋人
なんて知らなかったの。悲しませるつもりじゃなかった)」

どうせ芝居は遠からず解消することを伝えたと、ファニアは一瞬目を瞬いた後携帯を取り出して電話を掛けた。相手は十中八九レオだろう。

「Non risponde! Sai dov? Leo?
(出ないわ! レオがどこにいるか知ってる?)」

多分オフィスにいるはずだと言うと、彼女はそのまま飛び出して行った。ふきに礼も謝罪もないまま、ふきのハンカチを握り締めたまま。あれはいつ気づくのだろう。

ファントのストローをくわえる。あの猪突猛進っぷりが、青春と

か若さとかそういうものののだろうか。しかしふきは18歳だったころの自分を思い出して、別に年齢ではないな、と思い直した。太陽のように眩しい光り輝くような恋はファニアにこそふさわしく、ふきには縁のないものだった。どこまでも素直で純真で、裏表がない。ファニアはいい娘だと思う。レオも彼女を大切にしてやればいいのに。

ファнтаを飲み干すと、フタを開けてふきは氷を齧った。口の中の冷たい感覚が心地よかった。

その夜、レオから電話がかかってきた。

『Hai parlato tutto a Fania? (ファニアに全部話したのか?)』

「S? Non fare la tua ragazza preoccuparsi. (はい。彼女さん心配させちゃダメでしょ)」

『Lamia ragazza... (僕の彼女って...)]

「Fania? la tua fidanzata. Haddetto. (ファニアさん、あなたの恋人でしょ? そう言っていました)」

人を、ましてファニアを悲しませるような嘘はつきたくない。そう言つと、レオは電話の向こうで沈黙した。

「レオ?」

『... Perch? ti importa di Fania a cossi? (.....どうしてファニアをそこまで気に掛ける?)』

「Perch? no? sua figlia. (当たり前でしよう? あの方の娘さんですよ)」

『...? Enzo. (.....エンツォか)』

声が低くなった。数日ぶりに聞く、慣れ親しんだトーンだった。

何でそこで不機嫌になるの？

もともとレオはふきがエンツォに近寄るのを良く思っていないかった。エンツォへの好意のあまりクリスタベラやファニアに危害を加えることを懸念していた。ならばそれと逆にちゃんとファニアを氣遣うのは、歓迎こそされても嫌がられる筋合いはないと思うのだが。お節介が過ぎるほどのことはしていないつもりだし。

『Ma adesso sei la mia fidanzata. Fingiti. (だが今は君が僕の恋人だ。ちゃんとそれらしく振舞ってもらおう)』

『Lo capisco, capisco. (わかってます、わかってますって)』

レオは何やら言いよんどんでいたが、結局それ以上は何も言わず電話を切った。

ふきは溜め息を吐く。間髪入れずまた電話がなった。今度は巧からだった。

『やあ、こんばんは、ふきちゃん。レオとラブラブなんだって?』

『そう見えました?』

『いやぜんぜん。レオは後ろに花背負ってたけど、ふきちゃんがチガチだったよ!。芝居なら芝居でちゃんとやらないと』

いつ見に来たのだろう。出歯亀とは巧らしくない真似を。

『まあどうでもいいや。いよいよ来週手術だね、体調にだけは気を付けて』

『ありがとうございます』

『手術が終わったら俺はいったん日本に帰るから。流石に3ヶ月も奥さんほっぽってると限界だね』

『急ですね。そうですか、わかりました』

声が浮き立ったのは気のせいだと思っしてほしい。

『レオと君の関係とか、面白いネタも新しくできてきたから物凄く後ろ髪引かれるんだけどね。でも、まあ彼女が連絡はくれるって言うし』

アビガ。

結局、彼女は巧と協力体制を築くことにしたらしい。憂鬱の種がまたひとつ増えた。

『ファニア・ナンニーニは恋に恋する乙女だよね。ふきちゃん、恋の鞘当も堂々とできるのは独身のうちだけだ。せいぜい楽しみなよ。それじゃ、おやすみ』

ぶつと電話が切れた。

恋の鞘当？

むしろ鞘ごと刀を差し上げて戦線離脱したい。

21・遠野ふきの入院

ガイアやベラ・クリスタには旅行だと告げて、ふきは入院した。退屈だった。念のため早め入院したので手術日まで日がある。ふきは健康体なのでベッドの上で日がな一日過ごすのはとてつもなく退屈だった。

とはいえやたらと動き回って知った顔と鉢合わせはすべてが水泡に帰す。プライバシーを振りかざして名札すら出していないので、今更無用心な真似は出来なかった。

日記帳だけは持ってきたので、とりとめもないことを書きつけていたが、ページを埋めてしまうと本当にやる事がなくなった。入院一日目でふきは既に鬱々とした気分になっていた。テレビをつけても面白くない。イタリア語のバラエティ番組で飛ばされる早口の冗談はふきには半分も理解できなかったし、映画もあったがハリウッドものをわざわざイタリア語吹き替えで観る気にもなれなかった。たいくつ、と声に出して呟くようになったところで、巧が現れた。

「やあ、元気かい？」

「元気ですよ。病気だったらまずいでしょ」

健康体というものはじっとしているようには出来ていない。辛いつたらなかった。

「まあまあ、お土産持ってきたから。はいこれ」

「……何ですか、これ？」

「見ての通りiPod」

「……中身は？」

空っぽのものを渡されても意味がないのだが、そういう嫌がらせを巧は平気でやりそうである。

「んー、ふつうに音楽と、ちょっとボイスドラマ入ってるかな。女の子が好きそうなやつ」

「ドラマ？」

「ああ、トラック3とか6とか10とか、ちょこちょこ」

「何の話ですか？」

「聴いてみれば？」

イヤフォンを耳にはめて言われたトラックを再生してみる。

いきなり喘ぎ声が聞こえた。

そんなに……したら……こわれちゃうよっ……あっ……

イヤフォンを耳から引き抜く。

「……巧さん。な・ん・で・す・か、これ？」

「BLゲームのサウンドディスク。あ、サウンドってのはサウンドトラックとドラマCDあわせたもので、音楽の合間にキャラの掛け合いが」

「いりません！」

「えー。好きかと思っただのに」

「何ですか！ 何で男同士の濡れ場聞いて喜ぶんですか！」

「そういう女の子は多いよ？」

「私を勘定に入れないでください！」

「えー。せっかくうちの奥さんがこっそり買ってたやつを拝借してきたのに。攻めのほうが俺と同じタクミって名前でさ、字は違うんだけど」

「聞きたくありません！」

「残念」

くつくつと笑う巧に、本気で殺意を覚えないでもなかった。絶対にわざとに決まっている。しかもタチの悪いことにiPodの中のファイルはどれもこれもそういう、ボーイズラブ的なタイトルが並んでいた。嫌がらせだ。

「それで、エンツォのことだけど」

がらりと雰囲気を変えて真面目な顔になった巧の変化に、ふきはすぐには反応できなかった。

「……何でしょうか」

「ファニアとエンツォは血が繋がってないって、ふきちゃん知って

た？」

「……………え？」

発せられた言葉の意味を理解するのに数秒かかり、それでも信じられなくて訊き返した。

「繋がってないんだってさ。養子や連れ子じゃなくて、結婚してから出来たクリスタベラの浮気の子。」

エンツォはずっと知らなかったらしいよ。今回の件で腎臓移植が必要だってなって、検査して初めて分かったらしい。親子なら半分はDNA一致するからね、腎移植の話が出た時に真っ先に検査したらしいんだけど、半分どころか全部ハズレ、完璧に赤の他人。適合どころの話じゃなかったってさ。それから家族にひと悶着あったらしいよ」

「……………」

「そんなわけで、君は今のところエンツォの唯一の実子だ、おめでとう」

「おめでとうって……………何がめでたいんですか」

「あれ、嬉しくない？」

自分の醜い、見たくない、嫌なところを巧は的確に突いてくる。

だから、ふきは巧が苦手なのだ。

巧がふきに親愛の情など抱いていないことは分かっている。肉親の情などという甘っちょろいものも巧は持ち合わせてはいないだろう。それでも巧がふきにかまうのは、単に彼自身の興味を満たすためだ。ふきは、体のいいおもちゃにされているようなもの。それくらい読みはつけられる。人の悪意にそう鈍感ではいられない。

「……………何で、そんなこと」

「何でって？」

「それが事実でも、何で私に言うんですか。巧さん、タダで情報くれるほどお人好しじゃないでしょ。というか、それだけですか？」

「まあそうなんだが。そういう言い方は可愛くないなあ」

かわいくなどなくて結構だ。巧は両手を挙げてみせる。

「ご明察。話には続きがある。

まあそんなわけでエンツォの家族はここ2年間ぎくしゃくしてて、夫婦仲は冷え切った。たださえ多感な時期のファニアはすっかり参っちゃって、レオに依存したらしい。もとから恋心があって、レオがまたスマートに優しく包み込むような大人の対応したもんだから、勘違いしちゃってどんどのめり込んだみたいなんだよなあ。今じゃもうものすごい執着っぷり。

だけど」

そら来た。めでたしめでたし、で終わる話は虚構の中にしかないのだ。エンディングの前には必ずネバーがつく。ハッピーエンドはあり得ない。大団円ははじけて霧消し、登りきった山は下らねばならない。

「だけど？」

「昨日の晩、入院前夜のエンツォの部屋をファニアが訪れて、ふたりは泣いて抱き合って和解したらしいよ。クリスタベラとはどうか知らないけどね、娘には罪はないってさ。お前は何も悪くないのに思い悩ませてすまなかった、血が繋がってなくてもたった一人の大切な娘だ。みたいな感じ。いいねえ、麗しの親子の愛情。ホームドラマにできそうだったよ、あれ」

「……っ」

どこで出齒亀してたんですか、というような嫌味も、喉に張り付いて出てこなかった。巧は満面の笑みを浮かべる。

「そう、それ。その顔が見たかったんだよ。いい顔だよ、ふきちゃん。」

本当はファニアとエンツォの関係について知って、浅ましく喜んだところを突き落としてみたかったんだけど。まあいいさ。十分魅力的だよ」

じゃあね、手術頑張って。と手を振りながら巧は出て行った。何も考えられない。何も。

イヤフォンから、ピリリリリリ、と電話の音がする。

『僕』

何かで気を紛らわしていないと、巧の言葉に囚われてしまう。

『ああ、どうした？』

ファニア。だめだ、考えるな。

『うん、どうってこともないんだけど……声、聞きたいなって思っ
て』

しかし甘々なドラマだ。男女でも結構なバカップルなのに、男と男では何と言うかもう。

『ははっ、何だよ、それ。昼間さんざん聞いてるだろうか』

ふきは実際にゲイのカップルを知らないでもないから、男同士だからって必ずしも甘くなるわけではないことを知っている。とかむしるならない。全然ならない。

『そうだけどさ。プライベートで聞く声は、別腹』

これはホモセクシャル版ハーレクインみたいなものではないだろうか。一種ファンタジックな、実際にはそんな有り得ないと突っ込みどころ満載の感じが、かの出版社を髣髴とさせる。

『何言ってんだか』

ほんとだよ、とふきも思う。

ちなみにハーレクイン出版社はイタリアではハーモニーと名前を変えている。ハーレクインとはイタリアの伝統芸能、コンメディア・デッラルテの主要登場人物の名前だから、そのへんで色々あったのかもしれない。

『というのは』

でもこのギャルソン役の声優は割といいかもしれない。初々しくてふきの好みだ。いかにも純粋な青少年という感じの声で実際そういう役どころだが、意外にニヒルな悪役なぞやらせたら合うのではないだろうか。口調は乱暴ではないが、嫌味を繰り出す感じのとそこまで考えて巧を思い出し、ふきは再生をストップした。

だめだ。

結局どれだけ逃避を試みても、巧の言葉に振り回されている。

寝てしまおう。

眠れば何も考えなくてすむ。

m e r c o l e d ? 2 3 o t t o b r e

いよいよ明日は手術。

うまくいきますように。

ちゃんと私の腎臓が、お父さんに適合しますように。

お父さんが、元気になりますように。

おやすみなさい。

22・エンツォ・ナンニーニの家族

レオのアルファ・ロメオで病院に乗りつけたエンツォは、見知った顔を受付の前で見つけて思わず眉を顰めた。

外は良い天気で、気持ちの良い朝だった。加えて昨晚、数年来冷戦状態だった娘と和解を果たし、朝は家の前でお互いに混じり気なしのキスとハグを交わした後で浮き立つような気分だっただけに、エンツォは少々気を害した。

緒貝巧。

どうも好きになれないこの若者は、しかし確かにエンツォの甥であつた。母や兄にも確認を取ってみたが、間違いはない。

20年以上前、エンツォが日本で暮らしていた頃何度か顔を合わせたことはあるはずだが、エンツォの記憶にある利発で大人に好かれていた幼児の面影はどこにもなかった。いや、思い返せば顔立ちなどは確かにあの甥っ子なのだが、人を食ったようなふてぶてしい態度には、あの頃の可愛げを思い出させるものが何ひとつ残っていないなかつた。

だが彼は母や兄には気に入られているようで、何と物腰柔らかな好青年で通っているらしい。「自慢の息子だ」と兄は言うし、「優しい子で嬉しいわ」などと母はすっかり入れ込んでいる。母や兄の話聞けば聞くほど、別人を相手にしている気がした。

その巧はエンツォと目を合わせて口の端だけで笑ったが、ずっと視線を外して踵を返した。挨拶するでもなく、完全に無視した格好である。

エンツォは訝しんだが、紳士用トイレに入っていた巧をまさか追う気にもなれず、受付で用件を告げると看護師に案内されて病室へ向かった。

個室に入り持ってきた荷物を整理すると、エンツォはレオを返した。仕事がある。一から十まで手助けが必要な子供ではなかつた。

看護師がざつとスケジュールを告げる。まずは手術前の最終検査だが、それまでには数時間の余裕があった。着替えを済ませ、看護師が採血を終えて出て行くとエンツォはたちまち暇になった。

「あああ、病室のドアをノックする音がした。」「Avanti！（どうぞ）」と言うとドアが開く。そこに立っていたのは巧だった。

「チャオ、ズイーオ」

「晴れやかな笑み。だがなぜか、好きになれない。」

「何しに来た？」

「何って、見舞いだよ。甥が叔父を見舞っちゃいけないか？」

「……なぜさつき声を掛けなかった？」

「俺、レオが嫌いなんだよ」

「思ってもみなかった言葉に、エンツォは軽く目を見開いた。確かにあの場にはレオもいた。」

「だが、そもそもレオと巧にどんな接点があるというのか。」

「知り合いだったのか？」

「というほどのものでもない。ほとんど俺が一方的に知っていて嫌っているだけさ。向こうは俺の名前も知らないしね。」

「何でレオが来るんだよ？ 入院なんてプライベートなものじゃないか、クリスタベラやファニアはどうしたんだよ」

「……関係ないだろう」

「俺の叔母と従妹なの？」

「関係ない」

「冷たいね。ま、いいさ。離婚すればクリスタベラは他人だし、ファニアとも血の繋がりはないしね。確かに、関係はない」

「……」

「そもそも初対面から、エンツォは巧を好きになれなかった。いきなり現れて、エンツォの家族の最もプライベートなことを昼日中のレストランでぶちまけるような人間だ。幸いにして日本語では

いえ、エンツォが母にも兄にも言わなかったことまで、どこで調べたやら巧は知っていた。

「お人好しだね。浮気した妻とはいえ惚れた女にまだ情があるというのなら分かるけど、他人の娘と知ってもファニアを育てるのかい？」

「ファニアは私の娘だ」

血の繋がりなどなくとも、エンツォとファニアは親子だ。その関係は死ぬまで変わらない。

2年前、血の繋がりがないと知った時。妻の裏切りを知った時。いつ終わりともしられぬ長い透析生活を思っただけで暗澹となった。その上にどんな悪いニュースもいらなかった。考えなくなかった。

だから心を閉ざし、拒絶し、煩わしいことから逃げた。もともとファニアは思春期でコミュニケーションが取り辛くなっており、クリスタベラを介してしか会話が成り立っていなかった。そのクリスタベラとの間にあった信頼が崩壊してからは、家族間の意思の疎通など消えた。

その影で、娘がどんなに傷ついていったか、考える余裕もなかった。鈍感なことに、父親から干渉されずに喜んでいるだろうというくらいに考えていた。ファニアが何か問題を起こせば親として責任を取るつもりではいたが、普段は丸つきり放任だった。そして仕事に逃げた。

ファニアがどれだけ心を痛めていたかを知ったのは、昨晚のことだ。目に涙を湛えてエンツォの部屋をノックした娘に、何かと驚くしかなかった自分を殴りつけた。ファニアがどれだけ自分を心配しているか、自分を愛しているか、涙ながらに訴えられて、この娘が一番寂しかったのだと遅まきながら気づいた。

T i v o g l i o b e n e . N o n m o r i r e .

愛している。死なないで。

たった一晩で、何度その言葉を聞いただろう。ファニアはエンツォに嫌われていると思っただけでいい。実の娘じゃないって分かっ

たから、汚くて嫌われていると思っていた、と咽びながらエンツォに抱きついてきた。強く抱き締め返してやりながら、己の不甲斐なさに思い切り頭を打ちたくなつた。自分と妻の間に何があるうとも、ファニアに罪のあるうはずがないのに。何も知らなかつた彼女が一番苦しんでいたのだと、どうして早く気づけなかつたか。

情けない父親を許してくれと、どれほど謝つたか。嫌うわけがない。ファニアを追い出そうなどと考えたこともなかつた。しかしファニアは2年間、ずっとそれを恐れて怯えてきたのだ。

思ひやつてもやれなかつた自分の不明を恥じ、ファニアに愛していると伝えた。大事な娘だと。

結局ふたりしてほとんど眠る時間も取れなかつたが、それで良かった。手術が終わつて退院したら、遠出して旅行に出かけようと約束した。思えばエンツォが腎臓を悪くしてから家族はパレルモを離れられず、遊びたい盛りの娘には不憫な思いをさせた。

「へえ、そう。じゃあ離婚してもファニアを引き取るんだ？」

「……離婚は具体的には考えていない」

「何でさ。浮気した女だろ」

巧は親指と小指だけを立てて中三本の指を掌側に折り込み、その手を頭の後ろに持つていった。浮気された夫には角が生える、とイタリアでは言う。頭に親指と小指で角を生やすこの仕草は、寝取られ男を揶揄するものだった。

「プライベートだ」

確かに、クリスタベラに対しては胸中複雑だ。以前抱いていたような愛情を再び感じることはおそらく不可能だろう。であるならば、これからずっと一つ屋根の下で暮らすのは精神的には良くないかもしれない。

かといって離婚するのが本当に良い選択肢とも思い切れない。どうするのが一番良いのか、エンツォの中でまだ答えが出ないのだ。ファニアと和解したのはつい昨晚のことである。

だがひとつ確かなことは、離婚しようとするまいとそれはエンツ

オの問題で、巧が口を挟む筋合いはないということだった。

「ふうん。まあ、いいけど。」

イタリアでも離婚率は増えてるのに、さすがにマフィアと関わりがあると離婚は嫌か」

カトリックの教義では離婚は認められていないが、カトリックの総本山であるイタリアにおいてさえ離婚率は近年上昇の一途である。だがそんなご時勢でも、頑なに離婚を忌避する社会は存在する。その代表格がシチリアマフィアだった。シチリアマフィアの血の掟では妻は敬わねばならず、他人の妻に手を出したりすれば処罰は免れないし、愛人を抱えることまでは目をつぶってもらえても離婚経験者は決して幹部にはなれない。

だが、それはマフィアの話だ。

エンツォはマフィアを憎んでいる。そもそもこの腎臓だってマフィアの下らない抗争に巻き込まれたがためだ。そのエンツォを、マフィアの類型で語るとは。

怒りを抑えるのは一苦労だった。

「出て行け」

「はいはい」

巧は一礼すると飄々とした態度でするりと病室のドアを抜けていった。それを見送ってエンツォは熱い溜め息を吐く。

やはり、好きになれない。

23・遠野ふきの土産

手術は恙無く終わった。

全身麻酔のおかげで、大した実感もなく、時間の経過の感覚すらはつきりしないまま、すべては終わった。

下腹部には真新しい縫合の痕があり、心なしか何かが欠けた気もするが、それは前々からの認識によるものかもしれない。

感染の危険を考えて術後48時間は病院に留まることになっていった。手術とはいえ、適切に切って縫い合わせたとはいえ、内臓に到達する深い傷を負ったことは間違いない。感染症の危険は十分にあることだった。

とはいえそうのんびりもしてられない。ベラ・クリスタに申請した休暇はわずか1週間。何事もなくてもぎりぎり間に合うかどうかなの、入院を伸ばすわけにはいかない。感染症になどかかってはいられなかった。

退屈に耐えてひたすら病室で時が過ぎるのを待ち、念のためもう少し入院したほうが本当は良いのだが、と言う医師を押し切って退院の許可をもぎ取った。

抜糸もまだなのにと渋られたが、毎日通院することを条件に何とか折れてもらった。巧の弁舌のおかげだった。通常は手術後4、5日は歩けず、スミーズにいつて抜糸は1週間後、さらに1、2週間術後検査を行ってから退院だが、その日暮らしのアルバイトにひと月も休んでいる余裕はない。それに、受腎者であるエンツォはさらに長い期間の入院を余儀なくされる。数週間に渡って同じタイピングで業務に出てこなければレオに何かしら勘付かれる。1週間が限界だった。

歩けるようになって即座に退院した。付き添いには巧が来てくれた。

「や、元気？」

「まあ何とか……」

術後は熱を出したりもしたが、もともと平熱が低いので何とか誤魔化した。今も全身がだるい。心なしか左下腹部の手術創がじくじくする気もするようないような。

「荷物持つよ。あと、はい、これ」

「……？ 何ですかこれ」

巧はキャリーケースをふきから奪い、代わりに何かの包みをふきに差し出した。

「ヴェネツィア土産。マスク型のチョコ詰め合わせ」

「ヴェネツィア行ってきたんですか？」

「君がね」

「？」

「そういうことにしておかなきゃまずいんだろう？ 君は旅行に出ていた。なら土産のひとつも買ってこないとおかしいじゃないか」

「ああ……」

そこまでは気が回らなかった。本当に、巧は頭がよく回る。

「あと、レオにはこっちな」

そう言つて巧が差し出したのは、イタリアには珍しく丁寧に梱包された小さな箱だった。パッケージの文字を読み取る。

「……ヴェネツィアングラスですか」

「ちゃんとムラーノ島のものだよ」

「でも何で」

「『恋人』なんだろう？ 皆と同じものじゃまずいだろ、レオが拗ねるよ」

「まさか」

それはお芝居だと言っているのに、巧はふきをからかつもりなのかいつまでたってもその設定を引きずる。

「まあ、でも……ありがとうございます」

お芝居ならまわりに分かるようにあからさまにやらなくては意味がない。それくらいがちょうどいいのかもしれない。一度やる

とエンツォに約束してしまつた以上中途半端は出来ない。

「で、これ中身何なんです？ カップとかにしては小さいし」

「指輪」

「……！ ゲホッ、ゴホッ！」

むせた。お芝居にも限度がある！

「た、巧さん！」

「心配しなくてもちゃんとしたやつじゃなくて、幅の広いガラス細工のオモチャだって。宝石もついてない。ちなみにふきちゃんのはコレ。おそろいだからね」

「おそろ……」

絶句するふきの前で巧が取り出したのは、確かに何の飾りもついていないシンプルな幅広のガラスの指輪だった。ピンク色のグラデーションが綺麗に出ている。

可愛い。あまり洒落心のないふきにはこれくらいのシンプルさがちょうどいい。だが。

「レオのはちよつとごつめで青バージョンだよ」

「いくら何でも……」

「イタリアでの愛情表現なんてやりすぎがちょうどいいさ」

「……」

それは事実であつたのでふきは何も言えず黙り込む。ファーストフード店などでも人目憚らずキスをする男女の多いこと。

それに、どのみちふきが何と言おうと、巧は自分が提示した選択肢以外を許しはしないだろう。

溜め息が出そうになった。

「お土産代しめて60ユーロね」

「……………」

もはや溜め息も出なかった。

巧の指示でレオにSMSを送り、パレルモ中央駅に迎えに来ても

らうことになった。つまりこちらもわざわざ中央駅に向かわねばならないということだ。

ダイヤまで調べて、遅延も計算に入れた上で待ち合わせ時間を指定するのだから巧も手の込んでいる。意外にマメな性格なのかもしれない。バックの音でばれるといけないから電話ではなくSMSにしると言われた時には、何のアルバイト工作だと思ったものだった。

駅までタクシーで乗りつけると、巧はホームを指示してあっさり手を振った。

「じゃ、ふきちゃん、俺はこれで」

「どちらへ？」

「空港。帰るよ」

「このまま？」

ふきが驚いたのは巧が手ぶらだったからであって、決して別れを惜しんだわけではない。ないと言っただけ。

「荷物は先に送ってあるから。レオと鉢合わせてもまずいしね。それじゃ元気で」

「はい……巧さんも、お気をつけて」

少しぎこちなくなってしまったが何とかそう言っただけ、巧は笑ってふきをハグし、頬にキスを落とした。ぞわつとしないでもなかった。巧は踵を返すと、そのまま振り返りもせずに行ってしまう。何かとふきを振り回してくれた従兄弟にしてはあっけないほどの去り際だった。

そのまま巧の姿を見送るともなしにぼうつと見ていると、携帯が震えた。レオだ。

「Pronto. (もしもし)」

「Sei arrivata? (着いたか?)」

「S? (はい)」

「Aspettami? Arrivo in 5 minuti. (そこで待っている。5分で着く)」

レオも不思議だ。巧に流されて迎えに来てもらうことになってし

まっただが、よく考えてみれば店以外の場所でもでお芝居をする必要はなかったのではないか。巧に言いくるめられてしまった自分とはともかく、レオまでがその気になったのはなぜなのか、ふきには分かっていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8772s/>

深き沈黙の娘

2011年8月11日03時40分発行